

教育実践総合センター年報

滋賀大学教育学部
Faculty of Education

2024年3月 第7号



SHIGA UNIVERSITY

教育実践総合センター年報 第7号

| | |
|--|-------|
| 1 共同研究事業 | 1 |
| 1) 滋賀県の高校理科に関する実践研究 | 藤岡 達也 |
| 2) デジタル社会の善き担い手の育成を目指す小学校における取組のあり方 ーデジタル・シティズンシップの観点を踏まえた授業構想を通してー | 岳野 公人 |
| 3) 特別支援学校教育相談担当者への心理アセスメント研修の実施 | 山川 直孝 |
| 4) 中学校通常の学級における特別支援教育の推進に向けたコンサルテーションの実施 | 山川 直孝 |
| 5) (平田小学校)アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う 子どもの育成 2023 ～中規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～ | 青木 善治 |
| 6) (米原小学校)アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う 子どもの育成 2023 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～ | 青木 善治 |
| 7) (高宮小学校)アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う 子どもの育成 2023 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～ | 青木 善治 |
| 8) (亀山小学校)アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う 子どもの育成 2023 ～小規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～ | 青木 善治 |
| 9) 学びに向かう力の育成を目指す小学校算数科の授業づくり ー「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の充実を通してー | 大橋 宏星 |
| 10) 確かな学力を身に付け、自ら学び合う児童の育成を目指して ー「読み解く力」の視点を踏まえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくりー | 大橋 宏星 |
| 11) 算数・数学教育実践研究セミナー | 大橋 宏星 |
| 12) 中学校国語科指導力向上プロジェクト研究 | 長岡 由記 |
| 13) 子どもが主体となり、交流活動を通して学びが深まる・広がる授業づくり | 長岡 由記 |
| 14) 幼稚園年長児の筆記行為に関する研究 ～お手紙の形式と内容の分析を中心に～ | 長岡 由記 |

- 15) 生活を豊かに創造する子どもをめざして.....塩見 弘子
～心が動く体験から伝え合いへ～
- 16) 地域の自然環境を生かし, 幼児・保護者・地域をつなぐ.....塩見 弘子
- 17) 中学校外国語科における自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成.....大嶋 秀樹
～1人1台端末を効果的に活用した「Step Up Time」を通して～
- 18) 「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう, 小・中学校における校内研究のあり方.....辻 延浩
～教員一人ひとりのニーズに応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して～
- 19) 大津市中学校部活動地域移行検討懇話会.....辻 延浩
- 20) PBL による学校における働き方改革の取組.....今井 弘樹
～「だいひがスマート委員会」の取組を窓口～
- 21) OJT 研修による人材育成.....今井 弘樹
～心をたがやすボトムアップ～
- 22) 幼稚園における運動遊びを促す実践活動奥田 援史
- 23) 家庭での運動遊びを促す実践活動.....奥田 援史
- 24) 中学校美術科における, 地域と連携した授業づくりの可能性と課題馬淵 哲
- 25) 「なぜだろう?」「わかった!」「またやりたい!」ずっと使える「学び方」の習得北村 拓也
～9年間の学習を見据えて授業を考える～
- 26) 思いをもって聴き, 自分の思いや考えを発信できる伴谷っ子を目指して.....北村 拓也
- 27) 校内研究からみる学校改革渡邊 慶子
～可視化と共有を効率的に実現する Lesson Study シートの改良～
- 28) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊.....森 太郎
- 29) 小学校におけるエージェンシーを育成する学級活動に関する OJT 研修岸本 実
- 30) 中学校社会科における主体的に学習に取り組む態度の学習評価.....岸本 実
- 31) エージェンシーを育む小学校社会科の単元・授業のデザイン岸本 実
- 32) 理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト.....糸乗 前
～小中連携授業を構想する～
- 33) 理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト.....大山 真満
～滋賀 CST 研究会活動～

| | | |
|----|--|-----|
| 2 | 石山プロジェクト | 68 |
| 3 | 出前講義 | 70 |
| 4 | 教職探究講座 | 80 |
| 5 | 教育臨床研究 －SKC キッズカレッジ(滋賀大キッズカレッジ)2023 年度連携活動報告－ | 82 |
| 6 | 情報教育研究 | 83 |
| 7 | 教育実習支援 | 85 |
| 8 | 教師力向上支援 | 87 |
| 9 | キャリア支援の取り組み | 89 |
| 10 | 教員志望について「志望の変遷」を追う | 91 |
| 11 | 業務報告 | 102 |

1 共同研究事業

1) 滋賀県の高校理科に関する実践研究

1. 事業名および担当者

事業名は、滋賀県の高校理科に関する実践研究であり、担当者は以下のとおりである。

教育学系：藤岡達也（代表・トータルアドバイザー）

滋賀県総合教育センター：澤寿朗（係長），権並渉（研修指導主事），木村晋輔（研究員）
長井翔也（研究員）

滋賀県教育委員会事務局高校教育課：河原真（指導主事）

滋賀県立長浜北星高等学校：中川雅彦（教頭）

滋賀県立伊香高等学校：富山昌彦（教諭），滋賀県立伊吹高等学校：堤信明（教諭）

2. 事業の目的

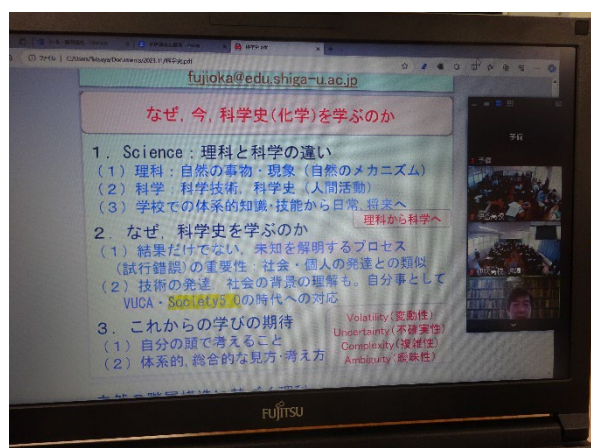
これまで、滋賀大学教職大学院及び教育学系理科講座と滋賀県総合教育センターとでは、学校と連携して派遣された研究員とともに、県内での新たな理科教育の開発に取り組んできた。今年度は、生徒が自ら課題を設定し、探究の過程を通じた学習活動を充実させることで、高等学校理科で育成を目指す資質・能力の一つである、自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度を養うことをねらいとした。さらに、生徒が多様な他者と協働しながら課題に対して科学的に探究するための手立ての一つとして、学校間の連携を取り入れ、その成果を採った。具体的には ICT を活用して、二つの高等学校、滋賀県総合教育センター、そして滋賀大学大津キャンパスを結んだ。

3. 事業の概要

上記のメンバーからなる専門・研究委員会は総合教育センターを中心に3回開催された。また、それぞれの高等学校での研究授業、さらには、滋賀大学と2つの高等学校及び教育センターを結ぶ研究授業も行った。写真は、その画面を記している。まず、研究の最初に滋賀県内の高等学校理科教員を対象として、探究の過程の指導や観点別学習状況の評価の現状についての質問紙調査を行った。これを基に、探究の過程を通じた学習の展開や学習評価に関する教員の実態を把握し、高等学校理科における課題を明らかにして、指導改善の視点を明確にした。

「課題の設定」を重視する探究の過程を通じた指導計画を行うにあたり、本研究では課題の把握（発見）において「自然事象に対する気付き」から

「課題の設定」につなげる学習活動に重点を置いた。具体的には、観察や実験等を通して、他者の意見や得られた結果と自身の考えとの差異を基に、生徒自身で課題を設定する学習活動を実施した。その際、観察や実験等を通して得た生徒の気付きや疑問を授業支援アプリロイノート・スクール(以下、



ロイノートと略記)や協働支援ツール Microsoft Teams などで、クラス内および学校間で共有できるようにした。また、後述の探究シートを活用することにより、探究の過程を通じた学習活動を充実させることを試みた。これらの取組により、生徒が自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度が養えたと言える。なお、本研究では化学基礎において探究の過程を通じた実践に取り組んだ。これは、実践者が化学基礎は物質とその変化に関する基本的な概念や原理・法則を取り扱い、日常生活や社会との関わりを考えさせる特徴をもった科目であるため、物理・生物・地学との関連が深く汎用性の高い科目であると考えたからである。次に本研究では、合同授業型の遠隔教育を行うことによって、探究の過程を通じた学習活動における協働的な学びを充実させることを図った。合同授業型の遠隔教育では、Microsoft Teams などのオンライン会議システムを活用して2校の生徒同士の交流や、総合教育センターの担当者、そしてトータルアドバイザーの自分が専門家として、教師支援型の要素を取り入れた活動を行った。特に本研究では、探究の過程を通じた学習活動を充実させるために先述の開発した探究シートを用いた。生徒は、探究シートを活用することで、探究の過程における学習活動の記録をまとめることができ、自身の学習の過程を俯瞰的に把握することができた。また、探究の過程を通じた学習活動の中で生じた気づきや新たに得た知識を適宜記述することで、学習成果を蓄積し、自己の変容を把握できるようになった。指導者は「課題の設定」「観察・実験の実施」「表現・伝達」の各過程において生徒の探究の方向を導くことができるように、学習の到達目標を検討し、その内容を段階的に示したルーブリックを作成した。ルーブリックの作成にあたっては、生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にしたうえで、生徒に伝わりやすい表現にすることにより、生徒が目指すべき姿をイメージできるようにした。以上、本研究において、指導者は各実証授業における探究シートの記述を基に、評価を行ないながら、改善に向けての検討を重ねた。

4. 今後に向けて

本研究では、資質・能力、興味・関心、進路など、多様な高校生に対して、探究的な活動を促すことを目的とした。生徒自身が見通しを持ち、観察や実験等の取組を通して、他者の意見や得られた結果と自身の考えとの差異を基に、課題を設定する学習活動を行うことを目指した。その結果、ねらいとした探究の過程を通じた学習活動に主体的に取り組むことにつながったと言える。生徒自らが「課題の設定」に取り組むことを重視することや探究シートを活用することで、学習活動に対して見通しをもったり振り返ったりすることができ、これまでの学びを踏まえながら、生徒の科学的に探究しようとする態度を養うことにつながったと考えられる。さらに、探究の過程を通じた学習活動の展開の中で、協働的な学びを充実させるために学校間の連携を行うことで、多様な他者と協働して、課題に対して解決しようとする姿が見られた。ただ、連携を行う場合、今回は方法のための研究の側面も見られたが、どのような目的で、なぜ、高校間で連携する必要があるのかを生徒及び教員も理解しておく必要がある。

今後、高等学校理科に求められる資質・能力を育むために、様々な生徒の実態に合わせた指導計画の充実を図り、学校や個に応じた探究の過程を踏まえた学習活動の推進が一層求められる。特に評価面では、探究活動の中でのルーブリックの効果的な活用を研究する必要がある。総合教育センターでは、これまで物理・化学・生物・地学の各分野を個別に取り上げ、探究の過程を通じた学習活動を提示してきた。さらに、今日注目されている、理系総合的な STEM や文理融合型の STEAM 教育の動向を掌握し、Society5.0 の時代に対応した科学教育の在り方を検討していくことが期待される。

(藤岡 達也)

1 共同研究事業

2) デジタル社会の善き担い手の育成を目指す小学校における取組のあり方 ーデジタル・シティズンシップの観点を踏まえた授業構想を通してー

1. 事業名および担当者

事業名は、デジタル社会の善き担い手の育成を目指す小学校における取組のあり方ーデジタル・シティズンシップの観点を踏まえた授業構想を通してーであり、担当者は、次のとおりである。

滋賀県総合教育センター：近藤敏夫（所長），加藤由紀（主幹），西塚洋（研修指導主事），
橋本雄一郎（研究員），島林正人（研究員）

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課：皆川健人（主査）

栗東市立治田小学校：岩井将成（教諭）

栗東市立治田西小学校：佐藤純一郎（教諭）

大津市立平野小学校：水崎達郎（教諭）

学部教員：岳野公人

2. 事業の目的

デジタル機器が日々生活には欠かせないものになり、学校教育でもいかにデジタル機器、ひいてはネットワーク環境に積極的に関わるか、あるいはネット上の犯罪や事故を未然に防ぐための情報倫理や情報リテラシー育成が期待されている。滋賀県においても、学校教育において昨今キーワードになっているデジタル・シティズンシップを取り上げ情報活用能力の育成のための授業実践をベースにした研究開発を行うことにした。年に4回ほどの協議を重ね、デジタル・シティズンシップ教育とはどのようなものか、何が我々教員にできるのか、生徒たちはどこにたどり着けば良いのか方向性と内容を定め、小学校2校において授業実践を試みる。またデジタル・シティズンシップに関わる授業評価を実施し、県内普及可能な授業モデルを提案する。

3. 事業の概要

本事業では、デジタル技術を活用し、自ら判断し、責任ある行動がとれるためのデジタル・シティズンシップの観点を踏まえた授業構想を行った。その際、特別活動と各教科等とを結び付け、教科横断的に実践できるようにした。また、よりよい発言や行動を促すため、「立ち止まる」「考える」「相談する」の合言葉を設定し、授業実践を行った。さらに、啓発文書等により、学校の学びを保護者に伝え、家庭教育との連携を図った。これらの取組によってデジタル・シティズンシップの観点と日常生活とが結びつく学びとなり、デジタル社会の善き担い手の育成へのきっかけとなった。

研究会の実施回数は、3回(6/5, 8/25, 11/28)である。その様子を写真1, 写真2に示す。授業実践の回数は、20時間(平野小5時間, 治田西小8時間, 治田小7時間:合計20時間)であった。その様子を、写真3と写真4に示す。

研究の成果としては、以下の結果が得られた。

- 1) デジタル社会の善き担い手を育成するための小学校における取組として、授業の中で「感情を確認する」「原因を特定する」「対応を検討する」「行動の準備をする」の四つの指導の流れを「立ち止まる」「考える」「相談する」の合言葉と結び付けることにより、児童への定着が図られ、発言や行動によりよい変化が現れた。



写真1 研究概要の報告と実践報告



写真2 デジタル・シティズンシップについて議論

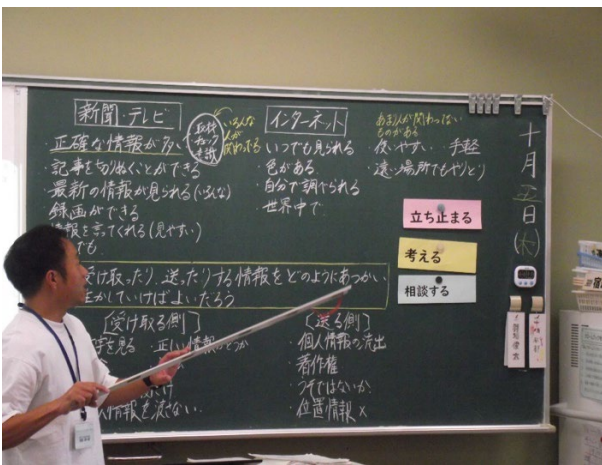


写真3 授業実践の様子1



写真4 授業の様子2

2) デジタル・シティズンシップのテーマと年間指導計画とを結び付け、授業構想を行ったことで、デジタル・シティズンシップに関わる指導が一過性のものではなく、連続性のあるものとして捉えることができた。

3) 保護者向け啓発文書を配付する取組等を通して、学校教育と家庭教育の連携が図れた。このことによって、児童のデジタル社会の善き担い手を目指すために、学校と家庭が一体となり、保護者と同じ方向を向いて課題を解決していく指導がしやすくなった。

4. 今後に向けて

いくつか課題も示された。今後は下記の課題をもとにさらに本事業の推進が期待される。

1) 第1学年から第6学年までの発達段階を考慮し、さらに系統性をより意識した授業構想を行う必要がある。そして就学前教育と中等教育、特別支援教育とも連携した広い視野で研究を進めていく必要がある。

2) デジタル・シティズンシップで扱うテーマに関して、デジタル社会の善き担い手を育成するためには、よりよい活用の方法への学習テーマが不足しているように考えられる。既存の六つのテーマに加え、「活用の方法」や「対処の方法」など、新たな視点の開発が求められる。

(岳野公人)

1 共同研究事業

3) 特別支援学校教育相談担当者への心理アセスメント研修の実施

1. 事業名および担当者

事業名は「特別支援学校教育相談担当者への心理アセスメント研修の実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

滋賀県立鳥居本養護学校：田中亮和教諭

2. 事業の目的

特別支援学校の教育相談担当者は、自校の児童生徒への支援と関わって保護者や担任等への相談、支援にあたるほか、特別支援学校のセンター的機能の役割を果たすべく、小学校、中学校等に在籍する児童生徒、保護者、教員等への相談支援も行っている。相談支援にあたる際には、必要に応じて、心理アセスメントを活用した実態把握を実施したり、児童生徒の観察に加えて、別の機関で実施された検査結果をもとに、児童生徒の支援について助言をしている。本共同研究では、心理アセスメントについての研修を行い、教育相談担当者に対して心理アセスメントの概要、結果の解釈、検査結果の報告、心理アセスメントの倫理面での取り扱いについて理解促進を図ることを目的とする。

3. 事業の概要

(1) 研究実践校の概要

本研究では、研究実践校として県内の特別支援学校1校を指定した。研究実践校では6名の教育相談担当教員がおり、市町の小学校等からの特別支援教育に関する巡回相談、市町教育支援委員会の委員として就学に関する相談等を行っている。

(2) 実施内容

8月に担当者と対面で打合せを行い、その後 Teams で連絡を取りながら参加者のニーズに即したものとなるように内容を検討し、表に示した研修プログラムを立案した。研修は2023年12月20日(水)の放課後に3時間実施した。研究実践校には、小学校等に在籍する児童生徒の実態把握に関すること、個別の指導計画の立案や生活面や学習面での具体的な支援に関する助言等、さまざまな相談の依頼が寄せられている。その依頼に適切に対応できるように教育相談担当教員(以下、担当教員)の専門性を向上させていくとともに、後継となる担当教員の育成が課題になっている。これまで心理アセスメントに関する専門性の向上は、休日に民間の研修会に参加したり、公認心理師や特別支援教育士等の資格を取得したりと個人の努力も大きかった。本研究では、担当教員が一堂に会して学ぶ機会をもち、児童生徒の発達や知能等の把握に関する心理アセスメントの概要についての講義に加えて、検査結果の解釈を含む事例検討を取り入れた演習を行った。演習は、事例に示された児童(小学校通常の学級)についての担当教員同士で適切な支援方法や依頼のあった学校や保護者に助言するかなど3人程度のグループを設けて話し合う場面(図)を取り入れた。この理由は複数あるが例を挙げると、相談のあったケースを担当教員が一人で抱え込むことなく、担当教員どうしで多面的多角的な視点でケースの検討を行うなど、組織的に対応する意義について理解を促すことも意図した。また、本研修をきっかけとしてお互いの相談しやすい雰囲気醸成し、同僚性の向上にもつながるように配慮した点も挙げられる。

表 研修プログラム

| 時間・研修項目 | 内容 |
|-------------------------------------|--|
| 導入 25 分：自己紹介，研修の目的，滋賀県の特別支援教育の現状と課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県の特別支援教育の課題（特別支援学級や通級指導教室の児童生徒数の増加，通常の学級における特別な支援を必要とする児童生徒数の増加等）について説明し，小学校等への児童生徒の支援に関する助言など特別支援学校のセンター的機能が期待されていることを伝える。 |
| 講義 80 分：心理アセスメントの概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の発達や知能等の把握に活用できる心理アセスメントを紹介し，その概要を説明する。 ・チェックリスト方式の検査で比較的簡便な S-M 社会生活能力検査の紹介や発達検査や知能検査の結果の解釈等について説明する。 ・児童生徒の個人情報，検査結果の取り扱いなど，注意すべきことを説明する。 |
| 演習 60 分：事例検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・事例の主訴や心理アセスメントの結果に関する資料をもとに，検査結果からわかることや支援方針等についてグループで検討を行う。 ・相談の依頼をされた学校や保護者にどのように助言をするか等を検討する。 ・グループで話し合ったことを発表する。 |
| まとめ 15 分：ふりかえり | <ul style="list-style-type: none"> ・研修のふりかえりとして，研修の感想やきょうの学びを今後どのように活かしていくかなど感想を話し合う。 ・事後アンケートの記入 |

実際の研修でも担当教員同士で活発な話し合いがなされていた。研修は，今年度から初めて担当教員となった者と約 10 年以上の経験のある担当教員が共に学ぶ場であった。経験の浅い担当教員には事例検討を通じて，教育相談の実践的な実務に関して学ぶ機会になったと考える。また経験の長い担当教員にとっては，教育相談の進め方についてあらためて見直すとともに，人材育成や学校経営への貢献について学ぶ機会にもなったであろう。研修の評価として事後アンケートにより「研修の内容はよかったか」「心理アセスメントの概要について理解できたか」「今後の役に立ちそうか」について 4 件法で実施したところ対象者はいずれも「あてはまる」と肯定的に評価した。同じく自由記述では，「検査の解釈などについて具体的に学ぶことができ，とても参考になった」「今回の研修で学び得た知識など本校のセンター的機能として活かしていきたい」など，担当教員としての知識や経験に幅があったが，参加者の研修への満足度は高く，この研修が担当教員のニーズに即したものであったことが読み取れた。



図 研修の様子

4. 今後に向けて

本研究では，心理アセスメントについて理解を深めたり，小学校の通常の学級に在籍している児童生徒を想定した事例検討を通じて適切な支援方法や助言の仕方を学んだり，特別支援学校の教育相談を担当する教員を対象に実践的な研修の実施を目的とした。主体的に研修に参加する様子や事後アンケートの結果から，本研修の目的は達成できたと考える。今回の研修は専門家である大学教員（筆者）が中心となって進めた。今後は，今回の研修を一つのモデルとし，自校の人材資源を活用して自律的に研修が実施できることをめざしていきたい。今回は日程調整の関係で12月に実施したが，学校の実情に合わせて，新しい担当教員が心理アセスメントや教育相談について年度の早い段階から学ぶことも可能になるだろう。

(山川 直孝)

1 共同研究事業

4) 中学校通常の学級における特別支援教育の推進に向けたコンサルテーションの実施

1. 事業名および担当者

事業名は「中学校通常の学級における特別支援教育の推進に向けたコンサルテーションの実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

滋賀県内公立中学校：X 教諭（本報告では連携先学校名、担当者名の公表を控える）

2. 事業の目的

滋賀県教育委員会が2024年1月に公表した「滋賀の特別支援教育」によると、公立中学校の通常の学級における特別な支援を必要とする生徒数（割合）は4,530人（12.01%）となっている（令和4年9月1日現在）。これは10年前の平成25年度に比べて、対象の生徒数は1.58倍（割合は5.04ポイント）に増えている。このことから、通常の学級において、多様な教育的ニーズを必要とする生徒への個に応じた支援が喫緊の課題になっているといえよう。生徒への支援を充実させるためには、専門的な助言等を要請するなどして、組織的、計画的に取り組むことが求められている。そこで本共同研究では、中学校にコンサルテーションを実施し、通常の学級での支援の充実を図るとともに、中学校において外部専門家が助言を行う際のモデルとなるプログラムの開発をめざしていきたい。

3. 事業の概要

本研究では、実践校として県内の公立中学校1校を指定した。実践校には、今年度約400名の生徒が学んでいる。実践校では特別支援教育コーディネーターX教諭が本研究の窓口となった。通常の学級で特別な教育的ニーズのある生徒（4名）をケースに取り上げ、年間3回（6月、10月、2月）、教職大学院担当者が実践校を訪問し、コンサルテーションとして、授業での観察や関係教員（担任、管理職、学年主任、特別支援教育コーディネーター）と懇談を行った。懇談では、個別の指導計画の記載内容や支援の状況、各教員が課題や不安に思っていることへの助言を行った（表）。

なお、本事業には、教職大学院に在籍する現職教員学生も関与し、コンサルテーションに帯同し、中学校における特別支援教育の現状や具体的な取り組み等について理解を深めた。

表 コンサルテーションの内容

| 時間・研修項目 | 内容 |
|-----------------|--|
| 30分：各生徒についての説明等 | ・日程の確認 ・ケース生徒の主訴、学校や家庭での様子、学校の指導体制についての聞き取り、個別の指導計画等の確認。 |
| 60分：生徒観察 | ・管理職、特別支援教育コーディネーターと、ケース生徒の授業での様子、教員の授業の進め方、実際に行っている支援等について確認する。 |
| 90分：個別の事例検討と助言 | ・管理職、学年主任、担任、特別支援教育コーディネーターと、ケース生徒の実態と今後の支援を中心に検討をする。 ※生徒一人あたりおおむね20分程度 |
| 10分：その他 | ・特別支援教育コーディネーターとコンサルテーションのふりかえり |

コンサルテーションではケース生徒（1年生または2年生）として4名が挙げられた。毎回のコンサルテーションの冒頭では、特別支援教育コーディネーターより、ケース生徒の学校や家庭での様子、学校の指導体制、個別の指導計画の内容についての説明があった。生徒の主訴や具体的な課題としては、「無気力」「生徒同士のトラブルがある」「欠席や遅刻が多い」「授業内容の理解が難しく、教室にも入りにくい」などであった。教員は「あたたかい励まし」「ルールを決める」「個別に声を掛けたり説明をしたりする」「座席等の教室環境の配慮」「教材の工夫」などの支援に心がけていた。個別の指導計画については、支援の対象となる生徒については全員作成されており、教員は学年会といった既存の会議を活用して教員間で情報共有を進めて支援にあたっており、組織的に取り組まれていた。

生徒観察では、管理職、特別支援教育コーディネーターとケース生徒の実態や授業での様子、教員の授業の進め方、支援等について確認を行った。当日、やむを得ない事情で欠席した生徒もいたが、担任や特別支援教育コーディネーターから授業での様子の聞き取りやケース生徒の掲示物などにより理解を図った。

個別の事例検討と助言では、ケース生徒一人ずつ（各20分程度）個別に設定し、管理職、学年主任、担任、特別支援教育コーディネーターと今後の支援を中心に検討を行った。教職大学院担当者からは、具体的な目標の設定や教員の手立てを明確にすることや、支援にあたっては生徒のできることでできつつあることに目を向けることを伝えた。保護者も悩んでいるケースが少なくないことや学校だけでは対応が難しいケースについては、福祉や心理相談など、県内の公的な外部機関を示し、その関係機関へのつなぎ方や連携の仕方等についても説明した。

全3回のコンサルテーションを実施した後、実践校の窓口となった特別支援教育コーディネーターと総括をする場をもった。特別支援教育コーディネーターからは、「コンサルテーションを通して生徒のことをじっくり考えることができた」「対象の生徒への助言が、他の生徒への支援にも活用できることがあった」「支援を進めるのにあたっては保護者との連携が重要になるが、保護者へのアプローチについても考える機会となった」「職員の構成として若手教員が少なくない。若手教員にとっては研修の機会にもなった」などとのコメントをいただいた。

4. 今後に向けて

中学生は思春期の多感な時期にあり、複雑な心理や人間関係を理解することは容易なことではない。中学校においては、小学校よりも不登校生徒の在籍率が高い。今回のケース生徒にも、欠席や遅刻が増えてきていることが主訴のものもあった。発達障害等を背景とした二次的な問題を起こさないためにも、早期の対応が求められる。中学校の特別支援教育と関わっては、中学校特有の課題もあり、一人の担任だけで対応していくことは困難だといえよう。個々の状況に応じた具体的な支援を組織的に展開していくことが求められる。今回のコンサルテーションでは、個の生徒に応じた支援の充実に向けて、校内の教員では気づかなかった点について助言が得られたり、支援の充実につながられたりと成果があったと考える。さらには、ケース生徒について理解を深めることや支援したことが、教員にとっては、ほかの生徒の理解や支援に活かせることも少なくなかった。外部の者が支援の状況について確認する点において、チェック機能を果たすという観点においても意義があったと考える。特別支援教育を推進していくための方法としてコンサルテーションは有効であり、県内に広げ、充実させていきたいところである。県内市町によっては特別支援教育の専門家チームが構成され、小中学校に巡回指導を行っている自治体もある。今回実施したプログラムが参照価値のあるものになればと考える。

(山川 直孝)

1 共同研究事業

5) (平田小学校) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2023 ～中規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2023～中規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立平田小学校：宮崎良雄(校長)，教職員・学級担任等

2. 事業の目的

朝学習時における朝鑑賞(対話型朝鑑賞)の3年目の効果を検証する。小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任がアート・カードなどの美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施している。3年目の効果と課題を明らかにする。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、月1～2回程度、学級担任が美術作品を使用し、朝鑑賞「対話型鑑賞」を実施する。特定の美術についての知識を介さずに作品を楽しむ体験を他者と共有することを通して、アート思考や、想像力や自分で考える力を育てること、自分の考えを話す力や他者の話を聴く力といったコミュニケーションの能力や新しい意味や見方や感じ方並びに自己肯定感を育むことが可能となる。筆者の前任校および、埼玉県所沢市立三ヶ島中学校において効果のあった朝鑑賞を共同研究依頼のあった彦根市立平田小学校において2021年9月より実施し優れた効果が表れている。アート思考や教師の変容にも着目しながら、その効果や課題を更に明らかにしていく。

(2) 成果と課題

朝鑑賞を実施された担任の先生方が記した任意のアンケートにその成果が端的に記されているので紹介させていただく。

- ・様々な発想があり、こんな見方もできると子ども同士で共有できるのがよい。
- ・低学年にしては、この絵は？と題材選びに悩みます。(1年a先生)
- ・どんな絵なのか、子どもたちは楽しみにしています。(1年b先生)
- ・誰がどんなことを言っても認められる雰囲気がある。(2年c先生)
- ・切り返しの発問がしやすくなった。子どもたちの発表の意欲が少し上がったが、題材選びが大変。(3年d先生)
- ・「ああそうなんだ。」「たしかに、それも言える」「私は～と思っています」等々、気持ちを素直に表現する子が増えた。(4年e先生)

- ・間違いはない，言っても大丈夫という雰囲気，反面高学年だから，少しふざけるときもたまにあり困ります。（5年 f 先生）
- ・「そういう捉え方もできるのか」と友達の流れに納得している姿がありました。
- ・私自身絵画やアートに詳しくないので知識がないので，朝鑑賞に取り組むことで自分自身は知識が広がるのでよいと思う。（6年 g 先生）
- ・朝鑑賞の時は自分が思ったこと（「ここが～に見える」など）を進んで発言できる子が多い。（5年 h 先生）
- ・特支は1～6年まで様々な学年があるのでどの絵を扱うか迷う。（低学年のアートカードから選んでいます。）（特別支援 i 先生）
- ・朝鑑賞の時間は自分の思いを話せるよい時間になっていると思う。（特別支援 j 先生）
- ・自分の考えを普段話せない子が多いが何か言おうと一生懸命考える子どもの姿が見られたのがよかった。（特別支援 k 先生）

また，平田小学校の先生方から随時次のような質問や悩みをいただいている。

「高学年になると鑑賞が少し大喜利みたいになってしまうことがあった」「題材選びが大変です」これらの貴重な質問や悩みに対して，筆者は「平田小学校朝鑑賞参観レポート」を随時発行させていただき，その中でQ&Aとして先生方お一人一人のご質問や悩み事に対して少しでも一助になればと思います，発行させていただいてきた。一例を示す。

Q：「去年もこれみた」というものが多くなってきて，題材選びが大変です。

A：アートカードの作品に限らず，好きな絵やイラスト，ポスター，看板などを選んで構いません。選択肢は無限にあります。作品にはそれぞれ著作権がありますが，著作権法第35条によって，授業での使用に関しては，一定の範囲で自由に使うことが認められています。著作権は日本をはじめとした多くの国で著作者の死後70年まで保護されています（保護期間が異なる国もあります）。

作品を勝手に複製するのは著作権の侵害となりますが，学校の授業で子どもたちに配付する場合などは，その公共性から，許可をとらずに使用することができます。使用にあたっては，ルールを守って適切に使うようにしましょう。また，たとえ同じ作品を何年後かに再びみたとしても，一緒にみるメンバーが違ったり，自分自身も変容したりするため，また違った見え方を楽しむことができます。

4 今後に向けて

朝鑑賞の実施3年目を迎えると，題材選びに悩まれる先生方が多くいらっしゃる事が明らかとなった。アートカードは学年部の枠組みにとらわれなくてもよいことや，アートカード以外の題材開発も並行して行う必要性も明らかとなった。より適切な題材を開発していきたい。他校も同様ではあるが，子どもたちは，自分の視点でみて，自分なりの答えを楽しみながら生み出す姿を多く見せていた。そして，3年目を迎えた平田小学校は，どの学級も朝から明るく，子どもたち一人一人がつながっていて，とても温かくしっとりとした雰囲気がある。朝鑑賞の効果や課題を引き続き明らかにしていきたい。

（青木 善治）

1 共同研究事業

6) (米原小学校) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2023 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2023 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

米原市立米原小学校：億田 明彦(校長)，教職員・学級担任等

2. 事業の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施する。すなわち「朝鑑賞」を月1回程度実施し、米原市内の大規模校、2年目におけるその効果や課題を明らかにする。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

「朝鑑賞」とは、朝学活の前に朝読書や朝学習に充てた10分～15分間を使い、担当の教師が絵画等の作品を各教室に持参し、全校で対話型芸術朝鑑賞を行うという取組である。今年度転入された先生方が大勢いらっしゃったので、5月に異動された先生や希望者の先生方に対して、朝鑑賞に関する職員研修会を実施させていただいた。そして、今年度も月に1回というペースで全校による朝鑑賞が実施された。

米原小学校は学年3学級以上の大規模校である。滋賀県内には大規模校も多くあるため、大規模校における朝鑑賞の成果と課題、そして適切な運営方法等を明らかにしていく。

(2) 成果と課題

朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記したアンケートにその成果が端的に記されているので、その一部を紹介させていただく。

・様々な芸術作品に触れることができ、子どもにとってよい体験になったと思います。作品の色や形・作品から受ける印象などいろんな視点で作品を見ることができました。

(1年 a 先生)

・正しい答えがなく、自由に発言できるので、普段授業中に発言しない児童も手を挙げて発言する様子が見られた。書くのが苦手な子もいきいきとたくさん発表する様子が見られた。

(2年 b 先生)

・朝から自分の思いを伸び伸びと発表することができるので、いい雰囲気のまま1時間目の学習につなげることができました。(3年 c 先生)

- ・多様な見方を互いに認め合える機会になっています。また、どの子どもも「どんな意見でも大丈夫」という安心感をもち、自分の考えを伝えることができています。（4年d先生）
- ・大人では感じ取れないものや考えを言ってくれるのでとても盛り上がりおもしろいです。認め合える学級集団になっていると思う。（5年e先生）

米原小学校の先生方から次のような質問や悩みをいただいた。筆者は「米原小学校朝鑑賞レポート」を随時発行させていただき、その中でQ&Aとして先生方お一人一人の悩み事に対して少しでも一助になれたらと思い、以下のような内容のものを発行してきた。「発言が難しい子がどう感じているかを理解するのが難しい」「よりよい追加の発問があれば教えていただきたいです」「終末、教師からの説明はどの程度したらよいのか迷います」「流れについて思ったことを発表する→まとめる→題名を考える→発表以外に何かありましたら、教えていただきたいです」「よりよい追加の発問があれば教えていただきたいです」等々、昨年度と比較すると、継続して朝鑑賞を行っているが故の悩みが多くみられた。

これらの貴重な全ての質問や悩みに対して、筆者は「米原小学校朝鑑賞参観レポート」の中でQ&Aとして表し、少しでも一助になれたらと思い、随時発行させていただいてきた。その一例を示す。

Q1：発言が難しい子がどう感じているかを理解するのが難しい。

A1：ぜひ、ファシリテーターは先生がされているので、挙手していなくても子どもの表情を読み取って指名されてはいかがでしょうか。「何が見えますか」に対してなら、作品にもよりますが、見えていることを述べるので発言しやすいと思われます。その際、答えられなかったら、「また後で考えがまとまったら教えてくださいね。」と伝えてみてはいかがでしょうか。ただし、一番大切なことは子どもが「発言する」ことではなく、子どもが「思考する」ことです。友達の発言を聞いているようであれば、それを受けて発言していない子どもも思考しているはずで、子どもたちの発言などの表面的なことではなく、表情などから子どもたちの内面（思考）を先生は常に捉えるようにしていきましょう。友達の発言をしっかりと聞ける（傾聴）ことの方が実はとても難しいことだと感じています。そんな姿勢でいていただくと幸いです。

4 今後に向けて

朝鑑賞実施2年目を迎えたが、新しく転入された教員を主な対象とした研修会を時間を捻出していただき新年度早々に開催させていただいたことが全校体制で朝鑑賞を継続していく上で非常に効果的であった。子どもたちは、朝鑑賞中に、同じ作品を見ていても、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を発揮しやすく、同時に認めやすい環境もつくられ、自分の視点でみて、自分なりの答えを楽しみながら生み出すといったアート思考の一端の姿も確認することができた。引き続き、子どもたちが互いのよさや個性を認め尊重し合うことのできる環境や朝鑑賞の効果や可能性を今後も追究していきたい。

（青木 善治）

1 共同研究事業

7) (高宮小学校) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成2023 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2023 ～大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立高宮小学校：久保田篤(校長)、教職員・学級担任等

2. 事業の目的

「朝読書」「朝学習」など、小学校には朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施する。すなわち「朝鑑賞」を月1回程度実施し、彦根市内の大規模校における朝鑑賞、2年目の効果や課題を明らかにする。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

筆者は昨年度の6月1日に彦根市教育委員会において毎月開催されている定例校長会において、1時間、「アート思考」や「自己肯定感」を高めやすい朝鑑賞に関する研修会講師をさせていただいた。その後7月に彦根市立高宮小学校より朝鑑賞に関する指導助言の依頼を受け、職員研修会を7月下旬に実施し、2学期より朝鑑賞が実施されることとなり、今年度は2年目となった。彦根市立高宮小学校は学年3学級以上の大規模校である。滋賀県内には大規模校が多くある。したがって、大規模校における朝鑑賞2年目の成果と課題等を明らかにしていく。

(2) 成果と課題

朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記したアンケートにその成果が端的に記されているので紹介させていただく。

- ・朝鑑賞を楽しんでいる子が多いです。発表もよくしてくれて、「もっともっと発表したい!」と思っている子がいます。読書の10分では足りないくらいです。時間配分が難しいです。(1年a先生)
- ・ほとんどの子どもが抵抗なく、人前で自分の意見を発表することができました。とても楽しんでいる様子で、雰囲気もよくなりました。(2年b先生)
- ・子どもたちは生き生きとした表情で作品を見ています。想像力をはたらかせるとともに、友だちの意見に「同じ!」「違う」と反応するようになりました。(3年c先生)
- ・「正しいこと」を発表する場ではなく、思ったことや考えたことを自由に交流する場だと感じられるよう、意識することで、普段はあまり発言しない子も意見を言えたよ

うに思います。授業では答えを言うため先生対1人になってしまいがちな発表の場も友だちの意見を聞いて、「へー」「そうなんか」「たしかに！」等、自然に口から出ているのがいい雰囲気でした。（4年d先生）

- ・もっと全員に発表の機会があればと思うが、10分では数人しか聞けず残念です。もっと少人数で、子どもたちだけで話し合ったり交流したりできるよう指導していくことが課題だと思っています。（4年e先生）
- ・学習ではなかなか発表できない子が活躍できる。同じ絵でも「そんな見方あるのか！」と私自身が気付かされる。（例：ぞうの絵と思い込んでいるけど牛に見える子がいるなど）（5年f先生）
- ・お互いの意見を尊重できる子が増えた気がします。発表できる子が増えた気がします。（5年g先生）
- ・ピカソや岡本太郎などの表現のユニークな作品を見せると子どもたちは、多様な考え方を発言してくれて、楽しく思いを共有することができた。（6年h先生）

また、高宮小学校の先生方から質問や悩みをいただいている。筆者は「高宮小学校朝鑑賞レポート」を発行させていただき、その中でQ&Aとして先生方お一人一人の悩み事に対して少しでも一助になればと思い、以下のような内容のものを発行してきた。一例を示す。

Q:「この絵をみてどう思いますか?」「どこからそう思いますか?」以外に話題を広げるのが難しいです。どうしたら、子どもたちから様々な意見が出てくるでしょうか?

A:「この絵をみてどう思いますか?」という抽象的な投げかけよりも、「何がみえますか?」という具体的な投げかけの方が、子どもたちは答えやすいです。また、子どもの回答をすぐに解釈してまとめるのではなく、あえて「わからず屋」になってみましょう。「どこからそう思ったの?」と返し、その根拠を聞いていきます。そのように考えた根拠を問うことで、子どもは自分の考えを言語化します。そして、それを聞いた子どもたちは、自分の考えと比較しながら、他者の考えを受け止めます。一人一人の考え方の違いに気づくきっかけにもなります。様々な意見というよりも、その根拠を豊かに表現することを促すようにしましょう。作品に応じて「何がみえますか?」ではなく、「何が起きているのでしょうか?」と投げかけてみるのも効果的です。

4 今後に向けて

子どもにとって最大の教育環境は「教師」である。小学校の子どもたちにとってとても影響力のある環境、すなわち教師の在り方が学級の雰囲気づくりに影響する。朝鑑賞を通じて、教師は教える人ではなく、ファシリテーターとして一人一人の子どもたちの考えや意見をより一層尊重するように変容する。そして、子どもたちのものの見方や感じ方にふれることによって、教師自身が学ぶ姿勢が培われていく。この姿勢が学級内における子どもたちの安心感の土台となり、あたたかい雰囲気につながっていることが朝鑑賞2年目を迎えた高宮小学校の学級において確認することができた。また、自分の視点でみて、自分なりの答えを楽しみながら生み出す姿が多く引き出されていた。今後の課題は、転入職員への短時間（30分以内）の研修プログラム開発があげられる。引き続き、高宮小学校の先生方との共同研究を進めながら、その効果や可能性を更に明らかにしていきたい。（青木 善治）

1 共同研究事業

8) (亀山小学校)アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成2023～小規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2023～小規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立亀山小学校：勝間 治(校長)、教職員・学級担任等

2. 事業の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を行う、すなわち「朝鑑賞」を月1回程度実施し、2年目となる。小規模校におけるその効果や課題を明らかにする。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

彦根市立亀山小学校は学年1学級の小規模校である。滋賀県内には大・中・小規模校がある。したがって、朝鑑賞を滋賀県内に普及していくうえでも、小規模校における朝鑑賞の効果や課題、適切な題材等を明らかにしていくことは重要と考えている。2年目における適切な題材や投げかけ等を明らかにする。また2年目における成果と課題を明らかにしていく。

(2) 成果と課題

亀山小学校はコロナ禍の影響もあり、学級において実施されたのは昨年度10月以降となり、今年度は2年目を迎えた。新しく転入された先生もいらっしゃるので、その学級には、朝鑑賞の際に筆者がファシリテーターとなって実際に対話型鑑賞を行い、先生方にはその様子をみていただく形式の研修会を行った。実際の様子を見ていただくことにより、朝鑑賞のポイントを理解していただくうえで効果的であった。

朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記したアンケートにその成果が端的に記されているので示させていただきます。

朝鑑賞を行ってみて、子どもたちの様子や自分自身のことなどで、感じられることがございましたらご記入ください。

・絵を見ることがすきになってきました。「そんな見方もできるー」と、人の考えを受け入れてくれます。(1年a先生)

・答えがない課題なので、発表する子が、自分の発想をのびのび言うことができている。(2年b先生)

- ・普段手をあまり挙げない子の手が挙がる。（3年c先生）
- ・図工の絵を描くとき、鑑賞のことを思い出し、気持ちを入れて作品づくりに取り組めた。（4年d先生）
- ・子どもたちはいろんな見方をしているなど知った。本心の「ああ～！」がよく聞ける。細かなところまで子どもたちは見ていると知れた。（5年e先生）
- ・自由な発言を周りの友達から認められることで発言が増えたり、様々な葉層が出てきたりするようになった。（特別支援f先生）

また、亀山小学校の先生方から次のような質問や悩みをいただいた。「選ぶ作品によって、質問を何と言おうか迷うものがあります」「発表する児童が限られているので、他の子たちの意見が聞きたい」「題材選びに困るので、どういうものを選ぶと話し合いやすいか知りたいです」「特に低学年には、話題にしやすい題材を選ぶのが難しい」等、これらの貴重な質問や悩みをいただいた。そこで昨年度に引き続き、亀山小学校朝鑑賞参観レポートを発行させていただき、その中でQ&Aとして先生方お一人一人のご質問や悩み事に対して少しでも一助になればと思います、継続して記してきたことが個々の先生方の悩みを解決するうえで効果的であった。一例を示す。

Q:選ぶ作品によって、質問を何と言おうか迷うものがあります。

A:確かにそうですね。いろいろ考えると悩んでしまいます。そんな時にはシンプルに朝鑑賞ではファシリテーターに徹してみてもいいでしょうか。

「何が見えますか？」の投げかけに対して、子どもから意見が出た際に、先生がすぐに解釈してまとめたりしないで「どこからそう思ったの？」と必ず返し、その根拠をとことん、追究していきます。要するに、少し物わがりの悪い人を演じます。すると、その子がそのように考えた根拠を言語化し、それを聞いた子どもたちは、学級全体で共有することにつながります。些細な違いに気付くきっかけをつくっていきます。ですから、意見を出させるといっても、その根拠を豊かに表現させるために先生ではなくファシリテーターに徹します。すなわち、教えない人に徹します。また、具体的には「この作品にどんな題名をつけますか？」「この作品からどんな音や声が聞こえますか？」「この作品は、朝、昼、夜のいつごろだと思いますか？」「この絵の外側（右、左、上、下等）には何がみえますか？」「お話をつくってみましょう」などもあります。

4. 今後に向けて

2年目を迎え、同じ作品を見ていても、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を発揮しやすく、同時に認めやすい環境がますます醸成されていることが小規模校の亀山小学校においても確認することができた。また、全ての学級において自分の視点でみて、自分なりの答えを楽しみながら生み出す姿も確認された。新しく転入された先生の学級で、筆者がファシリテーターとして朝鑑賞を実際に行ってみせることも、効果的な研修の機会となることが確認された。より一層、子どもたちが互いのよさや個性を認め尊重し合うことのできる教育実践の連携推進を図りながら更に追究していきたい。

（青木 善治）

1 共同研究事業

9) 学びに向かう力の育成を目指す小学校算数科の授業づくり —「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の充実を通して—

1. 事業名および担当者

事業名は学びに向かう力の育成を目指す小学校算数科の授業づくり—「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の充実を通して—であり、担当者は次の通りである。

滋賀県総合教育センター：近藤 敏夫（所長），加藤 由紀（主幹），
折居 幸子（研修指導主事），中波 慎（研究員）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

指導者が、「読み解く力」の視点を踏まえ、「問いをもつ段階」「多様な考えを生み出す段階」「考えを共有する段階」「解決過程を振り返る段階」の四つの段階に沿った授業を展開する。その中で、児童が数学的な見方・考え方を働かせることや、振り返りの視点を持つことなどができるよう、「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の充実を図る。それにより、児童が解決過程を振り返って統合的・発展的に考察したり、算数で学んだことを生活や学習に活用できないか考えたりすることができるようになれば、「学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度」および「算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度」が養われ、学びに向かう力が育成されるだろうという仮説のもと、小学校算数科において、「読み解く力」の視点を踏まえ、「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の充実を図ることを通して、学びに向かう力の育成を目指す。

3. 事業の概要

本研究では、小学校2校の研究協力校に各校週1回研究員を派遣し、研究協力員とともに、各校の実態や課題を把握し、算数・数学の学習過程における「解決過程を振り返る」ことに重点を置き、学びに向かう力の育成を目指して授業実践を行った。指導者が「読み解く力」の視点を踏まえ、「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導を実践しながら、2回の質問紙調査を実施し、児童の変容を見取ることで、学びに向かう力を育成するための手立てを明らかにしていった。

3-1 「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の充実のための四つの段階

本研究では、学習指導要領に示される算数・数学の問題発見・解決の過程を基本としながら、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりを行った。「解決過程を振り返る段階」が充実するためには、児童が自らの問いをもつこと、多様な考えで問題解決をすること、互いの考えを共有することが必要であると考え、図のように「問いをもつ段階」「多様な考えを生み出す段階」「考えを共有する段階」「解決過程を振り返る段階」の四つの段階において具体的な手立てを打ち、子どもの学びの様子を見とりながら授業を構想していった。

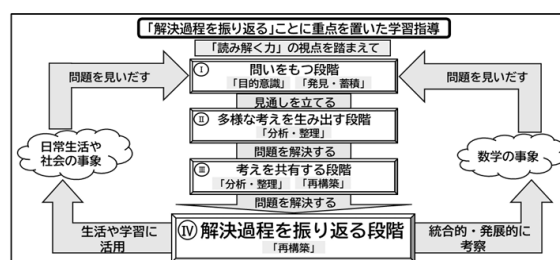


図 学習指導の充実のための四つの段階

3-2 目指す児童の姿の明確化とその取組について

目指す児童の姿を明確にするため、単元を構想する際は、数学科のプロ研の成果物である「単元構想シート」を基に「単元構想シートⅡ」を作成して活用した。「単元構想シートⅡ」には、重点的に育成を目指す資質・能力や、「解決過程を振り返る段階」における目指す児童の姿を記入する欄を新たに設けた。また、家庭学習とのつながりについて欄を設け、学習内容と日常生活とをつなげるような課題を提示するなど、派遣校の実態に応じて、個別最適な学習になるように工夫した。

各時間の授業においては、「授業構想シート」を用いて授業を構想し、本時で目指す児童の姿や、本時で働かせる数学的な見方・考え方、「解決過程を振り返る段階」における、指導者の発問と予想される児童の反応や手立て等を記入した。

3-3 研究協力校の児童と指導者の変容

研究の始期と終期に行った児童質問紙調査や抽出児童の振り返りの記述の様子から、「学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度」の高まりが見られたり、「算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度」の高まりが見られたりした一方、変容の見られない児童が一定数存在することに課題が残った。

指導者対象の質問紙調査では、よりよく問題解決することや、算数での学びと生活をつなげることに重点を置く意識の向上が見られ、「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導について、有用性を感じている記述が多く見られた。

3-4 事業のまとめ

本事業では、算数・数学の学習過程における「解決過程を振り返る」ことに重点を置き、学びに向かう力の育成を目指して授業実践を行った。その結果、以下のことが得られた。

- 「単元構想シートⅡ」と「授業構想シート」を活用することで、目指す児童の姿、授業で働かせる数学的な見方・考え方、解決過程を振り返る際の視点などを明確にしなが、四つの段階に沿った授業を構想することができた。その結果、「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導を充実させることができた。
- 指導者が「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導を継続して行うことで、児童は統合的・発展的に考察したり、算数で学んだことを生活や学習に活用できないか考えたりすることができるようになった。その結果「学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度」および「算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度」が養われ、学びに向かう力の育成につながった。

4. 今後に向けて

- 算数で学んだことを生活や学習に活用するためには、他教科や家庭学習とつなげる活動を継続的に行う必要がある。
- よりよく問題を解決しようとしたり、算数と日常生活をつなげたりする意識をもつことが難しい児童の中には、既習事項が定着しにくい児童がいた。指導者が「解決過程を振り返る」ことに重点を置いた学習指導の中で、一層個に応じた指導の充実を図り、基礎となる学力が定着する指導を行う必要がある。

(大橋 宏星)

参考：滋賀県総合教育センター令和5年度研究員派遣による学校支援に関する研究 研究論文

1 共同研究事業

10) 確かな学力を身に付け、自ら学び合う児童の育成を目指して

—「読み解く力」の視点を踏まえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり—

1. 事業名および担当者

事業名は「確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成を目指して—「読み解く力」の視点をふまえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり—」であり、担当者は次の通りである。

東近江市立能登川北小学校：木村 直人（校長）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

結果だけでなく、「問題場面の的確に把握する（情報を整理すること）」「解答に向かう道筋を自分の言葉で説明すること」にこだわって授業を展開し続けることは、子どもたちの思考力・表現力を育むことにつながるだろうという研究仮説のもと、授業実践・省察を行う。また、子どもたちの学ぶ力を向上させるとともに、指導案検討や事後研究会での学びを教員自身が自分事として捉え、教員一人一人の指導力向上に努める。

3. 事業の概要

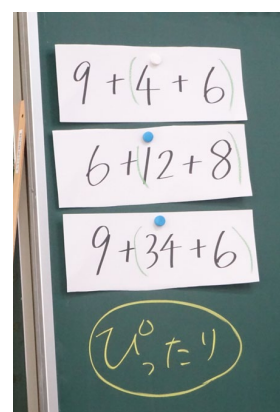
年間を通して、全クラスで研究授業を行い、働かせたい見方・考え方を明確にして、単元計画を立てるとともに、問題解決の際にどのように数学的な見方・考え方を働かせるかを子どもの学びの姿から検証する。算数・数学の問題発見解決のプロセスと、滋賀県の読み解く力の育成を関連付けながら、大学担当者は、事前の指導案検討および事後研究会の指導助言にあたる。

| | |
|-------------------------|---------------------------|
| 5月11日(木) 4年指導案検討 | 9月13日(水) 研究授業③ 2年 計算の工夫 |
| 5月16日(火) 5年指導案検討 | 10月11日(水) 研究授業④ 6年 円の面積 |
| 5月24日(水) 研究授業① 4年 わり算 | 12月5日(火) 1年指導案検討 |
| 6月9日(金) 研究授業② 5年 小数のわり算 | 1月17日(水) 研究授業⑤ 1年 たし算とひき算 |
| 8月24日(木) 2年・3年・6年指導案検討 | |

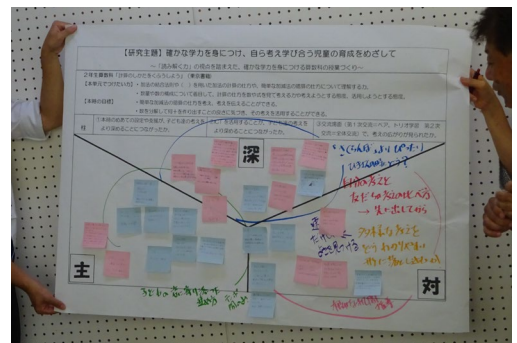
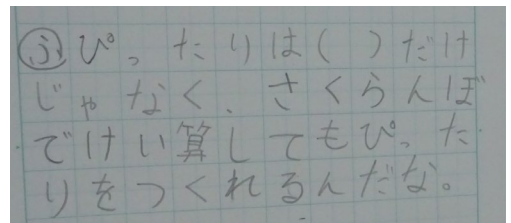
研究授業③ 第2学年 計算の工夫

「簡単な加減法の暗算の仕方を考え、考えを伝えることができる」「数を分解して何十を作り出すことの良さに気づき、その考えを活用することができる」ことをねらいに授業を行った。単元を通して数の合成・分解や結合法則など数や計算の見方・考え方を働かせ、「ピッタリの数」をキーワードにして授業を進めた。

本時では、前時までの学習で3口の加法の計算において、「ピッタリの数」を作ることで計算が容易になることを導入段階で振り返り、本時の課題である $26+7$ をどのように解いたらよいか子どもたちに考えさせるところから



授業が始まった。教師の「昨日までとどこが違う？」という発問に、「ピッタリの数ができない」「3つの計算だったのに2つしか数がない」など、数の見方・考え方を働かせて問題をとらえ、「かんたんに計算するにはどう考えればよいだろう？」と子どもたちで学習課題を設定することができた。その後「簡単に計算するためには今までならどうした？」という教師の問いに対し、「ピッタリの数にする」と答えたが、「この問題でピッタリの数は作れそう？」という教師の問いに対して、悩む姿が見られた。そこで以前の学習でピッタリの数が見つげにくい時の学習を想起させ、「さくらんぼ計算」で数字を分けて考えるという、「見方・考え方」を引き出した。解決の見通しが持てた子どもたちは、自力解決で26を20と6に分けて計算したり、7を4と3に分けて計算したりすることで暗算で計算する方法を見出すことができた。全体交流では、それぞれの考えを交流し、どちらの考えも簡単に計算できることを子どもたちが理解することができた。そこで、教師は「2つの考えで同じところはどこ？」と解決過程を振り返る発問をしたところ、「どちらも数字を分けてピッタリを作っている」と、統合的に計算方法を振り返ることができた。さらに、「ピッタリを作ることができれば、他の問題も解けそう」と、進んで適用題に取り組む姿も見られた。



事後研究会では、「全体交流時の発表の順番や交流の仕方をもっと改善すれば良かった」や「意図を持った交流の在り方」など考えを深めるための手立てとして改善点が出された。しかし、授業者が初任者であり、学習者も2年生でありながら、既習の見方・考え方を働かせることで解決方法を子どもが見出したり、解決した結果を統合的に考えたりする子どもの姿から、改めて見方・考え方を働かせる指導の積み上げの重要性を感じることができた。

4. 今後に向けて

能登川北小学校の校内研究会に携わって、今年で3年目になる。算数の授業では、目の前の1問が解けるかどうか大切なのではなく、見方・考え方を働かせることで、既習の学習内容と結び付けたり、次の学習や生活場面で生きることにつなげていったりすることを意識して指導にあたるのが大切である。能登川北小学校も3年間の取組で、先生方は見方・考え方を働かせた授業づくりを意識して取り組むことができてきた。今後は、子どもたち自身が数学的な見方・考え方を意識して、子ども主体で問題発見・解決もプロセスを回すことができるようにすることを目標としたい。そのために、学校全体の積み上げを意識して取り組むことができるようにしていきたい。

(大橋 宏星)

1 共同研究事業

11) 算数・数学教育実践研究セミナー

1. 事業名および担当者

事業名は「算数・数学教育実践研究セミナー」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町立豊郷小学校：中野 泰弘（研究代表、校長）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

県内の算数・数学の授業改善に熱心に取り組む教職員が集まり、算数・数学の授業実践の交流や最新の教育界の話題について語り合うことで、算数・数学の授業力向上をめざす。

3. 事業の概要

学期に1回程度の実践交流会と、研究授業を行う。大学担当者は、実践交流会における話題提供や授業研究会での指導助言にあたる。今年度は実質2回の実践交流会を開催した。2回目の交流会においては、愛荘町、犬上郡の算数・数学教育研究会とコラボして、全県にセミナー開催を周知し、参加者を募って開催した。講師には、前文部科学省国立教育政策研究所教育課程センター学力調査官、教育課程調査官で、現岩手大学教育学部准教授の佐藤寿仁先生を招いて開催したところ、県内27名の先生方が参加し、非常に実りの多いセミナーとなった。

第1回実践交流会

令和5年7月2日（日）

会場 豊郷町立豊郷小学校

参加者 8名

話題提供の内容

① 滋賀大学教職大学院 大橋宏星

「授業づくりについて」

- ・少人数指導の研究紹介
- ・3年生「かけ算」の実践事例紹介

② 豊郷町立豊郷小学校 古原秀朗 教諭

「1学期の実践紹介」

- ・6年生円の面積

話題提供では、少人数指導の研究成果と3年生「かけ算」の実践事例の紹介をした。少人数指導の研究報告では、自己効力感を高める算数少人数指導のあり方について、グループ編成の方法や数学的な見方・考え方を働かせた指導について報告した。少人数指導については、習熟度別グループ編成や、単純二分割のグループ編成などを実践している学校が多いが、子どもの内面に目を向けたグループ編成での実践報告に、参加者も新たな視点が見られたという意見が出た。また、見方・考え方を働かせることに力を入れた実践報告では、子どもたちが課題を発見する際に既習の学習で働かせた見

方・考え方をもとに、本時解決すべき課題について子どもが発見し、解決の見通しを持ち、解決をしていく子どもの姿を報告した。見方・考え方を意識して取り組むことで、子ども同士の交流も、単に答えを交流するのではなく、解決できていない子どもに着目点を伝えたり、前時までの考え方を参考にしながらヒントを伝えたりと、クラスみんなで解決しようとする姿が見られたことを報告した。

かけ算の実践事例報告では、単元の終末の授業を紹介した。本来は単元末の練習問題に取り組みせる時間であるが、教材を工夫することで、子ども自身が何度も計算問題にチャレンジする実践を紹介した。解決して終わりではなく、「この考えを使えばこんなこともできる」と、解決した過程を振り返り、発展的に問題を捉え、子ども自らが新たな課題を見つけ解決をしていくサイクルについて、参加者からは中学校でも応用ができる実践だから是非やってみようという意見があった。

第2回実践交流会

令和6年2月13日（火）

会場

愛荘町立秦荘中学校

参加者 27名（内3名教職大学院生）

内容

公開授業 中学校1年生 空間図形

事後研究会

指導講話

講師：岩手大学教育学部 佐藤 寿仁 准教授

第2回実践交流会では、岩手大学の佐藤先生をお招きして開催した。愛荘町・犬上郡の算数・数学教育研究部会とコラボし、全県に開催案内を出したことで、県内各地から27名が参加し、事後研究会においても非常に白熱した協議が行われた。佐藤先生の指導講話では、主体的に学ぶということはどういうことか、見方・考え方を働かせた授業とはと、授業づくりの基本的な部分を具体的な授業場面で説明をいただいた。参加者からも「漠然と理解していたものがはっきり分かった。」「非常に分かりやすい話で、明日からの授業づくりにすぐに生かしたい。」と、本セミナーでの学びを非常に高く評価している様子であった。



4. 今後に向けて

小学校教員と、中学校教員がともに学び合う機会はそれほど多くない。また、経験年数が違う教員がざくばらんに授業実践について情報交流することは非常に意味のある活動である。働き方改革が大きな課題になっている昨今、このような自主的なセミナーに参加する先生の数も減ってきている。普段の授業に対する悩みや課題を解決するための気軽に参加できる機会と、教育の最新情報を学べる機会の両方を意識しながら、参加したいと思えるようなセミナーの中身を考えていく必要がある。様々な参加者のニーズに対応しながら、時期や場所、開催方法を工夫して継続してセミナーを続けていきたい。

（大橋 宏星）

1 共同研究事業

12) 中学校国語科指導力向上プロジェクト研究

1. 事業名および担当者

事業名は、「中学校国語科指導力向上プロジェクト研究」である。

【担当者】 滋賀県総合教育センター 学ぶ力向上係 研修指導主事 鎌倉 隆行
滋賀県総合教育センター 学ぶ力向上係 研究員 木村 有佑
学部教員 長岡 由記

2. 事業の目的

本研究は、生徒が自分の考えを形成する資質・能力を向上させるための中学校国語科授業デザインの方法と手立てを明らかにすることを目的とする。そのために、「読み解く力」の視点を取り入れた授業構想・実践を行い、生徒自身が「読み解く力」のプロセスを意識しながら目的意識をもって主体的に学習に取り組む学習を行うことを通して、自分の考えをどのように形成し、資質・能力を高められたのかについて実証的な方法で検討を行う。具体的には、県内中学校の国語科を担当する教諭3名(研究委員)と共に、生徒が自分の考えを形成するために必要な手立ての検討を進める。研究委員は、見出した手立てを活用して授業実践を行い、生徒が考えを形成する資質・能力の向上につながったかを、調査問題や質問紙調査を用いて検証する。授業研究会には学生も参加し、中学校国語科の授業研究と授業デザインについて実践的に学べるようにする。

3. 事業の概要

本事業のスケジュールをまとめたものが、下記の表である。

| | | | |
|-------|---|---------|--|
| 4月 | 研究構想、研究推進計画の立案 | 9月～10月 | 各実践校での授業実践 |
| 6月 | 第1回プロジェクト研究会 (研究の目標と方法の共有、協議) 生徒対象調査問題、生徒および指導者質問紙調査(第1回)の実施と分析 | 10月～11月 | 第4回プロジェクト研究会 (各実践校の実証授業、協議等) 生徒対象調査問題、生徒および指導者質問紙調査(第2回)の実施と分析 |
| 6月～7月 | 第2回プロジェクト研究会 (講義、1学期の実証授業の構想) | 11月 | 第5回プロジェクト研究会 (研究のまとめ、成果と課題の分析) |
| 8月 | 各実践校での授業実践 第3回プロジェクト研究会 (1学期の実践交流、2学期の実証授業の構想) | 11月～12月 | 研究論文原稿執筆 |
| | | 1月 | 研究発表準備 |
| | | 2月 | 研究発表大会 |
| | | 3月 | 研究のまとめ |

第1回プロジェクト研究会：6月2日 ※悪天候のためオンデマンドで実施

第2回プロジェクト研究会：6月16日 (滋賀県総合教育センター)

第3回プロジェクト研究会：8月28日 (滋賀県総合教育センター)

第4回プロジェクト研究会：10月10日 (実践校) *実証授業, 研究協議等

第5回プロジェクト研究会：11月10日 (滋賀県総合教育センター)

【研究仮説】「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりにおいて、思考の過程を可視化するツールである「思考の設計図」や、目指す生徒の姿を明確にした評価の視点等の手立てを用いて、生徒が「読み解く力」の三つのプロセスを意識しながら、見通しをもち、主体的に学習に取り組めるようにする。このような学習活動を繰り返し、生徒が既習事項を振り返ったり、自らの学習の達成状況を確認したりしてこれまでの学びを生かすことを通して自らの学びを調整することができれば、自分の考えを形成する資質・能力の向上につながるだろう。本研究における「考えの形成」とは、「根拠を基にして、思考したことや解釈したことを知識や経験と結び付けて、より確かなものにしたたり、表現したりすること」を意味する。

【研究の成果】紙面の都合上、本研究の成果を「考えの形成」に関わる「思考の設計図」の効果に絞って記すこととする。本研究の大きな成果の一つとして「思考の設計図」の活用を挙げることができる。本研究では、「読み解く力」の視点を取り入れた思考の過程を可視化するツールである下記の「思考の

思考の設計図 《話すこと・聞くこと》



設計図」を手立てとして用いている。このツールの要素を組み込んだワークシートを各研究委員が作成し、生徒が自らの思考過程をこの3段階で意識したり記録したりできるようにした。「思考の素材」は、目的に応じて必要な情報を見つけ、集めた結果を記録する段階である。次の「思

考の加工」は、集めた情報を分析する観点を考えて分類・整理したり、必要な情報を見つけて選定したりする段階である。最後の「思考の組立て」は、目的と相手、目標など、学習の場の設定状況によって、分析・整理した情報を基に自らの考えを組み立てていく段階である。このようなツールを用いることで、生徒が自らの考えを構築していく過程を意識できるようになるとともに、指導者が個々の学習者の思考過程を把握することで一人一人に応じた細やかな支援をしやすくなるという効果が期待できる。生徒対象の質問紙調査項目「国語の授業がなぜ役に立つと思うのか」に対して、研究始期においては「漢字は日常生活でも使うから。／敬語は社会に出て役に立つから。」という何を学んだかということに触れた回答が多かったのに対し、研究終期では「文章を読む力や考える力がつくから。／自分の考えをまとめられるようになったから。」など、自らが身に付けた能力について言及する回答が増えたことから、生徒が「自分の考え」を意識するようになったことが分かる。

4. 今後に向けて

本事業における研究成果を、今後も様々な場面で広めていきたい。 (長岡 由記, 木村 有佑)

1 共同研究事業

13) 子どもが主体となり，交流活動を通して学びが深まる・広がる授業づくり

1. 事業名および担当者

事業名は、「子どもが主体となり，交流活動を通して学びが深まる・広がる授業づくり」である。

【担当者】 甲賀市教育研究所 所長 福永 佐栄子
甲賀市教育研究所 研究員 西川 智子
学部教員 長岡 由記

2. 事業の目的

本研究は，子ども自らが「聞きたい」「伝えたい」と思う気持ちを醸成させ，目的をもった必然性のある交流活動を組み込んだ授業づくりを行い，実践することを通して学習者の「学びが深まる・広がる姿」を具体化することを目的とする。具体的には，①付けたい力を明確化・焦点化し，子どもが主体的に向かう展開を仕組むこと，②目的をもった必然性のある交流活動を仕組むこと，③教師が発問・切り返しの工夫をしていくこと，④子ども自身が考えの変容を実感し，学びをメタ認知できる工夫をしていくことの4つの観点から「学びが深まる・広がる姿」に迫ることを目指す。なお，本事業は甲賀市と大学との連携によって，同市の授業研究体制を構築するための取組としても位置付けている。

3. 事業の概要

本事業は，次の日程で実施した。

- 第1回(4月24日) 研究の主題，内容等についての打ち合わせ (滋賀大学)
- 第2回(9月19日) 授業研究会Ⅰ (甲南第二小学校 4年)
- 第3回(10月3日) 授業研究会Ⅱ (水口小学校 4年)
- 第4回(10月17日) 授業研究会Ⅲ (水口中学校 2年)
- 第5回(12月18日) 研究のまとめ (滋賀大学)

本研究の主題である「子どもが主体となり，交流活動を通して学びが深まる・広がる授業づくり」を行うために，授業研究会Ⅰ～Ⅲでは「(1)目的をもった必然的な「交流活動」にするための具体的な手立て」と「(2)児童が学びの「深まり・広がり」を実感するための具体的な手立て」の2つに重点を置いて取り組んだ。以下，それぞれの研究授業における具体的な手立ての内容について取り上げることとする。なお，各授業研究会の「単元名」は以下の通りである。

・授業研究会Ⅰ

モノログを考えることを通して読みを深めよう―「ごんぎつね」(光村図書，国語4下)

・授業研究会Ⅱ

「ごん日記」を手掛かりに，ごんの気持ちが兵十に伝わる「続き物語」を書いて，読み合おう―「ごんぎつね」(光村図書，国語4下)

・授業研究会Ⅲ

父親に対する思いを捉え，文章にまとめよう―「字のない葉書」(光村図書，国語2)

【研究テーマに関わる授業づくりの工夫について】

(1) 目的をもった必然的な「交流活動」にするための具体的な手立て

授業研究会Ⅰ：「問い」の設定、言語活動の工夫

目的をもった必然的な「交流活動」にするために、本単元では「友達との考えのズレから問いを設定する」活動と、全校に向けて演劇（4年劇場『ごんぎつね』）を発表することを目標として、「ごんぎつね」の魅力や情景をできる限り再現できるようにするための練習や準備を行うというような学習の場の設定を行った。

授業研究会Ⅱ：教材文の全文揭示と書き込み

本単元では、物語を読み、ごんが伝えなかった気持ちを場面ごとに「ごん日記」として文章にまとめる言語活動を位置付けた。登場人物の気持ちを考える際には、根拠となる叙述がどこなのかを考えられるようにするために、教材文の全文を揭示し、根拠となる叙述に線を引いたり学んだことを書き込んだりした。この全文揭示という手立てによって、自分や友達がどの部分を根拠にどのようなことを考えているのかを可視化することができ、それらを踏まえた意見交流を行うことができた。

授業研究会Ⅲ：見通しを持つための学習計画の提示

見通しを持って学習を行うことができるようにするために、授業の始めに1時間の流れを提示するだけでなく、単元の始めに「表現の仕方の違いに着目して、大人になった筆者が父親に対してどんな気持ちを抱いているか、説明する文章を書く」という言語活動のゴールを示すことで目的意識を明確にした。同じゴールイメージを共有したグループで交流を行うことで、学習目的を意識した取り組みができた。

(2) 児童が学びの「深まり・広がり」を実感するための具体的な手立て

授業研究会Ⅰ：振り返りシートの活用、児童の発言への価値づけと可視化

学習者が学びの深まりや広がりを実感できるようにするために、「自己の変容を見通せる振り返りシート」の活用と、「児童の発言への価値づけと可視化」に取り組んだ。特に、学習者が考えた複数の問いに対して、学習前の予想、交流後の自分の考え、振り返りを一枚で見通せる「リフレクションシート（振り返りシート）」を使用することによって、全学習を通して考えたことや学んだことを自覚できるようにした。このシートに自らの考えを書き込むことによって、学んだ内容だけでなく自らの学び方についても振り返ることができるという効果が見られた。

授業研究会Ⅱ：学びの蓄積を可視化するワークシートの活用

「ごん日記」と「今日の新発見」を書き込むワークシートを作成し、単元を通して「ごん日記」を書き溜めていくことの楽しさを感じられるようにした。「ごん日記」はごんの視点からまとめるのに対し、「今日の新発見」は自分の立場から学んだこと等をまとめるものである。この両者の視点から自らの学びの深まりや広がりを実感できるようにした。

授業研究会Ⅲ：振り返りシートの活用と交流

毎時間、授業の最後に振り返りシートを書く時間を設定し、めあてについての振り返りを行い、文章で説明するよう指導した。言語化することで、生徒は自分が理解していることや理解していないことを認識することができた。また、理解しているつもりでも誤解や部分的な理解に陥っていることもあるため、その点について指導者が適切な支援をすることにもつながった。

4. 今後に向けて

授業研究会で取り入れられた効果的な手立てや授業づくりの工夫などの研究成果を、次年度の研究にも生かしていくことが課題である。（長岡 由記，西川 智子）

1 共同研究事業

14) 幼稚園年長児の筆記行為に関する研究 ～お手紙の形式と内容の分析を中心に～

1. 事業名および担当者

事業名は、「幼稚園年長児の筆記行為に関する研究～お手紙の形式と内容の分析を中心に～」である。

【担当者】 教育学部附属幼稚園 教諭 川嶋 美穂
学部教員 長岡 由記

2. 事業の目的

幼稚園年長児を対象としてお手紙が書けるスペースを定期的に設置し、郵便ポストに投函されたお手紙を分析対象として、年長児の筆記行為について形式と内容の両側面から明らかにすることが本研究の目的である。附属幼稚園において定期的に自発的にお手紙が書けるスペースを設置する「お手紙ごっこ」の取組みは、令和2年度および令和4年度にも実施しており、「何を用いて書くのか」「どのように書く（描く）のか」「何について書いているのか」「書字技能について」の4観点からお手紙の分析を行っている。本年度もこの取組みを継続して行い、読み手を意識してどのように書こうと試みるのかについて調査と考察を行い、幼児期の筆記行為の実際について明らかにしていきたい。

3. 事業の概要

幼稚園年長児が書いたお手紙の形式と内容について分析し、その書字実態を明らかにするために、1年間で数回お手紙を書く機会を設定し、どのように書き表そうとするのかについて調査を行った。教室に郵便ポストとお手紙用紙、筆記具を設置し、自由にお手紙を書けるような環境を設定した。なお、このお手紙を書く活動は全員が一斉に取り組むのではなく、書きたい幼児のみが自主的に取り組む活動として設定している。

お手紙用紙は、罫線ありとなしの二種類を用い、縦書きと横書きのどちらでも用いることができる用紙にした。筆記具の種類は、鉛筆、色鉛筆、フェルトペン、筆ペンである。一人で複数枚書いている幼児や手紙を書かない幼児もいるため、分析の単位は「手紙」とする。1年間（4～12月※1～3月を除く）で収集したお手紙の総数は、168通である。下記の表1は、各月の内訳をまとめたものである。

表1 各実施月のお手紙の枚数とポスト設置期間

| 実施月 | 4月 | 5月 | 6～7月 | 9月 | 10月 | 12月 | 計 |
|---------|---------|---------|----------|--------|----------|---------|-----|
| ポスト設置期間 | 4/21～26 | 5/10～12 | 6/16～7/7 | 9/5～22 | 10/23～27 | 12/7～13 | |
| 総数（通） | 30 | 26 | 27 | 31 | 43 | 11 | 168 |

宛先は、月ごとに設定している。4月と9月は西村佳子先生、5月と12月は附属中学校3年生、6～7月は森太郎先生、10月は教育実習生に宛ててお手紙を書く活動を設定している。

お手紙は、主に以下の4つの観点から分析を行うこととした。

(1) 何を用いて書くのか【手段】

- ①用紙の選択（罫線あり、なし） ②筆記具の選択（鉛筆、色鉛筆、フェルトペン、筆ペン）

(2) どのように書くのか【方法】

- ③絵と文字の組み合わせ：絵のみ，絵と文字，文字のみ
- ④使用文字（平仮名，片仮名，漢字，数字，アルファベット）
- ⑤お手紙の表記ルール（宛名・差出人の名前の有無）

(3) 何について書いているのか【内容】

- ⑥手紙の内容（あいさつ，約束，報告・伝達，お見舞い，応援，お礼，質問，など）

(4) 書字技能について【技能】

- ⑦誤字・誤表記（創発的なつづり）

本稿では，上記のうち(2) どのように書くのか【方法】の「③絵と文字の組み合わせ」のみを取り上げて調査結果を記すこととする。

[文字の組み合わせについて]

お手紙をどのように書くのかという方法について，絵のみで描かれているもの（「絵のみ」），絵と文字を組み合わせで書かれているもの（「絵と文字」），文字のみで書かれているもの（「文字のみ」）の3種類に分けて分類したものが下記の表2である。

表2 絵と文字の組み合わせ（単位：面）

| | 4月 | | 5月 | | 6～7月 | | 9月 | | 10月 | | 12月 | | 計 |
|------|----|---|----|---|------|---|----|----|-----|----|-----|---|-----|
| | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | |
| 絵のみ | 12 | 0 | 2 | 2 | 6 | 0 | 2 | 1 | 11 | 1 | 2 | 1 | 40 |
| 絵と文字 | 7 | 1 | 14 | 0 | 8 | 1 | 21 | 7 | 16 | 3 | 8 | 1 | 87 |
| 文字のみ | 11 | 6 | 10 | 1 | 13 | 4 | 8 | 5 | 16 | 11 | 1 | 1 | 87 |
| 計 | 30 | 7 | 26 | 3 | 27 | 5 | 31 | 13 | 43 | 15 | 11 | 3 | 214 |

「絵と文字」の組み合わせについては，絵と文字の関係性の観点から「1. 絵が主」（主に絵が描かれていて，文字は差出人の名前を中心に補助的に用いられているもの），「2. 独立」（絵と文字に関連性が見られず独立しているもの），「3. 相補的」（絵と文字が指し示す内容に重なりがあり，相補的に用いられているもの），「4. 文字が主」（文字が主で絵は記号など補助的に用いられているもの）

表3 絵と文字との関係性（単位：面）

| | 4月 | | 5月 | | 6～7月 | | 9月 | | 10月 | | 12月 | | 計 |
|---------|----|---|----|---|------|---|----|---|-----|---|-----|---|----|
| | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | 表 | 裏 | |
| 1. 絵が主 | 3 | 0 | 4 | 0 | 3 | 1 | 3 | 0 | 4 | 0 | 1 | 0 | 19 |
| 2. 独立 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 3 | 0 | 0 | 9 |
| 3. 相補的 | 2 | 0 | 8 | 0 | 3 | 0 | 16 | 0 | 8 | 0 | 4 | 1 | 42 |
| 4. 文字が主 | 1 | 1 | 2 | 0 | 2 | 0 | 2 | 2 | 4 | 0 | 3 | 0 | 17 |
| 計 | 7 | 1 | 14 | 0 | 8 | 1 | 21 | 7 | 16 | 3 | 8 | 1 | 87 |

の4つに分類した。「絵と文字」の組み合わせから成るお手紙は表面と裏面をあわせると87面あり，それらを分類したものが表3である。

4. 今後に向けて

今回取り上げた項目以外の調査結果と考察等については別稿とする。また，幼児の書字の実際の様子や，お手紙を書く際の思いなどの質的な検討も行う必要があるが，この点については今後の課題とする。調査にご協力いただいた先生方，幼稚園の皆様へ心より感謝申し上げます。（長岡 由記，川嶋 美穂）

1 共同研究事業

15) 生活を豊かに創造する子どもをめざして ～心が動く体験から伝え合いへ～

1. 事業名および担当者

事業名は、「生活を豊かに創造する子どもをめざして～心が動く体験から伝え合いへ～」であり、担当者は次のとおりである。

守山市立河西幼稚園：三木恭子（園長），河合雅代（主幹教諭），白澤佳子（研究主任）

教育学部：塩見弘子（学部教員）

2. 事業の目的

「言葉による伝え合い」については河西小学校区の課題としてあげられている。人の話に関心を持ち最後まで聞くことや、自分の思いを相手にわかるように言葉で伝えることでテーマの「生活を豊かに創造する」ことに向かうと考えている。幼児においては安心して過ごせる環境のもと、子どもの心を揺さぶる環境を構成し、遊びの場面や子どもの姿に応じた適切な援助をしていくことを大切にしたいと考える。その中で「自分の中で対話する」「つぶやく」など伝え合いの過程に焦点を当てて、その要因や育ちに必要な環境や援助を検証していきたい。

3. 事業の概要

- ・各学年の研究保育を行い、その幼児の姿から「自分の中で対話する」「つぶやく」などの姿を読み取り、言葉による伝え合いへの過程や要因を検証していく。
- ・幼児の発達の時期を捉えて、安心できる環境、心動かされる体験が生まれる環境や援助を探っていく。

（1）研究保育事例から

(i) 5歳児6月事例「色水づくり」

自由に花を摘んで色水を作っている。気の合う友達と一緒に花を摘んでいた。それぞれが花を選んで、気付くことがあると友達に伝えている①。伝え合うことが生まれている要因としては、継続して遊んでいるので自信をもってできる遊びである（自発）、自由に摘める花がある（環境）、気の合う友達がそばにいる（友達との距離感）が読み取れた。



(ii) 4歳児11月事例「築山で土の塊を見つけて」

築山で水を流して遊んでいたが、A児が「（土の）塊があった！」とそばにいる幼児に伝えた。するとその様子を見て他の幼児も寄ってきた②。しばらくして少し離れた場所で土の塊が転げ落ちていく様子をじっと眺めているB児の姿があった③。②では、発見したり気付いたりしたことはすぐに声に出て人に伝えていた。③では、土の塊が転が



り落ちていく様子をじっと凝視していて、不思議に思ったり思考しているときはすぐに言葉には出ないで自分の中で問いかけている姿が読み取れた。

(iii) 3歳児 12月事例「先生できたよ、食べて！」

ままごとの場で、それぞれがごちそうづくりをしている。ごちそうが出来上がると「先生できたよ、食べて！」と担任を呼ぶ。その声に応じて担任がやってきて食べてもらうと満足そうである④。その担任の動きにつられて、他の場にいた幼児も集まってきたり、自分も作ったごちそうを担任に「食べて」と差し出している幼児もあった⑤。



④

⑤

ままごとの場でも製作遊びの場でも、何人かの幼児が同じ場で遊んでいるが、やり取りはあまりなく自分の思いで作ったりやりたいことをしている姿が多い。しかし、どの幼児も担任を意識していて「先生に食べてほしい」という思いがあるように感じた。加えて、担任の動きが幼児を引き寄せており、友達同士のつながりの要になっているように読み取れた。

(2) 考察

(i) 「言葉による伝え合い」に向かう過程としての様々な姿

- 自分の中での対話・つぶやき⇒思考しているとき、不思議だなあと感じているとき
- 思わず発信する⇒気付いたこと、発見したこと、心が動いたこと
- 聞いてもらう喜び⇒先生や友達との安心できる関係
- 伝え合う関係性⇒人との距離感、そばにいる、集まってくる

(ii) 安心できる環境、心動かされる体験が生まれる環境や援助

<環境>

- ・興味関心を高めじっくりと向き合っ遊べるモノとの出会いがある
- ・自分の力量で使いこなせていろいろ試せる用具や場がある
- ・自分のやりたいことができる場が保障されつつ、友達が程よい距離感でいてくれる

<援助>

- ・幼児の好奇心や興味を高める環境と出合うきっかけを作っていく
- ・試したり思考しているときは見守り、伝えたい気持ちの高まりのタイミングで声をかけられるといいのではないか
- ・保育者は幼児のしていることを関心をもって見ていて、必要な時に関わっていく

4. 今後に向けて

3歳児では先生への信頼からの安心感が土台で、先生に意識を向けながら友達と一緒に楽しんでいる。4歳児ではモノを介しての友達とのつながりの中での関係性が生まれている。5歳児では近しい友達との遊びや関係性の中で伝え合いが生まれている。このように年齢発達における育ちの違いにより、保育の中で自分、友だち、保育者との関係性が少しずつ変化してきていることがうかがえる。

今後は年齢発達による育ちの違いを意識して、より具体的な活動事例の検証を重ねテーマに迫っていききたい。また、幼児期から児童期への架け橋期にも着目して研究を続け、学区での取り組みにつながるように考えていきたい。

(塩見弘子)

1 共同研究事業

16) 地域の自然環境を生かし、幼児・保護者・地域をつなぐ

1. 事業名および担当者

事業名は、「地域の自然環境を生かし、幼児・保護者・地域をつなぐ」であり、担当者は次のとおりである。

大津市立上田上幼稚園：松田佐代子（園長），井上麻希子（保育主任）

教育学部：塩見弘子（学部教員）

2. 事業の目的

本園は地域の拠点として、自然環境が豊かな地域の良さを生かし、幼児・保護者・地域をつなぐ取り組みを継続して行っている。近年地域は少子化が進み、学区外からの通園も多くなってきているが、「地域みんなで子どもを育てる」風土が長年根付いている地域であり、地域の方々は幼児を学区内外問わず温かく見守り協力的である。以前より幼児と地域の方との関係は自然環境を生かした取り組みを通して培ってきたものがある。加えて保護者・家庭とのつながりを増し、将来に向けて園・地域・家庭とつながりを持ち持続可能な循環を築いていきたい。

3. 事業の概要

- ・「さとやまようちえん」事業を中心に、年間を通して、園，地域，家庭で共に自然環境を生かした取り組みを続ける。
- ・幼児と地域の方との交流ではそのことを家庭に伝えたり，保護者も参加できる場を持ったりしていく中で，保護者を含めた地域全体として取り組みへの意識を高めていきたい。
- ・事業を通しての幼児の育ちを中心に様々な面から成果と課題を検証し，今後も継続した取り組みとしていきたい。

(1) 「さとやまようちえん」令和5年11月9日（木）実施

①「さとやまようちえん」事業の経緯

今年度で11年目を迎える。自然豊かな地域であるが，その自然をより身近に感じて遊べるようにと，地域の方が園から徒歩30分の里山で園児が遊ぶ場を提供してくださっている。

本園としても，開かれた幼稚園として地域の方とのつながりを大切にすることの意義を感じており，園児と地域の方とのつながりだけでなく，その交流の様子を保護者の方にも伝えていくことで，より広く意識の変容を図ることができると考えている。今後の持続可能な取り組みとしていきたい。

②活動の内容

- ・地域の方が園児が安全に遊べるよう，里山を整備したり，収穫した米を炊いて食せるように準備したり，看板も手作りして迎えてくださっている。
- ・4，5歳児が地域の里山（収穫後の田圃，山の斜面，森の木々など）に出かける。
- ・土手の斜面を滑って遊ぶ，柿や柑橘など取って食してみる，田圃の感触を楽しむ等，自然環境の中で思い切り自由に遊ぶ。

③活動の様子

毎年4、5歳児が出かけているので、5歳児は昨年度のことを覚えていて、到着するとすぐにお目当ての所で遊び出す。4歳児は初めてで斜面を上り下りするのも恐々だったが、その様子を見た5歳児が手を貸している姿もあった。

柿を見つけ取りに行くと、地域の方が手を貸してくださった。何度かすると園児同士で協力して取っている姿があった。

昨年度は広い田圃で走り回って遊ぶ姿があったが、今年は前日までの雨で田圃がぬかるんでいた。そうすると長靴で歩くのだがぬかるむ感触が面白く、友達と一緒にそのことを楽しむ姿がみられた。

お昼前になると、昨年度のことを覚えている5歳児が指示がなくてもかまどに使う薪を「これがよく燃えていい」と言いながら拾い集める姿があった。



④活動を通しての成果

- ・ 幼児の学びの面では、4歳5歳と経験することで昨年度の経験が生きている姿が多々見られた。自然環境はその年々で違った様子を見せてくれたり、普段経験のない場であったりするので興味を持ちチャレンジする姿が多く生まれる。4歳児にとっては初めてのことばかりで最初は不安そうな様子があるが、5歳児に助けられたり、友達の様子に誘発されてやってみる姿が多々あった。地域の方との関わりを実感できる場面も生まれている。
- ・ 園としては、地域の方の協力があって実施できている活動であることに感謝の気持ちを持ち、ここでの園児の姿を保護者にもしっかりと伝えていきたいと思っている。また園児自身もここでの経験は心に残るものであり自身が親にも伝えていけるだろう。その両面から保護者にも地域への関心の高まりを期待したい。

(2) その他の取り組み

菜の花畑の散策、筍掘り、川遊び、七夕の笹取り、コスモス畑で遊ぶなども地域の方のご協力で季節ごとに地域の自然に触れる活動をしている。また日常的に季節の自然物（植物、生き物など）を届けてくださっていて、園児も普段から様々な地域の自然に触れる機会が多く持てている。

そのような地域の方とのつながりの深さを日々保護者の方にも伝えることで、そのことが本園の良さと捉え、卒園後も親子で足を運んでくださる姿につながっている。

(3) まとめ

この機会に地域の方から地域活性の事業に対する思いをお聞きすることができた。「本地域は人口減少が続いているので、地域の活性のために、学区外の方にも関心をもってもらえる事業に取り組んでいる。この里山で今日は園児の遊ぶ場としたが、別日にはシイタケの原木に菌を打ち込む活動等広く呼び掛けて行っている。」

地域の方の思いを感じながら、幼稚園が地域との関係を広めていくこととで、共に地域を愛し活性化につながるよう考えていくことが望まれていると感じた。

(塩見弘子)

1 共同研究事業

17) 中学校外国語科における自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成 － 1人1台端末を効果的に活用した「Step Up Time」を通して－

1. 事業名および担当者

事業名：「中学校外国語科における自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成
－ 1人1台端末を効果的に活用した「Step Up Time」を通して－

| | | |
|------|--------------------------|--------------|
| 担当者： | 上窪 華湖（滋賀県総合教育センター） | （研究立案・実施・総括） |
| | 辻村 元喜（高島市立湖西中学校） | （実証授業研究） |
| | 高田 倫子（守山市立守山南中学校） | （実証授業研究） |
| | 中井やよい（滋賀県総合教育センター） | （研究企画・支援） |
| | 宇田 竜子（滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課） | （研究支援） |
| | 加藤 由紀（滋賀県総合教育センター） | （研究統括・支援） |
| | 大嶋 秀樹（滋賀大学） | （研究支援） |

2. 事業の目的

本事業では、中学校外国語科（英語）において、1人1台端末を効果的に活用し、日常的な話題等について即興でやり取りを行う言語活動を通じて、生徒の外国語（英語）で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成を図ることを事業の目的とした。具体的には、1人1台端末を授業や家庭学習において効果的に活用し、既習事項や新出言語材料を段階的に取り入れて即興でやり取りを行う「Step Up Time」を毎時間積み重ねていくことで、生徒が外国語（英語）で自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成することを目指すこととした。

3. 事業の概要

本事業では、年間3回の研究推進委員会を実施し、本事業に係る研究の推進計画の立案と実施、及び検証、実証授業研究の実施計画の立案と検証を進め、研究成果を研究論文（滋賀県総合教育センター）にまとめ、滋賀県総合教育センターで開催の研究発表会で発表と交流を進めた。研究論文、及び研究発表会の内容は、引き続き、滋賀県総合教育センターのホームページや今後開催の各研修会を通じて、研究成果としての発信と交流を進めていくこととしている。

実証授業研究では、授業研究、生徒・指導者を対象とした質問紙調査及び面接調査を取り上げて実施した。実施は、夏休み前の時期と秋の時期の二つの期間にわたって行い、実証授業を通じた研究を進めていった。実証授業研究は、中学校第1学年と第3学年の生徒を対象に、「話すこと（やり取り）」の領域の研究に焦点を当て、守山市立守山南中学校、高島市立湖西中学校を基幹研究校に実施した。

本事業の研究を進めるにあたり、以下の4点の具体的な内容を実施した。

- (1) 指導者が「CAN-DO リスト」の学習到達目標を踏まえた話題を生徒に示し、即興でのやり取りを通して自分の考えや気持ちを伝え合う「Step Up Time」の時間を設定した。

-
- (2) 「Step Up Time」では、生徒は、1人1台端末に配付された「Step Up Card」に沿って、即興でのやり取りに取り組んだ。実証授業研究では、生徒が「Step Up Card」に記録している内容を基にやり取りが行えているかを指導者が支援し、確認した。
 - (3) 実証授業研究を通じて、指導者は、生徒が主体的に学習を進めることができるよう、1人1台端末に配付されているループリックや録画・録音された生徒の発話、即興でのやり取りを行うためのモデル動画を生かした学習支援を進めた。
 - (4) 研究の進捗状況の検証にあたっては、「Step Up Time」での言語活動の様子やループリックに基づいたパフォーマンステストからのフィードバック、始期と終期に行う生徒質問紙調査の結果等を基に、生徒が即興でやり取りを行い外国語（英語）で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成につながっていたかについて分析を行った。

本事業の研究からは、以下の3点が成果として認められた。

- (1) 生徒が目的や場面、状況を意識して即興でのやり取りを行うために、生徒にとって関心のある事柄を話題にした「Step Up Time」を積み重ねることで、生徒は自分の発話に自信をもち、伝わった喜びと達成感を得ることにつながった。
- (2) 生徒が「Step Up Card」を活用し、発話内容を整理したり、互いに助言し合って記録したりすることで、生徒は粘り強く学習に取り組むことができ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が図られ、外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成することにつながった。
- (3) 1人1台端末を効果的に活用し、ループリックやモデル動画を生徒が見返すことで、生徒は「Step Up Time」において見通しをもち、単元の目標に向かって学習を調整する姿につながった。

4. 今後に向けて

今後の課題としては、以下の2点があげられた。

- (1) 言語活動において生徒が自信をもって自分の考えや気持ちを伝え合えるようにするため、生徒の体験等に基づき、日常的、社会的な話題を含め、より関心のある事柄で話題を設定する必要がある。
- (2) ループリック等を生徒の学習状況に合わせて改良するなど、1人1台端末を効果的に活用し、即興でのやり取りをより活発に、継続して行う必要がある。

今後は、課題についてもさらに検証と検討を進め、生徒のより良い、豊かで充実した質の高い学びの実現のためにも取り組んでいきたい。

(上窪 華湖・辻村 元喜・高田 倫子・中井やよい・宇田 竜子・加藤 由紀・大嶋 秀樹)

1 共同研究事業

18) 「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方～教員一人ひとりのニーズに応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は「『新たな教師の学びの姿』の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方～教員一人ひとりのニーズに応じた『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を通して～」である。担当者は次のとおりである。

教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）：辻 延浩，教育学部附属小学校：楠見丹生子副校長
滋賀県総合教育センター：稲益圭吾研究員，島内佑祥研究員，菅原薫研修指導主事，高橋利彰主査
多賀町立多賀小学校：奥村いつ子教諭，東近江市立玉緒小学校：辰巳彰啓教諭，守山市立守山小学校
：井上理奈教諭，東近江市立五個荘中学校：安居 新教諭，近江八幡市立八幡中学校：西山 晶博教諭

2. 事業の目的

本研究では、プロジェクト研究実践校において校内研究主任を務める研究委員が、校内研究活性化に関する研修と実践の往還を通して教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究の取り組みをまとめるとともに、成果と課題について検討した。

3. 事業の概要

(1) 教員の学び(研修観)の転換と児童生徒の学び(授業観・学習観)の転換

児童生徒の学び(授業観・学習観)の転換を目指すとともに、教師自身の学び(研修観)を転換し、『新たな教師の学びの姿』(個別最適な学び，協働的な学びの充実を通じた『主体的・対話的で深い学び』)を実現するという改革の方向性が示されている(文部科学省，2022)。本研究では、教員の学び(研修観)の転換を通して自ら進んで学ぶ姿を引き出していく。校内研究で教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで、教員の学び(研修観)の転換を促進する。そして、児童生徒の学びに対する教員の捉え方の転換へとつなげ、実践と省察の往還を通して、授業改善へと結び付けられるようにする。教員は、授業改善を通して、児童生徒の学び(授業観・学習観)の転換を図る。

(2) 教員一人ひとりの学び(研修観)の転換と校内研究

校内研究の取組を協働的に行うために、研究成果物である「校内研究プランシート」を、校内研究主任が年度当初に作成する。「校内研究プランシート」には、学校教育目標，児童生徒の実態，目指す児童生徒の姿，校内研究の主題，課題解決に向けた「共通実践」について記述する。校内研究を推進する際、シートを活用し、これまでの取組の省察と協議をすることで、校内研究の内容や方向性を共有でき、見通しをもって継続的に取り組めるようになると考える。また、校内研究主題からグループのテーマを設定し、教員一人ひとりが学びたいテーマに応じてグループに所属する。その後、個別に目標を含む課題を設定し、研究に取り組むことで、教員一人ひとりのニーズに応じながらも学校として一つのまとまりをもった校内研究を進めることができると考える。このように、教員一人ひとりが自校の課題を自分事として捉え、主体的に学ぶことを通して、教員の学び(研修観)の転換につなげる。

(3) 教員の学びの変容

教員を対象とした質問紙調査第1回(6月)および第2回(11月)を実施した(図1)。設問①「校内研究にめあてをもって参加している」に対して「当てはまる」と回答した教員の割合は23%から31%に増え、「どちらかといえば、当てはまる」と合わせると87%から95%に増加した。設問②「日常的に教員間で授業や児童生徒の学びの姿について意見を交わしている」に対して「当てはまる」と回答した教員の割合は27%から33%に増え、「どちらかといえば当てはまる」と合わせると84%から92%に増加した。教員の意識が変容した一因として、教員一人ひとりが校内研究を自分事として捉えて研修と実践の往還に取り組めるように、校内研究主任が校内研究のもち方などを工夫したことが考えられる。また、設問③「自分自身の強みを把握している」に対して「当てはまる」と回答した教員の割合は15%から21%に増えた。設問④「自分自身の課題を把握している」に対して「当てはまる」と回答した教員の割合においても35%から43%に増えた。自身の強みや課題の把握が促進された一因として、「授業アップデートシート」の活用が挙げられる。また、校内研究会を終えて「校内研究主任の声掛けをきっかけとして、研究授業に向けて学年全体で取り組めるようになった。研究授業や校内研究に対する捉え方も変わり、指導案も十分に練ることができた」という感想が聞かれるなど研修観の変容が見られた。これらのことから、校内研究活性化に向けた実践が、授業改善に向かう「主体的な姿勢」へとつながったと考えられる。

設問⑤「児童生徒が個別最適に学ぶ姿を具体的にイメージできる」に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した教員の割合は、81%から92%に増えた。特に「どちらかといえば、当てはまる」の回答が大幅に増えた。設問⑥「児童生徒が協働的に学ぶ姿を具体的にイメージできる」に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した教員の割合は91%で変化しなかったが、「当てはまる」と回答した割合が大幅に増加した。この変化について、第8回プロジェクト研究会において、「『個別最適な学び』や『協働的な学び』を経験した成果」としたうえで、「『協働的な学び』は取り組みやすいが、『個別最適な学び』には難しさを感じる」という意見が出され、今後の校内研究では「個別最適な学び」の充実をより意識して取り組むなど、さらなる校内研究の活性化に向けて目指す方向性を明確にすることができた。

4. 今後に向けて

校内研究会での「協働的な学び」を契機として教員の学び(研修観)の転換と授業改善が進み、児童生徒の学びの姿に変容が見られた。今後、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、校内研究を通じた教員の「個別最適な学び」の充実が求められる。そのためには、教職経験が異なるメンバーで語り合うためのG-OJTを活用するなどして、課題別研究グループを編成するとともに、メンタリングの知識を備えたリーダーの育成と効果的な運用が必要である。(辻 延浩)

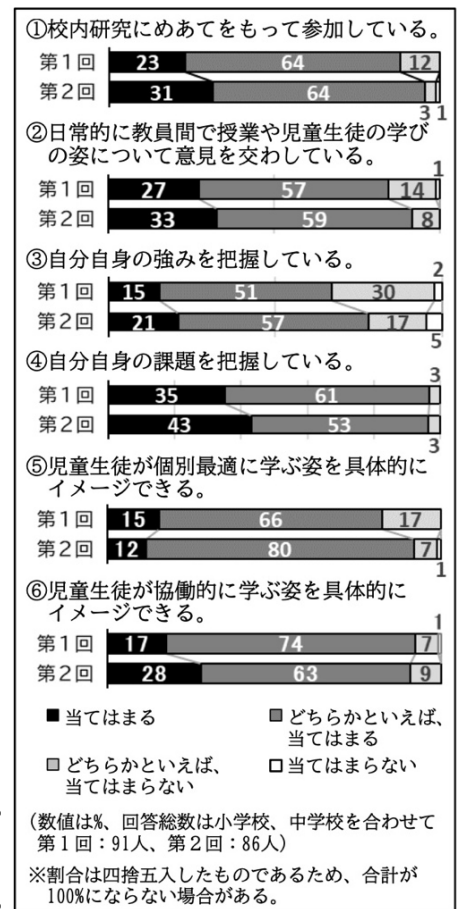


図1 質問紙調査の結果

1 共同研究事業

19) 大津市中学校部活動地域移行検討懇話会

1. 事業名および担当者

事業名は「大津市中学校部活動地域移行検討懇話会」であり、担当者は次のとおりである。

教育学研究科高度教職実践専攻：辻 延浩，

立命館大学：長積 仁教授，びわこ成蹊スポーツ大学：黒澤寛己教授，成安造形大学：藤井俊治講師，

大津市立栗津中学校：高田和子校長，大津市立唐崎中学校：米田博文校長，大津市スポーツ協会：

池田勝三事務局長，大津市市民部：松田直樹スポーツ推進課長，大津市教育委員会事務局：上杉康晴

学校教育課長，浅野和成学校教育課長補佐，奥野雅也学校教育課指導主事，内田弘輝学校教育課主事

2. 事業の目的

大津市の部活動における現状と課題について，教員・生徒・保護者・地域指導者を対象に調査し，中学校部活動の地域移行の改革の方向性を協議する。また，活動対象を限定してモデル実践に取り組み，資料提供を行う。

3. 事業の概要

(1) 大津市中学校部活動地域移行検討懇話会の概要

○めざす姿

- ・将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会の確保
- ・自己実現，活力ある社会と絆の強い社会創り，部活動の意義の継承・発展と新しい価値の創出
- ・地域の持続可能で多様なスポーツ環境の整備と子供たちの多様な体験機会の確保

○改革の方向性

- ・休日の運動部活動から段階的に地域移行していくことを基本とする。
- ・目標時間：令和5年度の開始から3年後の令和7年度末を目途。
- ・平日の運動部活動の地域移行はできるところから取り組む。地域の実情に応じた休日の地域移行を検証し，更なる改革を推進する。
- ・地域におけるスポーツ機会の確保，生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実等にも着手する。
- ・地域のスポーツ団体等と学校との連携・協働を推進する。

(2) 大津市における中学校の部活動に関する意識調査の結果

- ・部活動を指導している教職員のうち，指導している部活動の競技経験，指導経験がない教職員が43%存在する。
- ・指導内容の満足度，指導方針・指導方法の満足度，総合的な満足度は，いずれも競技・指導経験がない教職員の方が低かった。
- ・競技・指導経験のない教職員の方が多くの苦労や負担を感じていた。特に，「活動にかかわる専門的な指導」については，競技・指導経験のない教職員の79%が苦労を感じている。
- ・土日祝日の部活動の地域移行に「賛成」または「どちらかといえば賛成」と答えた教職員の割合

は、競技・指導経験がある教職員では52%、ない教職員では74%であった。平日については競技・指導経験のある教職員では46%、ない教職員では72%であった。

・調査結果の概要は図1のとおりである。

| | | |
|--------|----------------|---|
| 部活動の現状 | 属性 | ・勤続年数の傾向、運動部・文化部における比率に大きな違いはない |
| | 苦勞していること | ・経験がない教職員の方が選ぶ項目数が多い傾向 ・特に、経験がない教職員は「専門的な指導」において苦勞が大きい（79%が選択） |
| | 指導において重視していること | ・経験がない教職員の方が選ぶ項目数が少ない傾向 |
| | 満足度 | ・経験がない教職員は満足度が低い（5段階中2.6） |
| 地域移行 | 賛成・反対 | ・経験がない教職員は賛成（または、どちらかというと賛成）の割合が高い（土日祝日：74%、平日：72%） |
| | 期待と想定される課題 | ・経験がない教職員は期待項目を多く選択し、課題項目の選択は少ない傾向 |

図1 調査結果のまとめ

（3）部活動地域移行モデル事業

①ソフトボール部の合同部活動

ねらい：部員数が減少傾向にあるソフトボール部において、合同の部活動を行うことにより、活動内容の充実と教員の専門的指導の支援を行う。

参加校：仰木中学校、真野中学校、皇子山中学校、石山中学校、幸福の科学学園関西中学校

実施形態：学校部活動として実施。外部指導者（仰木中）が専門的指導支援。その他、高校等の教員も支援。

実施日：①10月29日(日)、②11月26日(日)、③12月3日(日)、④12月17日(日)、
⑤2月4日(日) 合計5回

②成安造形大学との大学連携による美術部の活動

ねらい：専門性を有する大学との連携により、美術部の活動内容の充実と近隣中学校生徒の活動機会の拡充を図る。

参加者：天津市立中学校美術部に所属し、参加を希望する生徒

実施形態：学校部活動ではない枠組みで実施。成安造形大学による指導。

実施日：①10月21日(土)、②12月23日(土)、③3月16日(土) 合計3回

4. 今後に向けて

モデル実践の成果として、「活動人数が増えることで技能的側面のみでなく、教育的側面においても肯定的に捉えている生徒が多い」「競技経験や指導経験のない顧問にとっては指導における疑問を競技経験豊富な指導者に質問でき、指導を学ぶ機会になっている」など、活動人数の増加による生徒の意識や教員の専門性支援の高まりが挙げられた。一方で、課題として、「他校の生徒とコミュニケーションが取れるか不安」「活動場所への移動について労力と金銭の両面において負担」などが挙げられた。今後は、確認された課題に対して、学校、地域、行政がそれぞれの立場で対応できることを考え、協働的に取り組むことが求められる。引き続きこの懇話会において検討がなされる。 (辻 延浩)

1 共同研究事業

20) PBLによる学校における働き方改革の取組 ～「だいひがスマート委員会」の取組を窓口に～

1. 事業名および担当者

【事業名】PBLによる学校における働き方改革の取組 ～「だいひがスマート委員会」の取組を窓口に～

【担当者】[滋賀大学] 今井 弘樹（教職大学院教授・学校経営開発コース）

[連携機関] 栗東市立大宝東小学校（担当者：校長 中川 章子 教諭 森 紀人）

2. 事業の目的

本校の教員の平均年齢は、40.6歳。26名の県費負担教職員のうち半数を超える者が、就学前から学齢期の子育て真っ只中にあり、仕事と子育ての両立に苦慮する教職員の姿も垣間見える。年度始めのある日、数名の職員から帰りがけに「放課後にもっと教材研究をする時間があれば…」といった声があった。ポストコロナ期に突入し、これまで制限付きで実施していた行事や教育活動がコロナ以前へと戻りつつある現在、管理職は、業務の削減や効率化に一層意識的に取り組むことが求められる。このような現状の中、「学校における働き方改革」は、ICT活用や教員業務支援員等の支援人材の投入等、行政主導で推進されているところであるが、学校現場においては、いまひとつその効果を実感できていないのが現状である。行政主導の働き方改革と共に、学校現場で働く教職員が当事者として、積極的に業務遂行上の課題を発見し、解決に向けた取組を展開していくことこそが、真の働き方改革に繋がり、教職員自身のやりがいも生み出すことになると考える。本事業においては、滋賀大学教職大学院の今井弘樹教授に指導助言を受けながら、課題解決型学習（PBL）の手法を用いた教職員による働き方改革の取組を行うことで、課題解決のための方策を見つけるだけでなく、その改革過程における変化と、その変化が学校経営上どのように有意義であったかについて考察することを目的としたい。

3. 事業の概要

(1) 事業の年間計

| 月 | 事業内容 | 実施者・対象者等 |
|-----|--|-----------------------------|
| 5月 | 校内委員会（だいひがスマート委員会）の立ち上げ | 管理職の呼びかけ |
| 6月 | 「かもリスト」の作成と業務のたな卸し | 全職員 |
| 7月 | ・第1回だいひがスマート委員会（かもリスト検討） ・内部評価 | 有志教職員→委員（5名） |
| 8月 | 第2回だいひがスマート委員会（ワークショップ） | 全職員 |
| 9月 | 第3・4回だいひがスマート委員会（具体的取組立案） | 3回は委員，4回は全職員 |
| 10月 | 日課や取組変更に係る保護者向け文書配付・改革開始 | 委員・管理職 |
| 11月 | ・第5回だいひがスマート委員会（保護者意見の聴取） ・学校説明会実施（日課表の変更について） | 委員・管理職（説明会） |
| 12月 | 新日課の試行開始 | |
| 1月 | ・第6回だいひがスマート委員会（内部，児童評価の検討） ・内部評価，学校評価の実施 | 全職員 学校評価は児童と保護者 |
| 2月 | ・第7・8回だいひがスマート委員会（改革の総括と次年度に向けた具体的取組の提案） ・保護者説明会の実施（次年度の日課表等について） | 7回は委員・8回は全職員 委員・管理職（説明会） |

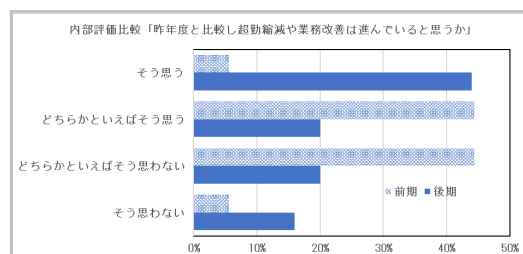
(2) だいひがスマート委員会を通じた改革推進

教職員から働き方改革に関わる声が上がったことを契機に、数名の有志教職員で、校内委員会「だい

ひがスマート委員会（以下、委員会という）」を立ち上げ、全職員に「かもリスト」の作成を校長から呼びかけた。「かもリスト」とは、校内業務や行事、会議等で削減できるかもしれない業務を洗い出すためのリストである。これまで業務削減等に意見を表明する場や時間が十分に与えられていなかったこともあり、多くの教職員がリストの作成に積極的に取り組んだ。「かもリスト」を活用し、教務主任の声掛けで8月に全職員による第1回委員会を開催した。教務主任の発案による全職員巻き込み型のワークショップを通じて、「学校とはどんな場所か?」「どうあってほしいか?」といった本質的な問いを議論し、自分たち教職員がどうあることが子どもたちの笑顔や学びに繋がるかといった視点で会をまとめた。委員会で導き出した課題は大きく3点（①教育課程の編成に係ること、②子どもたちの学びに関すること、③放課後における児童・保護者への対応に関すること）であった。これらの課題に対し、教務主任のイニシアチブのもと複数回の委員会を開催。全職員で8項目にわたる業務改善を決定し、10月以降開始した。中でも、最も大きな変革は日課表の変更であった。他府県や近隣市において成果を上げている「午前中5時間40分授業」を本校でも毎金曜日に導入し試行することとした。

（3）今年度の研究の成果

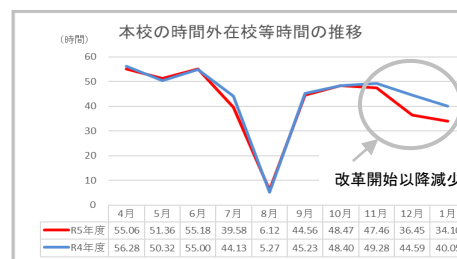
本事業における成果は大きく三つある。それは、委員会が①働き方や教育の本質についての熟議の場となったこと、熟議を通じて職員自らが課題を発見し、その解決に向けて全職員で考えたことにより②職員が働き方改革を自分事として受け止めることができたこと、③教務主任のミドル・アップダウン・マネジメントが働き方改革に職員の当事者性をもたらす有効な手立てであることが分かったことである。右図は、内部評価の比較である。全職員に働き方改革の進み具合を尋ねたところ、後期評価では、「そう思う」と肯定的な回答をした職員が14ポイント増加した。



[内部評価コメントから]

- ・思い切った日課変更や家庭学習制度、忘れ物を取りに来ないシステム等で、ゆとりが生まれたと感じます。
- ・宿題の家庭学習への移行、金曜日特別日課、忘れ物を取りに来ない、欠席のICT化、お休み郵便の廃止など、具体的に構造やルールを管理職やフリーの先生を中心にみんなで考え変革を行えた。変革のおかげで、個人レベルでも在校時間の短縮を意識できるようになったと感じる。
- ・自分自身も放課後たくさん会議を入れるのではなく、できるだけ退勤時間までに会議の設定をするなど、事務仕事も効率よく行うことができた。

内部評価のコメントからもわかるように、全職員で変革できたことにより自らの働き方に対する意識が変容したと実感する職員が現れたことは、大きな成果と言える。実際、時間外在校等時間の昨年度との比較では、改革を始めた10月から徐々に減少し始め、1月は約6時間の減となった。管理職や行政からの外発的でトップダウンな改善とは違い、自らの働き方について、自らが主体となって考える内発的な改善は、ミドルリーダーである教務主任の働きかけや調整によって、若手職員や反改善の立場の者も巻き込み、学校を動かす大きなうねりを生み出した。



4. 今後に向けて

時間が空けば、そこに仕事をつくり出してしまうのが教師の性であるとよく言われる。今後は、職員の働き方に対する意識の高まりが減退しないよう、委員会を継続して行い、本質的な議論を通して更なる業務改善、教育の質の向上に向けた取組を展開してまいりたい。

(大宝東小：中川 章子，教職大学院：今井 弘樹)

1 共同研究事業

21) OJT 研修による人材育成

～心をたがやすボトムアップ～

1. 事業名および担当者

【事業名】OJT 研修による人材育成 ～心をたがやすボトムアップ～

【担当者】[滋賀大学] 今井 弘樹（教職大学院教授），修了生 1 名（学校経営開発コース）

[連携機関] 大津市立打出中学校（担当者：校長 福井 善行 教諭 益井 翔平）

2. 事業の目的

学校における教育成果を向上させるためには、教員の人材育成が不可欠である。本校では経験年数が 10 年以下の教員が 20 名を超え、その割合は 50%と経験不足を補うための教師力の向上が喫緊の課題となっている。どの学校でも同様に以前のような経験年数に相応したバランスの取れた人員構成ではないため、日常の機会をとらえての人材育成だけでは限界があり、意図的・計画的に OJT 研修を行うことで人材育成を図る必要がある。これまでより本校では、研修の時間を定期的に設け、人材育成の場としての OJT 研修を行ってきていた。若手の悩みや思いを共有する場になっていたものの、ややもすると方法論だけに終始するような研修であったことも課題であった。

これまでから毎年 OJT 研修の研修テーマを掲げ、昨年度は、「生徒にどのような力を身につけてもらいたいのか」をテーマにし、授業実践研究を中心に OJT 研修を行ってきた。若手教員中心に授業づくりを大切にする意識を高めてきたが、学校行事への取り組み方や学級の運営方法について、若手教員が悩む姿も見られた。そのため、本年度は「よりよい集団をつくる」というテーマを設定し、行事への取り組み方や授業を通して生徒が自発的・主体的に自ら個と集団への働きかけを大切にしていけるよう発達支持的な生徒指導の在り方などを主に扱うことにした。また、職員室における座席配置もメンターとメンティーを隣り合わせにすることで、職員同士の円滑なコミュニケーションを促し、よりよい職員集団をつくっていくこととした。さらに新規採用から 2 年目までの教員 5 人と臨時講師 1 人を対象に週に 1 度 OJT 研修を行い、若手教員が職場に順応していくための支援を行うこととした。今年度は滋賀大学教職大学院今井弘樹教授に指導や修了生の助言を受けながら、研修の成果と課題を探りつつ研究を進めた。

3. 事業の概要

(1) 日常の取組

①職員室の座席配置をメンター、メンティーのペアで隣り合わせにし、日常的な OJT 研修を行う。

(2) OJT 研修による指導

②授業づくりをベースにしたメンターチームによる OJT 研修をする。

③OJT 推進委員会を随時実施する。

④OJT 推進リーダーによる OJT 研修を実施する。

⑤中間評価を行い、必要に応じてペアの再結成、職員室の座席移動等を行う。

※②③④について今井研究室が計画的に参加・指導して研究を進める。

4. OJT 研修の実際

(1) メンターチームと座席の配置

新規採用 3 年目までの教員 8 名に対して、それぞれにメンターを位置づけ、日常の中でメンティーが気楽に相談できるようメンターとメンティーを隣り合うよう座席配置を工夫した。

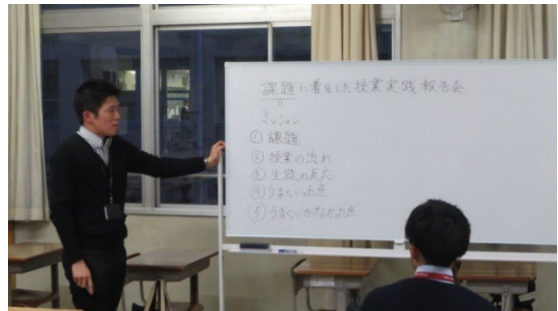
(2) メンターチームによる若手対象 OJT 研修

若手教員 16 名に OJT 推進リーダーを加えた計 17 名のメンターチームを組織し、職員会議後に研修時間を設定し年間計画の下、OJT 研修を行った。研修の内容によって随時生徒指導主事や道徳主任等の校務分掌の主任を講師と位置づけ、タイムリーな研修となるよう工夫した。

| | 研修内容 | 研修形態 | 主たる研修者 |
|------|---------------------|---------|---------------------------|
| 4 月 | 道徳研修 | 模擬授業 | 道徳推進教員 |
| 5 月 | オリエンテーション | グループワーク | OJT 推進リーダー |
| 8 月 | 行事への取り組み方 | グループワーク | 生徒指導主事 子ども支援コーディネーター 学年主任 |
| 9 月 | 授業における「課題」とは何か | 講義 | 校内研推進教員 |
| 12 月 | 「課題」に注目した授業実践研究の行い方 | 講義 | OJT 推進リーダー |
| 2 月 | 授業実践研究 | グループワーク | OJT 推進リーダー |

(3) 毎週毎の OJT 推進リーダーによる採用 2 年目までの教師への OJT 研修

今年度は新規採用 2 年目までの教員 5 名と臨時講師 1 名の計 6 人に対し、OJT 推進リーダーによる研修を毎週月曜日に行った。1 学期は、学期当初は主に学級経営の仕方について研修を行った後、教員同士で悩みを共有し、どのように対応するべきかを話し合った。メンティーからは、学級で抱える問題を打ち明けたことがきっかけで、適切な生徒指導につながったことや働く中で感じる悩みを毎週吐き出せる場があることは、ありがたかったという声が聞かれた。



2 学期に入ってから、先輩教員の授業を参観し、自身の授業の組み立てについて振り返る活動を行った。多忙さゆえになかなか他教科の授業を見る機会を取ることができない現状がある中で若手教員にとって、授業のノウハウを学ぶ機会を欠かせない。そこで、OJT 研修を活用して、積極的に授業実践を参観する機会を設けることで、若手教員が授業のノウハウを学べる機会を持つことができた。授業を見た後は、ベテラン教員の工夫について自分の授業と比較しながら授業の展開の仕方や言葉かけの工夫などの気づいた点を話し合う若手教員の姿が見られた。また、職員室では話せないが、この研修を通して一人で抱えず、共有することで前向きに仕事に取り組もうとする姿も多く見られた。メンティーからは他の先生方の授業を見に行く機会を作っていただいたことで、自分の授業の参考にすることができたという声が聞かれた。

<若手メンティーの感想>

・先生方がふだん実践されていることを具体的に聞けたことが良かったです。去年の 2 学期はすごく長く感じていましたが、今年は一つひとつの行事に対して、自分の中で〇〇をしようなど、去年よりも明確に目標を立てて頑張りたいと思いました。

・先生方のお話を聞いて、2 学期からの文化祭や体育祭までの学級経営方針や心構えなど、たくさん学ばせていただくことができました。行事等に取り組むときや学級経営など、自分なりの考えを深めていこうと思いました。



＜メンターの感想＞

- ・メンティーから質問されることも多いので、あらかじめ見通しを持って仕事をするが増えました。
- ・自分自身がプリントで授業を行っていますが、メンティーは板書を丁寧にとらせる授業形態を取っています。メンティーと関わる中で、自分も板書を取ることの重要性に気づくことができました。

5. 成果と課題

座席配置を工夫することにより、研修時間でなくとも、メンターとメンティーが相談し合い、積極的に関わりをもつ姿が数多く見られた。若手メンティーにとって、気兼ねなく何でも相談でき、悩みを打ち明けたり、愚痴を聞いてもらったり、同僚性が高まる効果が見られた。またメンターにとっても相談に対して自分の実践を基にアドバイスをしなければならぬため常に緊張感も生まれ、お互いの刺激となって成長する姿が見られた。また、職員会議後のメンターチームによる若手対象 OJT 研修は、メンティーにとって有意義な研修であるが、メンターにとっても事前に研修内容を吟味する必要があることから、お互いの資質向上に向け相乗効果が得られる利点があった。

今年度は共同研究としてメンターチームによる OJT 研修に加え、週 1 回の若手研修を実施し、研修時間をさらに確保した。これまで座席の工夫やメンターとメンティーの間で細かいやり取りをすることはできていても、日々の業務に追われ、ゆっくりと話すことが困難な現状があったため、この若手研修により日々の悩みを落ち着いて共有し、更なる教員の力量形成につなげていくことができた。このように、職員の座席配置と研修活動を組み合わせることで、若手教員が悩みを共有できる場を作ることができたことが、OJT の成果として挙げられる。

「メンターの先生が、近くにいることで分からないことを聞きやすい」、「メンティーからの質問に答えられるように資料を丁寧に読み込んだり、分からないことを調べたりするようになった」といった感想も見られた。様々な教育課題が山積する中で、教員個々への要求も少なくない。この研修を通して職場の中にお互いを支え合える環境ができ、一人で悩まない、何でも相談できる雰囲気醸成されたことが何よりの成果であると捉えている。今年度は「よりよい集団をつくる」をテーマに、教員の力量形成を図ってきた。ただ、OJT はあくまで教員を支えるためのものであり、過度の負担になってはならない。そのため、今後は実施時期や実施回数、内容についてさらに検討していく必要があると考えている。持続可能な研修体系を築きながら今後も OJT 研修を実践していきたい。



6. 今後に向けて

週 1 回の若手研修を月曜日に設定したが、週の始まりは生徒対応が多くなることから、設定曜日を検討する必要がある。また、職員会議の OJT 研修は勤務時間外から始まることも多く、余裕をもって話をする時間を確保できるよう工夫も必要である。働きやすい職場となるように研修内容・年間計画の見直しを今後行っていきたい。

(打出中:益井 翔平, 教職大学院:今井 弘樹)

1 共同研究事業

22) 幼稚園における運動遊びを促す実践活動

1. 事業名および担当者

事業名：幼稚園における運動遊びを促す実践活動

担当者：教育学研究科（教職大学院） 奥田 援史，教育学部附属幼稚園（副園長） 大矢明，他。

2. 事業の目的

全国的に、幼児の運動能力は低い水準で推移している。その原因は主に活動量の減少にある。こうした状況を踏まえ、保育に運動遊びを積極的に導入し、活動量の増加を目指す必要がある。

そこで、本事業は、本学部附属幼稚園において運動遊び、特にバランス感覚を要する遊びを導入・実践したので、報告する。

3. 事業の概要

1) 園における運動遊びの取組み

幼児期は平衡機能の発達の著しい時期であるためか、幼児の遊びを観察してみると、バランス感覚を楽しむ活動がよくみられる。そこで、平均台等遊具を活用し、バランス感覚を必要とする活動を取り入れた。

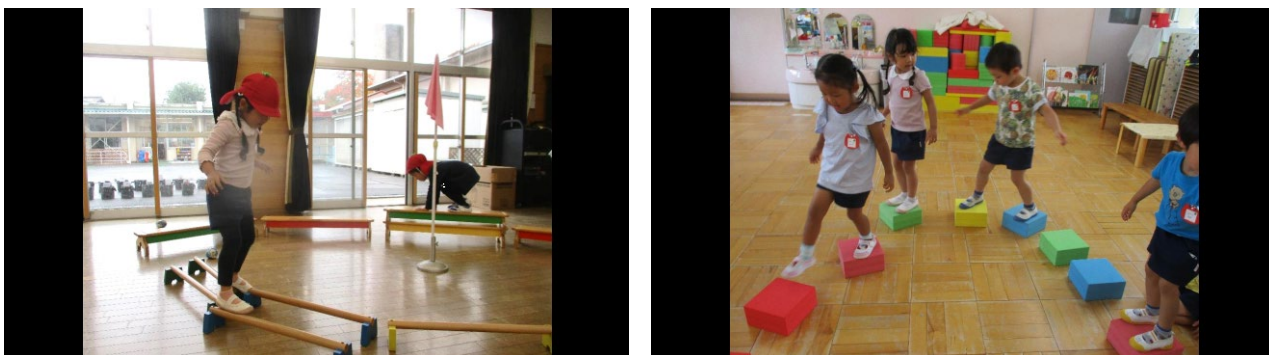


図1 平均台等で遊ぶ幼児の姿

2) 園と家庭の協同的取組み

①運動好きになる紙芝居を用いた活動（図2）

運動好きになることを目指した絵本の内容を調べたところ、模倣運動（まねっこ遊び）を含んだ内容のものが多くみられた。そこで、学部生と協同で、多様な動きのある「まねっこ遊び」を数種類準備し、それらのイラストを描き、紙芝居を作製した。紙芝居は、絵本と異なり、読み聞かせの時に紙芝居自体を台座に固定できるため、「まねっこ遊び」のお手本として簡単に利用できる点が良い。

②リズム遊びゲームを用いた活動（図3）

リズム遊びはからだの動きを伴わせることが多いので、リズムのある運動遊びはよくみられる。そこで、リズム遊びに親しむために、学部生と協同でリズム遊び教材を開発し予備的に実施した。上記と同じように、WEB上にアップし、幼児と保護者に利用していただいた。



紙芝居「まねっこたいそう いちにさん」

5 回視聴 2 週間前 ⇄ ...その他



幼児教育専攻学生

チャンネル登録



図2 運動好きになる紙芝居の例

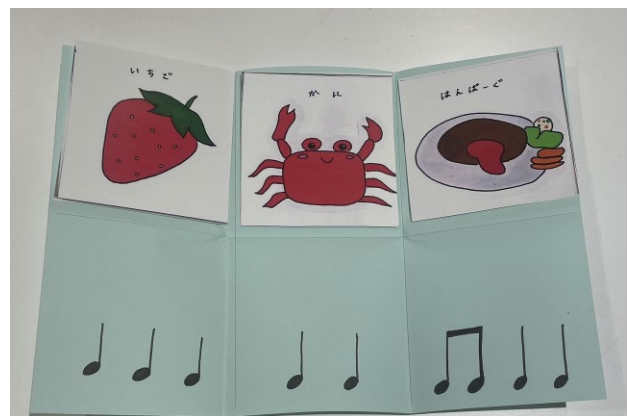


図3 リズム遊びゲームの例

4. 今後に向けて

今年度、学部プロジェクト研究として、本学部附属幼稚園における幼児の運動能力テストを初めて実施した。その結果を総合的にみると、評価得点は高い傾向にあり、幼児の運動発達は順調であると考えられる。しかしながら、運動が苦手な幼児や活動量の少ない幼児もみられることから、日々の生活の中で活動量を増やし、多様な動きを確保していく必要がある。何よりも、楽しく活動することを継続し、しなやかな体とこころの形成に寄与していくことが肝要である。

(奥田援史・大矢 明)

1 共同研究事業

23) 家庭での運動遊びを促す実践活動

1. 事業名および担当者

事業名：家庭での運動遊びを促す実践活動

担当者：教育学研究科（教職大学院） 奥田 援史，教育学部附属幼稚園（副園長） 大矢 明，他。

2. 事業の目的

家庭で親子が一緒に遊ぶことは、幼児の心理・社会的特性や能力、運動能力の発達に大きな影響力を及ぼす。例えば、親子のスキンシップを伴う遊びは、幼児のストレス低減、情緒の安定、社会性の発達への影響が期待できる。一方で、親にとっても気晴らし効果、愛情の深まりなどを期待できる。

そこで、本事業では、家庭において親子が一緒になってできる活動として、スキンシップ遊びと縄跳び遊びを取り上げ、それらの活動が展開されるように取り組んだので報告する。

3. 事業の概要

1) 親子なわとび遊びの活動について（図1）

親子でなわとびを行うにあたり、サイコロの数字によって跳び方を決めるといったルールを設定し、親子でのなわとびが楽しく実践できるのではないかと考えた。なわとび活動は運動量も多く、運動強度も高いが、幼児がひとりで跳ぶことができるまでには繰り返し活動しなければならない。そこで、親子で一緒に活動できることで、比較的スムーズに跳ぶことができるのではないかと考えられる。

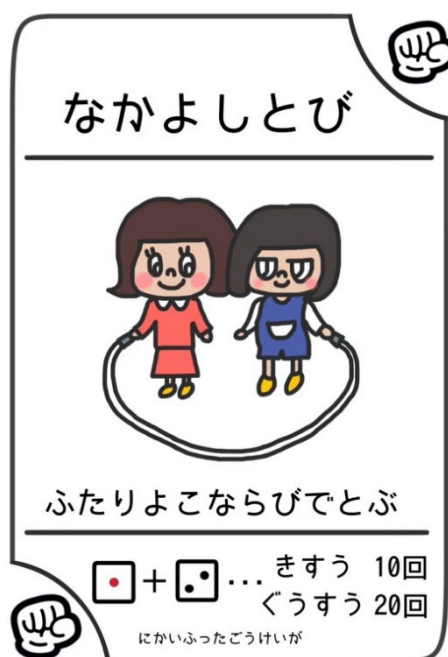


図1 親子なわとび遊びゲームの例

2) スキンシップ遊びの活動について (図2)

まねっこ遊びと親子スキンシップ遊びを組み合わせた活動を考えて、図2のような教材を作製し、家庭で利用していただいた。



図2 親子スキンシップ遊びゲームの例

4. 今後に向けて

降園後の幼児の活動量を高めることは重要な視点である。運動系の習い事もあるが、家庭において親子で様々な遊びを行うことは基本的で、大切な取り組みである。特に休日などには時間をかけて、親子の活動が実践されるように、これからもより多くの運動遊び教材を作成していきたい。

(奥田援史・大矢明)

1 共同研究事業

24) 中学校美術科における、地域と連携した授業づくりの可能性と課題

1. 事業名および担当者

事業名は、中学校美術科における、地域と連携した授業づくりの可能性と課題であり、担当者は次の通りである。

学部教員：馬淵 哲

高島市立安曇川中学校：柏原 由起子(校長)，堤 祥晃(教諭)

2. 事業の目的

本事業は、中学校美術科において、地域との連携した学習の効果検証を行い、その研究成果を学生や現場教員に還元することを目的としている。今回の実践研究では、社会福祉協議会と連携し、デザイン分野の授業で地域の課題や社会的ニーズをテーマにした題材を用い、作品を地域に展示することを学習のゴールとしている。地域の事業所やこども園などと連携する学習題材を開発、実践し、その効果を検証する。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的と方法

中学校美術科のデザインの授業では、伝えたい相手や使用者など、自分以外の他者を想定して制作することが一般的である。しかし、出来上がった作品を実際に使用したり展示したりする機会はほとんどなく、他者から作者に感想や評価がフィードバックされることは稀である。そのため、振り返りでは実際にその作品の効果や価値を確かめて検証することには繋がらない。そこで、地域と連携することで学習効果が高まるような授業実践として、社会福祉協議会と連携したポスターの制作と、地域のこども園と連携した遊具模型の制作の二つの題材を開発し、その効果と課題を検証する。

(2) 実践事例 1

《 題材名 》 『地域の課題を解決するポスターを作ろう！』

《実施学年》 中学3年生

《題材の概要》

本題材は、iPadを使用してA3版のポスターを制作する授業である。一般的なポスター制作の授業と違い、社会福祉協議会と連携して地域から依頼を受けたポスターを制作し、実際に地域で使用してもらうという取り組みを試みた。生徒には「まちあかり食堂（こども食堂）」「フードバンク」「地域のお祭り」「出張つながり食堂」の4つのテーマから自由に選択させた。

《成果と課題》

当初は地域の団体に選考してもらい、代表に選ばれた生徒1名のポスターを使用する予定であったが、「地域のお祭り」の実行委員



生徒作品「まちあかり食堂」

から全員の生徒のポスターを使用したいとの申し出があった。また、他のテーマについても、良い作品が多いので複数採用したいとの申し出があった。地域の方のそういった声を生徒にフィードバックしたり、生徒が実際に使用されているポスターを目にしたりすることで、学習内容の振り返りや美術に対する意欲の向上に繋がっていた。課題としては、地域団体との連絡調整が煩雑な点と、ポスターの依頼内容の情報量が多すぎて文字ばかりのポスターになってしまった点が挙げられる。

(3) 実践事例2

《 題材名 》 『目指せ、遊具設計士！』

《実施学年》 中学2年生

《題材の概要》

本題材は、生徒が遊具設計士になったつもりでプランを考え、公園の遊具（すべり台）を設計してその模型を制作するという授業である。アイデアの面白さだけでなく、楽しさや機能性、安全性といった使用者の視点を大切にしながらプランを考えさせるなど、用途や機能、使用者の気持ちを考えて制作することをねらいとしている。また、生徒が使用者の視点に立って制作することで、デザインにとって大切な要素とは何かを考えさせるきっかけにしている。今回の授業では、使用者を4歳～7歳の児童、園児と設定し、制作の条件としてビー玉を転がして遊べる“仕掛け”を作るという要素を追加した。そして、完成した作品を地域のこども園に展示して園児に遊んでもらい、人気投票を行ってそれを生徒にフィードバックした。



実際に園児が遊んでいる様子

《事後考察》

実際に園児が遊ぶという設定に対して、生徒は様々な思いを巡らせて制作しており、使用者を意識して制作するという点では非常に効果的であった。また、園児による人気投票（好きな作品にシールを貼る）の結果も、学習の振り返りに有効に働いている様子であった。課題としては、こども園との連絡調整や作品の運搬が大変であった点と、遊んでいる際に破損してしまった作品があった点が挙げられる。今後は作品の強度を高めるような工夫も指導する必要があると感じた。

4. 今後に向けて

中学校美術科の授業において、地域と連携した題材を設定し、学習効果も含めてその可能性と課題を探ることをねらいとした実践研究である。事例1の成果にもあるように、地域の方の声を生徒にフィードバックしたり、生徒が実際に使用されているポスターを目にしたりすることで、学習内容の振り返りや美術に対する意欲の向上に繋がる効果があった。事例2では、実際に園児が遊ぶという設定により、使用者を意識した制作がより促進される効果があった。つまり、地域と学校が教科指導の中で連携し、出来上がった制作物を実際に使用してもらうことと、地域の方の声を生徒にフィードバックするところに、本研究の独自性がある。地域と学校の連携による生徒の主体的な意欲の喚起をねらった取組として、今後も継続的な研究を積みかさね、そのよさを明らかにしていきたい。

(馬淵 哲)

1 共同研究事業

25) 「なぜだろう?」「わかった!」「またやりたい!」ずっと使える「学び方」の習得～9年間の学習を見据えて授業を考える～

1. 事業名および担当者

本事業名は、「『なぜだろう?』『わかった!』『またやりたい!』ずっと使える「学び方」の習得～9年間の学習を見据えて授業を考える～」である。担当者は以下の通りである。

東近江市教育研究所：宮居 伝(所長)，榎並 洋貴(指導主事)，中村 和貴(研究員)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

東近江市では、児童生徒が「学び方」を身に付け、主体的に問題発見・問題解決に取り組む力を高める授業づくりの研究を進めておられる。

令和5年度は、「『なぜだろう?』『わかった!』『またやりたい!』ずっと使える『学び方』の習得～9年間の学習を見据えて授業を考える～」を研究主題とし、小中学校国語科の授業において、①教科・単元・授業で育成する資質・能力を明確化する(小中の接続を意識しながら、何を学び、何ができるようになるかを明確にする)、②児童生徒自身が学びの主体となるように授業展開を考える(課題解決型授業について模索し、児童生徒がどのように学ぶのかを大切にしたい授業づくりを行う)、③掲示物や支援の工夫など、具体的な手立てを考える(どのように支援をするのかを考える)、の三つを軸に、児童生徒が「学ぶこと」に楽しさを見いだし、学びに対して主体的・肯定的に向かう力を高めるための授業改善の視点を明らかにすることを目指された。

本事業は、これらに基づき、小中教職員が共同で研究を進めることを通して、授業づくりの手立てや授業構想の視点を見いだすことを目的とする。

3. 事業の概要

東近江市では、授業改善推進委員会(国語科部会、算数・数学科部会)において指導案検討と授業研究会を行い、実証授業の成果や課題を分析し、本市で夏季休業中に行われる教育研究所研究発表大会での報告、指導案の公開等を通して、市内への発信、その後の支援等を通して普及を図っておられる。本学教員は小学校および中学校の国語科部会のアドバイザーとして、指導案検討や授業研究会での指導助言・講義を行った。事業の日程は以下のとおりである。

- | | |
|------------|-----------------------------|
| ・5月23日(火) | 第1回国語科部会(小学校実証授業に向けての授業構想) |
| ・6月15日(木) | 第2回国語科部会(小学校実証授業に向けての指導案検討) |
| ・7月7日(金) | 第3回国語科部会(小学校での実証授業・授業研究会) |
| ・7月20日(木) | 第4回国語科部会(中学校実証授業に向けての授業構想) |
| ・8月18日(金) | 東近江市教育研究所研究発表大会・教育講演会 出席 |
| ・9月25日(月) | 第5回国語科部会(中学校実証授業に向けての指導案検討) |
| ・10月13日(金) | 第6回国語科部会(中学校での実証授業・授業研究会) |

(1) 国語科部会（小学校）の実践より

単元名：ここがいいね！多くの読み手に主張が伝わる投稿をしよう。

教材名：「インターネットの議論を考えよう」(東京書籍 新しい国語 6年)

第6学年を対象として、「情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる」、「目的に応じて、論の進め方について考えることができる」を重点のねらいとした授業を実践した。

研究主題に関わって、①単元の始めに、一度投稿文を書き、それを授業者が作成したGOODモデルと比較することで、何ができるようになるのかを児童がつかみ、学習への目標や課題を意識できるようにする、②投稿文を相互評価する際、評価の数値をメーターとして可視化し、評価の理由を交流することを通して、よい点や改善点を具体的に理解できるようにする、③自分が書きたい投稿文のテーマを決めたり、交流する相手を児童が選択できるようにしたりし、主体的な学びにつなげる、等の手立てを講じた。

実証授業では、児童が、単元のゴールやこれまでの学び、そしてこれからの学びを理解し、自分自身の課題解決に向けて主体的に学びに向かう姿が多く見られた。「導入において、掲示物などを活用して丁寧にこれまでの学びを振り返ったこと」、「交流において、交流する内容や進め方、交流の目的を児童が理解できるようにしたこと」、「交流する相手を、児童が自分の目的に合わせて選択できるようにしたこと」といった授業づくりの視点が効果的であったと考える。

(2) 国語科部会（中学校）の実践より

単元名：資料を比較して、記事に込められた作り手の意図や工夫を評価しよう。

教材名：「複数の情報を関連づけて考えをまとめる」(三省堂 現代の国語 3年)

第3学年を対象として、「情報の信頼性の確かめ方を理解し使うことができる」、「文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価することができる」を重点のねらいとした授業を実践した。

研究主題に関わって、①実生活やこれからの国語の学習とのつながりを意識した教材を用い、魅力的な言語活動を設定することで、生徒の「やってみよう」を引き出す、②生徒が解決する教材を決めたり、交流する相手を選択したりできるようにし、主体的に学べるようにする、③課題解決に向けて、自分の考えや学習の進め方など、途中経過を交流する時間を設定することで、学びを調整できるようにする、等の手立てを講じた。

実証授業では、最後まで粘り強く学習に取り組む生徒の姿が印象的であった。学習の手立てとして、「導入において、モデルとなる生徒の考えを共有し、本時の目標につなげたこと」、「自分の考えを可視化できるワークシートやICTを効果的に用いたこと」、「交流を通して、自分の考えや学習の進め方など、他者を参照できる時間を設定したこと」が有効であったと考える。

4. 今後に向けて

本研究を通して、児童生徒が主体的に学びに向かうことができるように、「単元の始めや本時の導入において、学習の目的を理解できるような手立てを講じること」、「学習の目標の達成に向け、学習内容や交流する相手を選択できるようにする等、多様な学習を想定すること」、「児童生徒が習得した『学び方』を主体的に、自覚的に活用することができるように、授業展開を構想すること」が重要であることが分かった。また、研究推進・授業づくりにおいて、小中学校の校種を越えて、学習指導要領解説を手掛かりに、児童生徒の学びの姿を具体的につかむことが大切であることが再確認できた。これらのことを踏まえて、さらなる授業改善につなげていきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

26) 思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる伴谷っ子を目指して

1. 事業名および担当者

本事業名は、「思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる伴谷っ子を目指して」である。担当者は以下の通りである。

甲賀市立伴谷小学校：中嶋 政二(校長)，ギル ゆかり(校内研究主任)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

甲賀市立伴谷小学校では、令和5年度において「思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる伴谷っ子を目指して」を研究主題として研究に取り組みました。昨年度の研究の成果と課題を踏まえ、国語科において、語彙を豊かにしたり、文章の内容を正確に理解したりするための手立てを講じ、また、授業者が育成したい資質・能力を明確にし、子どもが「聴きたい」、「話したい」という思いをもって取り組むことができる学習活動を仕組むことを通して、思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる児童の育成を目指された。

本事業は、この研究内容に基づき、共同で研究を進めることを通して、授業での手立てや授業改善の視点を見いだすことを目的とする。

3. 事業の概要

甲賀市立伴谷小学校では、年間7回の研究授業に取り組まれている。本学教員は、研究授業に向けての指導案検討会や授業研究会において指導助言を行った。事業の日程、授業実践の詳細は以下のとおりである。

○事業の日程

- | | |
|------------|-----------------------|
| ・5月26日(金) | 第2学年による公開授業に向けた指導案検討会 |
| ・6月7日(水) | 第2学年による公開授業・授業研究会 |
| ・6月21日(水) | 第3学年による公開授業に向けた指導案検討会 |
| ・6月28日(水) | 第3学年による公開授業・授業研究会 |
| ・10月4日(水) | 第1学年による公開授業に向けた指導案検討会 |
| ・10月18日(水) | 第1学年による公開授業・授業研究会 |
| ・11月6日(月) | 第6学年による公開授業に向けた指導案検討会 |
| ・11月22日(水) | 第6学年による公開授業・授業研究会 |
| ・2月14日(水) | 次年度に向けた校内研究推進委員会 |

○第2学年の授業実践【単元名：「お話を読んで、想像したことを紹介しよう」、教材名：「スイミー」(光村図書「こくご2 上巻 たんぽぽ)】

国語科として「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる」、校内研究として「想像したことを友達にわかりやすく伝えたり、聞いたりすることができる」を重点のねらいと

し、「挿絵を手掛かりに想像できるようにプリントや ICT を活用する」、「ペーパーパートを活用し動作化できるようにする」等の手立てを講じて授業を実践した。公開授業では、想像したことを、一生懸命伝える児童の姿が見られた。「自分の考えを伝えたい」という児童の思いを引き出す魅力的な言語活動の工夫、本時に向け「想像する」という学習を繰り返し行ったことが効果的であった。

○第4学年の授業実践【単元名：「『一つの花』の『一つ』に込められた意味を考え伝え合おう」、教材名：「一つの花」(光村図書「国語4 上巻 かがやき」)】

国語科として「叙述を基に登場人物の気持ちを想像し、自分の考えをまとめることができる」、校内研究として「友達の話聞くことができたり、自分が感じたことを発信したりすることができる」を重点のねらいとし、「場面ごとの内容を捉えることができるように視点を明確にする」、「交流を通して自分の考えを再構築できるワークシートの工夫」等の手立てを講じて授業を実践した。公開授業では、交流において自分の考えを伝え、友達のを積極的に記録し、再度自分の考えをまとめ、よりよいものにする児童の姿が多く見られた。

○第1学年の授業実践【単元名：「伴谷っ子1年2組『くじらぐも音読会をひらこう』」、教材名：「くじらぐも」(光村図書「こくご1 下巻 ともだち」)】

国語科として「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる」、校内研究として「想像したことを友達に伝えたり聞いたりすることができる」を重点のねらいとし、「挿絵や小道具を活用して動作化できるようにする」、「話し方・聞き方のモデルを掲示する」、「話すこと・聞くことに関する振り返りの視点を明確にする」等の手立てを講じて授業を実践した。公開授業では、叙述を基に豊かに想像し、想像したことを友達に伝えることができていた。また友達のを参考にしなが、自分なりの音読を楽しく行う姿が多く見られた。

○第6学年の授業実践【単元名：「よくわかる！伝えよう日本文化の魅力」、教材名：「鳥獣戯画を読む」、「調べた情報の使い方」、「日本文化を発信しよう」(光村図書「国語6 創造」)】

国語科として「目的に応じて、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすることができる」、「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる」、校内研究として「お互いの立場や意図を明確にしなが、計画的に話し合い、考えを広げたり深めたりすることができる」を重点のねらいとし、「全文シートの活用」、「単元のゴールのモデルを示す」、「自分の考えを可視化する」等の手立てを講じて授業を実践した。公開授業では、交流を通してよりよい学びを生み出すことができていた。また本時の学習のねらいに迫る姿が多く見られた。本時のめあてを意識して交流できるようにしたり、思考ツールや付箋を用いて交流できるようにしたりしたことが有効であった。

4. 今後に向けて

本研究を通して、「学習のねらいとリンクさせて交流の目的を設定すること」、「交流後の児童の姿をイメージし、実現に向け、何を、どのように交流するのかを考えること」といった協働的な学びの実現に向けた授業改善の視点を見いだすことができた。また、教科と校内研究を関連付けて進めるうえで、教科で目指す子どもの姿と校内研究で目指す子どもの姿を具体的に想定することが有効であると感じた。このことを踏まえ、授業改善、校内研究の活性化に取り組んでいきたい。(北村 拓也)

1 共同研究事業

27) 校内研究からみる学校改革

～可視化と共有を効率的に実現する Lesson Study シートの改良～

1. 事業名および担当者

本事業は、「校内研究からみる学校改革～可視化と共有を効率的に実現する Lesson Study シートの改良～」であり、次の担当者によって遂行された。

[学部教員] 渡邊慶子

[連携先機関] 甲賀市教育研究所，甲賀市立水口小学校，甲賀市立城山中学校，甲賀市立信楽中学校

[連携先担当者] 中井佑輔(甲賀市教育研究所・課長補佐)

2. 事業の目的

「校内研究」は各学校の教職員集団が、教育研究組織として共同研究をするための核となる場である。このような場の多くは教科指導の方法論をテーマとして、PDCAサイクルを念頭に各学校で取り組まれてきた（いわゆる、Lesson Studyの実施）。しかし、その取り組み方には学校によって様々な「違い」がある。この「違い」は、各学校の特徴・独自性が反映しているとも捉えられ、「ポジティブ」な意味での「違い」でもあるが、一方で「小中連携」事業として「校内研究」を充実させようとするすると、その「違い」は連携を難しくする一因となることもある。

甲賀市教育研究所では、令和3年から「自治体（市）がつなげる校内研究」と題し、校内研究を通して一層の小中連携を図ろうと関連研究を続けてきた。これまでの関連研究では、同じ市町村内で小学校から中学校へと一貫して持続可能な校内研究を行っていくために、異なる学校の「校内研究」の内容や方法を共有して学び合える組織づくりをし、その組織的な研究を具体的かつ継続的に作り上げていくためのデジタルシート（Lesson Study シート。以下、LSシート）を開発した（令和4年度事業）。このLSシートは、これまでの事業で、完成された授業計画（Teaching Plan）から授業後の授業検討会（授業評価と改善案：Check&Action）までの経過が主に記録され、デジタルツールによって共有・閲覧・保管等が可能なものとなり、その有用性も明らかにされた。同時に「授業計画を立てるまでの研究活動にこそ共有すべき事項（特に授業者の思いや教材研究の工夫）が多く詰まっていた」ことが指摘され、このことがLSシートを改良するための視点として残された。

これらを受けて、本年度事業の目的は、研究授業の授業者や校内研究主任の思い、教材研究のための教職員同士の議論過程を反映できるように「LSシート」を改良し、組織的な校内研究を改めて実施して、シートの有効性を実証したり、新たな課題を明らかにしたりすることとした。

3. 事業の概要

(1) 校種ならびに学校規模における LS シートの汎用性の検証

昨年度の研究から活用している Lesson Study シート（LSシート）の汎用性について、校種や規模の異なる3校の研究協力校をもとに探った。校内研究主任が中核となり進めていく研究の中で、大きく二つのことが明らかになった。一つ目は LS シートの汎用性の高さである。今回の研究協力校は、校種、規模だけでなく校内研究のもち方も様々である。しかし、その中でも、各校の研究推進委員が目指す校内研究を進めるにあたり、LSシートの存在は非常に有効的であった。例えば次のような声が各校から挙がってきている：時間をかけずに思いを共有できる/これまでの積み上げが視覚的にも分かりやすい/協議したことがリアルタイムで記録され、確認がしやすい/考えること（話すこと）が明確になった。

(2) 本事業の研究課題とそれに対する結果

本事業の研究課題は次の2つであった:①教材研究のための教職員同士の議論過程を反映できるように「LSシート」を改良すること, ②連携する小学校1校と中学校2校をモデルケースとして, 組織的な校内研究を実施し, シートの有効性を実証したり, 新たな課題を明らかにしたりすること

本事業の結果として, 上記の研究課題①については, LSシートを取り入れて学校内で研究する教員の具体的な姿を捉えることができた。つまり, LSシートは, 校内研究だけではなく, 様々な教員の継続的な研究活動にも活用できる可能性がある。特に下の4点についてLSシートが活用されていた。

- プレゼンテーション用の資料としての活用。研究の蓄積用に詳しく書いたシートと, それをキーワード化したシートの二つを準備することによって用途で使い分けることができる。
- 授業研究会では, 授業者の視点が明確化され, 教科の異なる教員にとっても研究協議がしやすくなる。
- 教職員の学びの足跡として, また学校の歩みの記録として残していくことができる。
- 授業の中で, 子どもの学びの蓄積ツールとしての利用といったことが考えられる。

上記の研究課題②については, 研究推進委員の学びの深まりによってLSシートを用いた校内研究の有効性が明らかにできた。具体的には, 研究推進委員3名は, 異なる3校の校内研究主任を担う教員であり, 彼らは研究推進委員会において各々の校内研究の大綱となる学習指導指針の方向性や内容, 他の教職員の研究意識の違いなどについて, お互いの悩みを聞き合い, 時にはアドバイスをし合い, さらには自校に他校での取組を取り入れて比較研究するなど, 学校間での協力的な取り組みが自発的に生まれた。

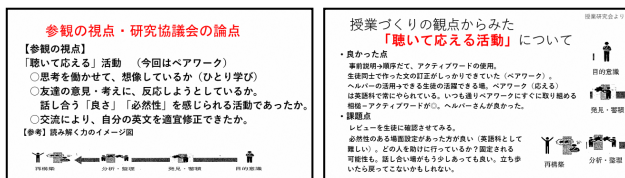


図1 授業研究に特化したLSシート



図2 部会の取組を示したLSシート

4. 今後に向けて

今後に向けて, 以下の四つの課題を挙げる。

(1) LSシートの普及のための具体策を考えること

本研究によって, LSシートにはどのような学校においても共有・比較できるメリットがあることが分かった。今後は市内の他の学校にどのように普及していくのが課題である。LSシートがどのように効果的で, メリットがあるものなのか実感できる場の設定が必要であり, それを実現するためにもまずそれぞれの学校でLSシートを使っていけるように情報を発信していきたい。その中で, 型を決めるよりも研究の流れが見えるように, 学校の実態に適したLSシートを作成していくことが求められる。

(2) 学校を引っ張っていく「リーダー」を育成するための視点を明確にすること

年間5回の研究推進委員会を通して, 研究推進委員は互いに勇気づけながら, 自校の校内研究を進めていくことができた。その中で, 他校の実践や, 校内研究主任同士の協議から, 学びを深め, 校内研究主任の力量の向上につなげることができた。校内研究主任の力量向上は各学校の活性化につながるものである。チーム学校の組織力を高めるためにも, 今後もLSシートを活用しながら, 学校間の横のつながりも広げることで, 各校の中核を担う教職員の育成につなげていきたい。

(3) 市内で共有できる小中一貫した教材や授業づくりのために校内研究でLSシートを利用すること

中学校区での学びの連携が重要視されている中, LSシートを活用した, 中学校区における校内研究の活性化を図りたい。チーム学校からチーム中学校区で研究を進めることで, 9年間の学びを中学校区の教職員としてともに高め合える集団づくりを目指していきたい。

(4) 甲賀市の教育環境の変化にあわせて「LSシート」をさらに進化させること

本市の端末が来年度から情報系から教育系に移行し, Microsoft Teamsの活用をするICT環境となっていく。Teams内でのグループをつくるなどして, 市内の学校の取組がLSシートを通して共有できるようになると, 上記に挙げた普及や育成も円滑に進められると考えられる。また, LSシートを作成して終わるのではなく, 循環型の取組となるようPDCAサイクルで上手く活用していきたい。

(中井 佑輔・渡邊 慶子)

1 共同研究事業

28) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」であり、担当者は次の通りである。

学部教員：森 太郎，與倉弘子，久保加織，石川俊之

地域ボランティア：内藤京子，石橋克也，奥田由紀

大津市石山公民館専門委員：清水琴野

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食・農・環境教育」が求められている。しかし学校現場において、このニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食・農・環境教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し、教育現場において「食・農・環境教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは、石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は参加者の募集業務，地域ボランティアスタッフが畑体験の具体的指導，滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生が体験活動内容の計画立案，指導を行っている。本活動は，平成14年4月から始まり，3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園，小学校の児童と保護者を対象に，「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」への参加申込書を配布している。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて，毎週水曜日の15時から17時まで食農体験活動を実施し，3月まで約38回の活動を行っている。本年度は，15家族46名が参加し，滋賀大学自然環境教育施設の農場での活動に加え，日常の管理，農場の収穫物を使った食体験活動や蚕の飼育など自宅での活動の様子について，コミュニケーションアプリLINEを用いて交流を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

| 実施月 | 主な活動内容 |
|-----|--|
| 4月 | 開始式，自己紹介，農場見学，野菜・花の播種（トウモロコシ，キュウリ，エダマメ，オクラ，カボチャ，メロン，花のたねダンゴなど），野菜の観察・スケッチ，タケノコ掘り |
| 5月 | 夏野菜（4月に播種した作物，トマト，ナス，トウガラシ類など）の定植・管理（支柱立て，誘引，わき芽取り），スナップエンドウ・タマネギ・ニンニク収穫，稲のモミ消毒・播種 |
| 6月 | タマネギ・ニンニク収穫，サツマイモ挿苗，梅の収穫・梅ジュース・梅干し作り，蚕の飼育開始，ジャガイモ収穫，夏野菜の管理，収穫，田植え |
| 7月 | 田んぼの生き物（ミジンコ，カブトエビなど）観察，夏野菜の管理・収穫（トウモロコシ，トマト，オクラ，エダマメなど），焼きトウモロコシ・エダマメ試食，梅ジュース試飲 |
| 8月 | 夏休みであるが，当番制で畑の管理，水やりを実施 |
| 9月 | 秋冬野菜（ハクサイ，ブロッコリー，キャベツ，ニンジン，ダイコン，ミズナ，ハウレンソウ，カブなど）の播種 |

| | |
|-----|---|
| 10月 | 秋冬野菜苗の定植，秋冬野菜の間引き・草取り，オクラ・ナスなどの収穫，稲刈り・稲架がけ・脱穀，学生による野菜クイズ，チューリップ球根埋め込み |
| 11月 | サツマイモ掘り，干し柿作り，どんぐり拾い，タマネギ定植，秋冬野菜の間引き・草取り・収穫，リース作り，米・梅干しの試食 |
| 12月 | 干し柿試食，焼き芋，餅つき，しめ縄作り，秋冬野菜収穫， |
| 1月 | 秋冬野菜収穫，七草粥・豚汁作り・試食，箸づくり，紙漉き |
| 2月 | 秋冬野菜収穫，紙漉き，豆まき，チューリップ指導の御礼状を作成 |
| 3月 | 秋冬野菜収穫，漉いた紙で修了証づくり，ジャガイモ埋め込み，閉校式 |

本年度は、年間を通して食・農・環境教育に関する活動を行うことができた（図1）。特に、新型コロナウイルス感染症の影響により昨年度までは食体験活動が制約されていたが、本年度は食品衛生や感染症に配慮しながら充実した活動を行うことができた。また、本年度は新たなプログラムとして弘前大学教育学部の勝川健三教授に「冬にお家でチューリップを咲かせよう」をテーマに実演講義を頂き、家庭でチューリップの栽培に取り組んだ（図2）。参加者は、チューリップの開花条件を学び、栽培技術を工夫して実際に冬に開花させることができたことに喜びを感じており、有意義なプログラムであったと考える。また例年、蚕の飼育を行っているが、日本産業技術教育学会の全国大会で蚕の飼育に関する参加者の成果物（夏休みの自由研究）や蚕の生体を展示した（図3）。



図1. 活動の様子（お米の播種と餅つき）



図2. チューリップの実演講義・家庭での栽培の様子



図3. 学会での蚕の飼育に関する展示



4. 今後に向けて

本事業は2002年にスタートし、大学・地域・家庭が連携して、本年度まで22年間継続して実施することができている。本事業は貴重な「食・農・環境教育」を行う場であり、今後も地域・家庭と連携して実施していきたいと考えている。また、例年多くの学生が主体的に本活動に参加しており（本年度は15名）、将来教育現場で「食・農・環境教育」の体験活動をリードできる人材育成の場としての役割も担っている。今後も、地域の子供への教育、学生への教育の両面から、新しい活動プログラムの開発と実践を行っていきたい。

（森 太郎）

1 共同研究事業

29) 小学校におけるエージェンシーを育成する学級活動に関する OJT 研修

1. 事業名および担当者

事業名は、「小学校におけるエージェンシーを育成する学級活動に関する OJT 研修」であり、担当者は次のとおりである。

甲賀市立伴谷小学校：中嶋政二校長，藤井紗季教諭

学部教員：岸本実

2. 事業の目的

OECD の学びの羅針盤が提唱したエージェンシー（責任を持って変化をもたらすため、目標を設定し、振り返り、行動する能力）を育成するためには学級活動を活性化することが必要である。しかしながら、キャリアステージⅡ期前期（4～9年目）においても、学級経営の一定の実践知を持ちながらも、特別活動（学級会）については初級者であり、新人教員のメンターになるほどの力量が形成できていない。そこで、本研究の目的は、こうした状況を解決する OJT 研修の在り方を考察することである。

3. 事業の概要

本研究では、教員の学級会実践知の把握が重要であると考え、教職経験年数と学級会実践知を掛け合わせた二次元の表に A 校の通常学級担任の実態をまとめた（表 1）。そして、教職 9 年目までの教員と、10 年以上教職経験がある教員の中で希望者を OJT メンバーとし、学級会実践プログラムパッケージ（資料 1）を作成してスキルアップできるように関わっていった。

表 1 A 校教員の学級会実践エージェンシーステージ

| | | I 期 | II 期 | III 期 | IV 期 |
|--------|--|----------|------------|----------|-------|
| | | 1～3年目 | 4～9年目 | 10～15年目 | 16年以上 |
| アドバンス | 価値や指導技術を同僚に発信し、改善点を助言できる。 特別活動全体の構想も視野に入れて取り組む。 | | | | ◆ |
| ミドル | 価値を感じていて、指導技術も兼ね備えている。 | | | ● | |
| スタンダード | 価値を感じて始めているが、価値・指導技術ともに偏りあり。 | ◎ ◎ B | ● C | ● ○ E | |
| スタート | 価値は感じず、学級会実践経験無し/始めたばかり。 | ◎ □ □ | ◎ ◎ ■ D | ○ ○ | ○ ○ |

◎OJT メンバー（通常学級担任）・□OJT メンバー（通常学級担任以外）・●■グループリーダー・◆OJT リーダー・○OJT メンバー以外の通常学級担任

藤井は OJT リーダーとして、OJT メンバーに個別に関わるだけでなく、学級会実践に取り組む組織を構築し、年間計画を立てて取り組んだ。OJT メンバーを、2023 年度に担当している学年で上学年と下学年の 11 名の教員を 2 グループに分け、7 年以上の教職経験者 4 名をそれぞれのリーダーとした。月に 1 回リーダー会議を開き、担当学年やメンバーの様子など情報共有も行った。OJT メンバーのうちリーダー 2 名、若手教員 2 名の 4 名の研究協力教員を中心に、以下の 2 点について検証を行った。①研究協力教員が各学級で学級会実践を行い、アンケートや振り返り、授業参観、カンファレンスを通して生徒エージェンシーの高まりについて、②ペア/グループ/全員を対象に、放課後に行う OJT 研修（以後、放課後

OJT 研修とする)を通して、教員一人ひとりの成長や指導技術の向上、教師エージェンシーや教員同士の共同的なエージェンシーの高まりについて。

資料1 学級会実践プログラムパッケージ

| ☆くわしく見てみよう! | | | |
|-------------|--|---|---|
| 事前 | | 【事前の活動】 | |
| 準備・課題意識 | | 議題設定 | 司会 |
| カード | | | |
| アドバンス | 課題意識を高める手立て →アンケート活用 前年度までの課題提示 など | | 先生の温かいコメントが、 発表への第一歩! |
| ミドル | ☆問題解決型 あいづつ・ゴールの使いこななど ◇得りの会でのふり返り ◇学級のキャラクター活用について ◆思い出アルバムを作ろう | 話し合いの流れを想定→対応策の確認 | 助言や励ましのコメント記入 話し合いの流れを想定 |
| スタンダード | ◇下学年との交流会 ☆係活動を盛り上げよう ◆掲示板大変身プロジェクト | 提案者と提案理由設定 司会グループの子連と流れ確認 (進行マニュアルをもとに) | 一人ひとりの考えを事前に把握 →司会者と意図的に指名する児童確認 →必要な児童には、個別に支援 |
| スタート | 議題・提案理由・柱を立てる 学級会グッズ用意 | ☆1年間よろしくの会 ☆0学期、がんばったね会 | 一人ひとりが、自分の考え・思い をもてるように 学級会カードの用意・配布 |

ここでは、4名の研究協力教員の中で、教職2年目の若手教員が、OJT研修で学級会実践を通して変容した様子を中心に述べる。なお、この教員は、前年度後半より、個別の研修に参加している。教職1年目の1学期は、学級会に全く関心が無かったが、藤井による学級会実践を参観するところから、普段は発表しない児童が自分の思いを伝えたり、関わりが少なかった子ども達が話し合ったりしている姿を見て、学級会の価値に気付くことができ、積極的に今年度の研修に参加した。今年度は、OJT研修を通して、グループリーダー教員の学級会実践を参観し、学級会の価値やQ-Uテストなど、学んだことを生かして自学級で実践する姿が見られた。また、多面的な児童理解や他教科での指導力向上などにも繋げることができ、成長が見られた。子ども達も主体的に改善策を考えたり、活動したりする姿が見られるようになった。教師エージェンシーの高まりが、共同的なエージェンシー、さらには生徒エージェンシーの高まりへと繋がっていった。また、学級会中、異論を唱えた児童の発言から、この教員自身が、これまでの指導法を捉え直し、担任と子ども達、双方向からのエージェンシーの高まりが見られた。

4. 今後に向けて

教職経験と学級会の実践知との二次元の表の中での教師の位置を確認し、グループリーダーと若手教員が自分の目標や課題を自覚し、主体的に研修に参加することができたこと。学級会実践のリフレクションとOJT研修を有機的に結合し、OJTリーダーやグループリーダーからの適切なフィードバックやメンバー相互の学び合いが活発に行われたこと、また、それを支える教員間の信頼関係が醸成されていたことなどにより、研修の効果が高められたと言える。教職経験と実践知の蓄積にギャップがある領域は、他にも例えば、ICT活用実践力などがある。学級会の理解と指導技術の研修で明らかとなった研修の在り方が、こうした違った領域でも有効かどうか検討することは今後の課題である。(岸本 実)

1 共同研究事業

30) 中学校社会科における主体的に学習に取り組む態度の学習評価

1. 事業名および担当者

事業名は、「中学校社会科における主体的に学習に取り組む態度の学習評価」であり、担当者は次のとおりである。

近江八幡市立八幡西中学校：北居 伸顕校長，林 正人教諭

学部教員：岸本 実

2. 事業の目的

中学校社会科において主体的に学習に取り組む態度の学習評価に関して、その在り方や方法について、解明が求められている。本研究では、パフォーマンス評価と自己調整学習を取り入れた単元シートによる学習評価の実践を通して、この問題を考察する。なお、単元シートの作成に当たっては、1枚ポートフォリオの理論を活用する。

3. 事業の概要

中央教育審議会の「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年）は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、「子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる」（62頁）と述べている。学習者においては、学力学習状況調査の生徒質問紙により、「1，2年生のときに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」及び「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という項目について課題があることが明らかとなった。そこで、学習者が自らの学習を自己調整することを促す学習評価の在り方を、中学校社会科地理的分野の授業実践を通して研究した。

堀哲夫が提唱した一枚ポートフォリオ評価法(One Page Portfolio Assessment=以下「OPPA」)の理論に基づき作成したOPPシートを参考にし、生徒が学習前と学習後で自分の変容に気づき、自己調整を続け、学習を積み重ねていく達成感や自己肯定感が得られるような単元シートを開発した。また、自己調整に関する研究ではジーマンやOECD Education 2030が提唱する見通し(Anticipation)・行動(Action)・振り返り(Reflection)のAARサイクルの理論を用いて、学習者がこれらのサイクルを推進し、自己調整していくための指導方法を工夫した。これは令和6年度から実施される滋賀の教育大綱(第4期滋賀県教育振興基本計画)の中の、本県教育をめぐる現状と取組の視点の1つとされている「学びを通じたウェルビーイング(幸せ)の実現」につながるものである。本研究では、中学校社会科において生徒の自己調整力を育成し、社会科として身につけたい資質・能力の育成のために、学習への自己調整を促す単元シートの効果を最大限に高める見通し・行動・振り返り段階それぞれへの指導方法を探究した。

知識や技能の高まりについて、単元内、単元間、学年間を越えて、自己調整がつながっていく。1授業、1単元、そして複数の単元のつながりの中で見通し、行動、振り返りによるAARサイクルはまわる。そこで、学習者が自己の学習を振り返る単元シートにより、自己調整を進めていけるように、単元

シートには、学習前の学習課題に対する予想、本単元での目標と目標を設定した理由、目標を達成するための具体的な努力事項や工夫を書き、さらに学習後の学習課題に対する自分の考え、本単元での目標の達成度とその理由、次の単元で達成したい目標を書くようにした。また、授業ごとに単元を貫く問いやパフォーマンス課題に対しての学習内容のまとめと、学習方法の振り返りを書くようにした。

このような単元シートを全校の社会科教師と生徒が活用できるように、教師間では「社会科の手引き(教師用)」により、社会科が目指す方向とつけたい資質・能力について、自己調整と学校課題である生徒指導と自己指導能力の関係について、資質・能力や自己調整を育成するための手立てとしてのパフォーマンス課題や単元シートについて、それぞれ整理して共通理解を行った。また、この単元シートを生徒自らが活用できるようにするため「社会科の手引き(生徒用)」を作成し、生徒とも共通理解の上で今年度の実践を始めた。

学習者が自己調整を進めるための次の6つの指導方法の工夫を行った。すなわち、①単元シートの接続による学習目標の接続、②学習目標お手本シートによる支援、③中間での学習目標の振り返りによる意識化、④振り返りへのコメントによる支援、⑤多面的・多角的な自己評価、⑥相互評価会による自己理解の支援である。これら6つの指導方法の工夫は、学習者の形成的アセスメントにより、開発されたり、充実されたりしたものである。

何事にも真剣に取り組む生徒で、学習にも前向きであるが、知識を獲得したり、考えたことを文章にまとめ、相手に伝えたりすることに苦手意識を持っていて、自己肯定感も低く、自分の得意・不得意な部分について明確に答えられない生徒がいた。5月の時点では、単元間の学習目標の接続ができていなかった。このような生徒が他にも見られたため、次の単元への接続の際には学習目標を具体的にするとともに内容を絞り、単元シートの接続に関する説明を丁寧に行った。また、上述した単元シートの接続だけでは学習目標の設定が十分にできない生徒もいるため、単元を終えるごと「学習目標お手本シート」を作成し目標設定をする時間に生徒に配布した。生徒は、学習目標お手本シートの中から、自分にあった具体的な努力事項を見つけ、目標設定を自己調整した。

次に単元シートの裏面の授業ごとの振り返りの中に一定期間ごとに、中間振り返りを入れた。このような中間での学習目標の振り返りでは十分に学習目標を意識できない生徒には、特に丁寧に、個別に振り返りへのコメントを行い、自己調整を促した。質問紙調査では、「振り返りに対する先生のコメントは自分の目標を振り返ったり、次に頑張る目標を見つけたりすることに役立った」に肯定的に回答した生徒は全体の94.8%であり、ほとんどの生徒が教師によるコメントによって、学習目標や授業を見つめ直し、次に何を頑張ればよいのかを考え直すきっかけになっていたと言える。

さらに多面的・多角的なメタ認知を促すために、成長したところと改善したいところ、できたこととできなかったことについて、自己評価の枠を分けた。質問紙調査の結果でも「単元を通しての自己評価はできたことやできなかったことを知るきっかけになったか」に肯定的に回答した生徒は全体の94.9%であった。単元シートによる自己評価によって、生徒が自己理解できている部分はあるが、さらに多面的・多角的に自己理解を深めさせるために、生徒同士による相互評価を取り入れた授業を行った。

4. 今後に向けて

単元シートによる指導は、校内のすべての社会科の教科担任が行い、学習者はAARサイクルによる振り返りを行ったが、形成的アセスメントにより指導を充実させる試みは林により先駆的に探究されたものである。このように形成的アセスメントによる指導の改善のサイクルをすべての教師に広げていく研修の在り方を探ることが今後の課題である。 (岸本 実)

1 共同研究事業

31) エージェンシーを育む小学校社会科の単元・授業のデザイン

1. 事業名および担当者

事業名は、「エージェンシーを育む小学校社会科の単元・授業のデザイン」であり、担当者は次のとおりである。

甲賀市立水口小学校：木村 健二校長，木村 幸一教頭，中川 翔太教諭

学部教員：岸本 実

2. 事業の目的

学習指導要領は、「社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力，考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う」ことが小学校社会科の目標の一つとして掲げている。これらは、OECDの学びの羅針盤が提唱したエージェンシー（責任を持って変化をもたらすため、目標を設定し、振り返り、行動する能力）の土台になる能力と考えられる。そこで、本研究では、エージェンシーを育む小学校社会科の単元・授業のデザインを明らかにする。

3. 事業の概要

小学4年社会科「滋賀県の自然災害」の学習において、1単元をとおして授業実践を行った。クラスの子ども達は、これまで授業中の学び方について振り返ることや、自分達でめあてを作ることがあまりできていない背景があるため、①事前に学習の進め方についてのイメージの共有化、②自己調整し、問題解決に取り組む単元の構成、③e ポートフォリオを用いた振り返り、④振り返りに対する教師からのフィードバックと子ども同士の協働の4つの手立てをデザインした。

単元の学習に入る前に、自己調整学習を子どもと共通理解するため学び方に関するオリエンテーションを行った。AARサイクルを取り入れた自己調整学習を進めるための学習サイクルを作成し、「見通し」「行動」「振り返り」の流れを「いいかも！」「やるぞ！」「どうだった？」と、子ども達にも分かる言葉に置き換え、子どもと各段階の意味や必要性について考えたり気づいたりできるように話し合い、このスパイラルを「いいねサイクル」と名付けた。

表1 自己調整し、問題解決に取り組む単元構成

| 自己調整を促す単元構成（全10+1時間） | 単元レベルのいいねサイクル |
|---|----------------|
| ①「いいねサイクル」のオリエンテーション（課外1時間） | |
| ①滋賀県の自然災害について知り、学習問題(1)を立てる（1時間） | いいかも！ |
| ②多羅尾豪雨災害について調べる（3時間）…GT（語り部さん） 学習問題に対する答えをまとめる（1時間） | やるぞ！ どうだった？ |
| ③滋賀県の防災における課題について知り、学習問題(2)を立てる（1時間）…GT（県土木事務所職員） | いいかも！ |
| ④③の課題解決について調べ、まとめる（3時間） 防災について発信する（1時間）…GT（県土木事務所職員） | やるぞ！ どうだった？ |

表1のとおり、エージェンシーを発揮できる単元構成として、子どもが主体的に問題解決にむかうプロセスで、疑問や思いにこたえる形で地域資料やゲストティーチャー（GT）に出合えるように教材を配置した。さらに、オリエンテーションでの学びを受け、子ども達が「いいねサイクル」を駆動し自己調整しながら問題解決的に学習を進めることができるよう、「いいねサイクル」と単元の流れを一致させ、子ども達にも各活動がサイクルのどこに位置しているのかを示しながら進めた。

子ども達が出合う主な教材を次のように配置し、自己調整しながらエージェンシーを育めるようにした。①では疑問をもてる資料、②では疑問を解決できる資料やGTの語り部さん、③では②を受けて現代の問題を提起する資料やGTの県土木事務所職員、④では問題の解決に活用できる資料やGTの県土木事務所職員、の順である。中でも、GTは社会の問題に立ち向かい、エージェンシーを発揮している人物である。実社会のエージェントに触れることで、子どものエージェンシーはさらに育まれると考えた。なお、どの資料も子ども達の疑問や思いに応える形で提示している。

学びを次時へ生かしつなげるため、1単位時間レベルの「いいねサイクル」を駆動できるよう、「いいかも！見つけてうれシート」（以下「IMUシート」）をTeams上に作成し、eポートフォリオとして実践した。IMUシートは、一枚ポートフォリオ評価法の要素を取り入れ、単元の学びを1枚のシートで確認できるようにした。また「どうだった？」と「いいかも！」について記述する欄を設け、わかったことやわからなかったことを記述し、それらをもとに次回にしたいことを記述するようにした。

一人一台端末上で、同時編集や相互確認、教師からのフィードバックができるようにすることで、学習を振り返るとともに次時の見通しをもって学習を進めることができると考えた。木村が課題とした、原因帰属や適応を促すことができるフィードバックを行った。

以上の4つの手立てによって子どもが自己調整し学び続け、エージェンシーを育むことが明らかになった。一方で、「IMUシート」の活用の改善が必要であることがわかった。本単元では、社会科と自己調整の評価規準を分けて設けていたが、学び方も含めて一体化した評価規準を作れるのではないかと考える。またシートをはじめ、つまずきの見られる子どもへのフィードバックや協働のあり方も検討していきたい。次年度の実践では、社会科の教科の特性としての問題解決的な学習展開を生かして自己調整を含めた学び方を教科の学習内容とまとめて複合的に捉えた学習プロセスを明らかにしたい。なお、本研究では、本校職員対象に職員研修を行い、自己調整の意味や意義、振り返りの方法について学んだ。

4. 今後に向けて

本研究において4年生の児童が社会科の単元「滋賀県の自然災害」を学ぶ際に、どのようにエージェンシーを発揮し、学習の自己調整を行うことができるのかを一定明らかにできた。エージェンシーの発達を保障する小学校社会科の単元・授業のデザインを明らかにするためには、3年から6年への発達をふまえた見通しを持ったカリキュラムのデザインが必要である。「自然災害」に主体的に向き合うなど、小学校の社会科にはエージェンシーの発揮が求められる単元が多い。今後は、各学年の単元デザインを明らかとしたい。

また、今回は4年生のこの単元から自己調整の重要性と方法を学ぶことを導入したが、各学年の1学期より開始し、4年間の積み上げによりさらにエージェンシーの発達の条件を準備することが可能となる。また、このような自己調整の学びは、他の教科や総合的な学習の時間、特別活動などとの連携によって、さらに高まる。教科横断的な学びを見通しつつ、社会科の単元・授業のデザインの在り方を、探究していくことが今後の課題である。

（岸本 実）

1 共同研究事業

32) 理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト～小中連携授業を構想する～

1. 事業名および担当者

事業名は「理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト～小中連携授業を構想する～」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部教員：糸乗 前，大山 真満

CST（コア・サイエンス・ティーチャー）：渡辺 幸寛（甲賀市立水口中学校教頭H24年度認定）

2. 事業の目的

小中学校の連携授業につなげるために、教員研修内容を検討する。「効果的な理科の実験指導」をテーマに、授業に役立つ実践的な研修を行う。小学校で実施する実験と中学校で行う実験の内容の双方を理解することで、特に中学校では小学校時での実験を思い出しながら取り組むことでより深い学びにつなげることを目指す。

3. 事業の概要

甲賀市教育研究所 教師力アップ研修<理科研修>

日時 令和5年7月31日（月）9：00～12：00

会場 水口中学校理科室

参加者 甲賀市・湖南省小中学校教員17名（甲賀市開催であるが、近隣市町からの参加も呼び掛けた）

内容 「効果的な理科の実験指導」

第1部

・小中の連携を考える

小中理科系統一覧表を示しながら、小6と中1で扱う「水溶液」について交流した。

小学校教員には、中学校理科につなげるために、この単元で何を学ばせるか。

中学校教員には、この単元で学んだことを、中学校理科のどこにつなげるか。

・薬品の準備

実験中の薬品の飛散による事故の記事を取り上げ、そのための対策について

目的にあった濃度・危険度の理解

なぜ予備実験が必要なのか。

→何を求めている実験なのかを再確認する場

→定性なのか、定量なのか

→生徒のできないを予測し、できるにしておくため

第2部

・金属と酸素が結びつく実験（中学校領域）

① この実験の最終目的を考える

比例になる結果なのか、結果から比例を導き出せる力なのか、

他人の結果も含めて考察する力なのか

再度、実験に取り組みたいと思う意欲を育てるのか

②実験

4グループに分かれて、中学校で取り組む形で実験を行った。

③実験結果のまとめ

グラフにするのはなぜか ・書く目的は何か。

ICTの利用

・書けない子にはどういう支援をするのか。

・そもそも、紙のグラフに点を取らなければいけないのか。

④考察

きれいなグラフだから、理科の見方・考え方が身につくのか。

・振り返り（日ごろの困り感に答える質疑応答）

上記の内容で、小中学校教員に研修を実施した。普段の授業の中では、十分に小中の連携を意識して各現場で実験等に取り組むことが少ないと考えられたため、市研究所からの研修講師の依頼時に協議し、テーマ設定を行った。また事前に、研究所からアンケートを実施していただき、日ごろの授業での困り感についての情報を集めた。その結果、一番多かったのが、「実験が上手くいかない」という悩みであった。そこで今回の研修では、「本当に実験は上手くいかなければいけないのか」と問いかけながら、正確な結果が必要なものと、そうでないものを見分ける力、そのために何を求めて実験をするのか、その点を考える研修とした。

小学校教員には、理科を苦手と思う教員も多いと感じている。そのため、実験で「できた」感を持たせたいと感じ、成功させたいと思う教員も多いのではないかと考えられる。それが、「上手くいかない」という悩みにつながるのだと考えられる。子どもたち自身が見つけ出すことが一番大切なことで、それを支援する考え方が十分に伝わったか不安ではあるが、研修後の感想では「準備等について、忙しい中でも取り掛かりやすい方法を知ることができた」と、実験に前向きな意見が聞け、一定の成果を得られた。

中学校教員からは、「小学校とのつながりを知るために、授業研究会等に参加しようと思った」という感想があった。甲賀市では、2学期に小中学校で授業研究会を行い、そこに若手教員が研修として参加することになっている。研究所より今回の研修を終え、例年以上に多くの中学校教員が、小学校の授業研究会に参加したと聞いた。小学校の児童の取り組みを知ることの大切さが、中学校理科教員に伝わった結果であれば研修の成果と言えよう。



4. 今後に向けて

今年度は甲賀市のCST教員が、甲賀市教育研究所と連携することで教員研修会を企画した。CST教員は勤務校のみならず、地域の学校での理科教育の中核となり児童生徒の理科教育に関わる能力向上を目指した活動が期待されている。滋賀大学としても、これらの活動への支援として県教委並びに市教委と連携しながら、さらなるCST教員の養成を継続したいと考えている。

(渡辺 幸寛・糸乗 前)

1 共同研究事業

33) 理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト～滋賀 CST 研究会活動～

1. 事業名および担当者

事業名は「理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト～滋賀 CST 研究会活動～」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部教員：大山 真満，糸乗 前

※以下，（ ）内は所属と認定年度。

CST（コア・サイエンス・ティーチャー）：

渡辺 幸寛（甲賀市立水口中学校教頭，H24，滋賀CST研究会会長），
尾関 大応（草津市教育委員会，H22），大橋 良平（長浜市立虎姫学園(前)教諭，H22），
荒川 拓也（大津市立田上中学校教頭，H23），蓮蔵 優治（東近江市立山上小学校教頭，H23），
多和 完章（彦根市立河瀬小学校教諭，H24），桑原 康一（栗東市立治田東小学校教諭，H24），
徳田 辰行（近江八幡市立北里小学校教頭，H24），山中 勇弥（草津市立草津小学校教諭，H25），
堀 道雄（守山市立河西小学校教諭，H25），神田 健太（草津市立山田小学校教諭，H26），
名田 雅信（草津市立志津小学校教頭，H27），小林 大輔（東近江市立愛東南小学校教頭，H27），
大島 良太（草津市立高穂中学校教諭，H28），田中 基（高島市立安曇小学校教諭，H29），
安達 克紀（滋賀県立琵琶湖博物館主任主事，R1），足立明日華（甲良町立甲良中学校教諭，H29准CST認定）

2. 事業の目的

滋賀大学が滋賀県教育委員会との連携協力を得て認定している CST（地域の理数教育における中核的な役割を担う教員）と理科指導力向上を目的とした研修会の企画運営に関する共同研究を行う。

3. 事業の概要

本共同研究ではアフターコロナでの取り組みとして、実物あるいはより身近な内容を共有することでより深い学びにつなげることを目指し、小学校教員・中学校理科教員に実践的な研修を実施した。研修の企画運営と実施は、共同研究担当者の CST 教員が中心となって行った。

CST とは、「理数系教員(コア・サイエンス・ティーチャー:CST)養成拠点構築事業」において、小・中学校教員の理数教育における指導力向上を図ることを目的として、地域の理数教育における中核的な役割を担う教員のことである。本学では、「大学と教委の強固な連携による早期 CST 活動を組み込んだ包括的な養成プログラム」として平成 21 年に（独）科学技術振興機構（JST）から委託され、平成 25 年度からは滋賀大学が滋賀県教育委員会との連携協力を得て養成プログラムとして継続してきた。市教委を通じて県教委から推薦のあった候補者を養成し、令和 5 年度時点で 68 名の CST と 42 名の准 CST（学生プログラム認定者）を認定してきている。さらに、認定された CST 教員および准 CST 教員によって滋賀 CST 研究会が組織され、毎年研修会が実施されている。県内を 6 つのブロックに分け、滋賀県および各市の教育委員会での小・中学校理科部会の充実した活動に加えて、滋賀 CST 研究会のネットワークが教員各自の連携協力や情報交換、特に授業に関する相談のできる繋がりとして SNS も活用し、さらに活動の幅が広がっている。

本共同研究実施研修： 令和5年度滋賀 CST 研究会全体研修会

日時 令和6年1月11日（木） 14：00～16：15

会場 滋賀県立琵琶湖博物館

参加者 滋賀 CST 研究会会員および草津市教育研究会小学校理科部会（小学校理科主任）29名

内容 第1部 講義「知っているようで奥が深い琵琶湖について」

琵琶湖博物館 環境学習・交流係 安達克紀主任主事（認定 CST）

- ・琵琶湖の歴史
- ・琵琶湖の大きさ（図で描かれるものと、実際の感覚の違い）
- ・固有種など豊かな自然について
- ・環境保全の歴史 など

第2部 実習「冬の琵琶湖のプランクトン観察」

- ・プランクトンについて
- ・採集実習
- ・観察：授業で利用するために

第3部 自由見学

今までの滋賀 CST 研究会の全体研修会は、会員による授業研究会や会員のスキルアップを目指した施設での研修を行ってきた。本年の研修会担当が草津ブロックであったことから、草津市内にある滋賀県立琵琶湖博物館での開催とした。さらに草津市には滋賀大学認定の CST 教員が多数在籍しており、草津市教育委員会にも CST 教員が勤務していることから、草津市の小学校理科部会の研修会との合同開催とした。琵琶湖博物館では、今までにも琵琶湖学習をするための知識を得る目的で、中学校理科部会の夏季研修会などが開催されてきた。本共同研究の特筆すべき点は、今回の研修講師の主任主事を認定 CST が担当することで、研修の目的を明確化した点である。それにより、さらに充実した研修内容となった。

本事業では、昨今の課題として、i) 琵琶湖の魅力や現在の琵琶湖が抱えている問題などをよく知らない現場教員が非常に多いこと、ii) 琵琶湖について学びたいと思っている教員に対して、学ぶことができる機会が少ないのも現状、と捉えた。こうした中、これから地域のリーダーとなる教員が、琵琶湖博物館で琵琶湖に関する講義を聞き、プランクトンの専門家に話を聞きながら実技体験したことは、大変貴重な機会を提供できたと考える。

さらに、小学校理科部会の主任の参加は、CST 教員が地域で開催する研修会を開くために大いに役立った。研修会で一緒に実習を行うことで、小学校教員の理解力と力量を把握でき、今後の研修計画にも生かせるものとなった。

4. 今後に向けて

今年度は草津市の CST 教員が、草津市教育委員会並びに教育研究所と連携することで教員研修会を企画した。CST 教員は勤務校のみならず、地域の学校での理科教育の中核となり児童生徒の理科教育に関わる能力向上を目指した活動が期待されている。特に児童生徒が科学的・論理的思考力を身に付けられる授業内容やそのための研修指導上の手立てや工夫が求められる。滋賀大学としても、これらの活動への支援として県教委並びに市教委と連携しながら、CST 教員の養成を継続したい。さらに認定 CST 教員で構成される研究会への支援を行うことで滋賀県の理科教育への貢献に繋がりたいと考えている。

（渡辺 幸寛・大山 真満）

2 石山プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、石山プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：今井弘樹（代表者） 大橋宏星

大津市立石山小学校：藤井 都（校長） 大津市立石山幼稚園：赤井加代子（園長）

2. 事業の目的

子どもたちの多様化した課題を抱える今日の学校状況から、新規採用教員といえども、即戦力として実践的指導力や教員としての専門性が強く求められるようになってきている。本学部では、平成 17 年度に「石山プロジェクト」を立ち上げ、以後大学近隣の公立小学校と公立幼稚園の協力を得て、学生を毎年、学校の教育活動に参加させる活動（スクールサポーター活動）に取り組んでいる。参加の学生は全て本人の自主参加である。この活動の目的は、学生が子どもや学校の実情を体験的に知るだけでなく、具体の場面における子どもの心情の理解や教師として求められる対応の仕方など、実践的な指導力を身に付けること、また、子どもたちとふれあう経験を積む中で、定期的に熟練の教職経験者に相談し共に語り合うことで、教師としての対応力を高めることをねらいとしている。

3. 事業の概要

本事業に対して、当該校園のみならず省察会講師をお願いしている退職校園長からの評価は高い。その理由は、サポーターとして本事業に参加している学生の意識の高さと教師を目指している純粋な姿に、これからの教育を担う若者への期待を強く感じていただいていることにある。2020 年はコロナ感染拡大のため中止したが、翌年から再開し、昨年度は春学期 幼 3 名 小 18 名、秋学期 幼 8 名、小 23 名(春学期よりの継続参加 6 名含む)が参加、今年度は春学期 幼 9 名、小 24 名(内、R4 以前より参加継続 8 名含む)、秋学期 幼 8 名(内、春より継続 3 名含む)、小 31 名(内、春以前より継続 13 名含む)が参加となった。

①春秋の学期に合わせて参加希望を募る。年間に春秋で 30 時間の活動を目指す。

②学生個々の予定を勘案して学校園と相談のうえ各自の活動日時を決める。ほぼ週 1～2 日。

③春秋、各 2 回省察会、午後 4 時 30 分～約 1 時間、場所/大学、参加は自主参加

小：2 月に年間報告会、場所/石山小学校 幼：9 月・2 月に報告会、場所/石山幼稚園

④アドバイザー：幼稚園 1 名、元公立幼稚園長、小学校/退職女性校長会から毎回(報告会含む) 2 名程度

4. 活動内容

○各教科等で基礎的な内容の習熟を図る指導補助 ○個別の指導補助 ○日常生活の指導補助

○各教科や総合的な学習の時間、遠足等の校外学習での引率補助

○生活単元学習（特別支援学級）における指導補助 ○発表会の練習や自由遊びにおける指導補助

5. 定例省察会の開催

毎月下旬に幼稚園と小学校の校種別に、省察会を大学で開催。

省察会では、学生が当該月の学校園でのスクールサポート活動を振り返り、やり甲斐や感じたこと、自信がついたこと、自らの成長を自覚できたこと、課題に思っていること、悩んだり、戸惑ったりし

ていること、子どもの言動等をどう理解すればいいか分からなかったこと、指導や教育に当たっておられる先生の意図など、悩みや疑問点を出し合い互いに意見を交流した。この省察会には、退職園長、女性校長会の協力を得て、学校園での経験豊かな熟練の元校長の先生方を外部講師として迎えた。先生方から学生の提示した課題について明快な返答や励ましなどの指導助言を受けることで、学生自身が課題を明確にし、子どもたちへの対応改善に意欲を高める機会となった。

一方小学校では、省察会・報告会(自主参加)への参加が少数になっているという課題がある。そのため修了書を渡すことで自覚を促すなど工夫をした。次年度は根本的な参加者増への対応が課題である。

6. 省察会、報告会での意見交流から

【小学校／学生】

- ・先生に向いていない？という不安を丁寧に聞いて下さり、帰りに少しリラックスできました。
- ・最近話題になっているフリースクールや子どもへの対応について詳しく聞くことができました。
- ・人間関係づくり、学級づくりについて学びました。同じ学年団の先生方と連携して生徒との関係や仲を深めていく方法、子どもからの信頼が他の子どもや保護者の信頼に繋がることを知りました。
- ・省察会への参加は3回目になります。今回も多くのことを学びました。教採勉強頑張ります。

【小学校／講師】

- ・どの学生さんもなんと素直で一生懸命で志が高く感動しました。私たちの頃は教育実習まで子どもたちと触れ合う機会がなかったので、石山PJはとても羨ましいです。「先生」は子どもたちから(他の職種では得られない)元気や感動がもらえる素晴らしい職業です。是非「先生」になってください。

【幼稚園／学生】

- ・自分の周りに小さい子どもが全くいなかったの、子どもとの関わり方に慣れていなかったけど、率直に3歳児の素直さや、発達段階の違いに驚きました。
- ・省察会において、講師の安倍先生から認めてあげることや褒めることなど関わり方をアドバイスしていただき、園児にどのような声掛けをすればよいか分かりました。
- ・活動の中で全体を見ることと、個々を見ること両方を同時に行う大変さも感じました。

【幼稚園／講師】

- ・石山PJは、学生にとって本当に貴重な経験だと思います。机上論ではなく、子どもに学んでいく、先生に学んでいくという姿勢の中で自分を高めていくというPJの在り方が素晴らしいです。子どもを中心に、子どもを語れる皆さんには、この経験を生かして素敵な先生になってほしいと思います。



石山小学校での報告会(2024. 2. 9)



石山幼稚園での報告会(2024. 2. 13)

(大橋宏星, 今井弘樹)

3 出前講義

この出前講義は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。既に、教育学部教員は個別に県や市町教育委員会や各学校の依頼を受け、研修講師等の役割を遂行している。しかし、これらのネットワークが成立していない場合や新任教員の派遣の場合に限っては、本出前講義は有効なものであろう。

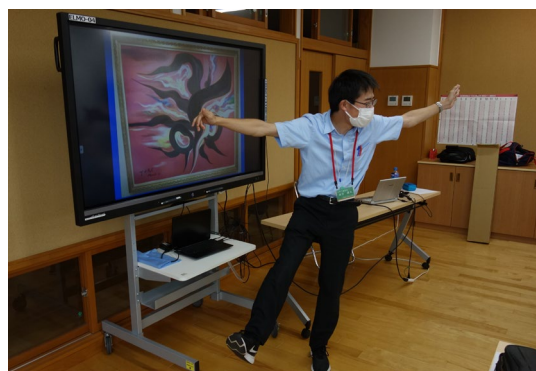
令和5年度の出前講義については、こども園3園(延べ8園)、小学校10校(延べ12校)、高等学校3校(延べ4校)、図書館、青年会議所、子育て支援センターの計19件(延べ27件)の実績があった。他に県内外からいくつかの依頼があったが、日程等の関係で成立しなかったケースがある。下記が今年度実施した出前講義である。

◆ 出前講義一覧

| 講師 | 実施日 | 依頼機関 | 対象 | 題名 |
|-------------|-------|-----------------------|----------------------|--|
| 山田 淳子 准教授 | 5月22日 | 草津市立矢倉こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び指導(サーキット遊び) |
| 大平 雅子 教授 | 5月23日 | 学校法人光泉カトリック中学・高等学校 | 生徒(高等学校) | ストレスについて |
| 青木 善治 教授 | 5月24日 | 米原市立米原小学校 | 教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 青木 善治 教授 | 5月31日 | 草津市立草津第二小学校 | 教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 青木 善治 教授 | 6月16日 | 大津市立中央小学校 | 児童・教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 青木 善治 教授 | 6月28日 | 草津市立草津第二小学校 | 児童・教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア:実際編 |
| 松丸 真大 教授 | 7月8日 | 東洋大学附属姫路高等学校 | 生徒・教員(高等学校) | 日本語の多様性から考える日本語学 |
| 山田 淳子 准教授 | 7月10日 | 草津市立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び(サーキット遊び・鉄棒)① |
| 石川 俊之 教授 | 7月25日 | 学校法人福井精華学園 啓新高等学校 | 生徒・教員(高等学校) | 湖沼の生態系 |
| 山岡 武邦 特任准教授 | 7月25日 | 学校法人福井精華学園 啓新高等学校 | 生徒・教員(高等学校) | 科学教育における話し合い活動 「滝をのぼる水滴」を事例として |
| 青木 善治 教授 | 7月28日 | 草津市立山田こども園 | 教員(幼稚園) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞・造形する指導のアイデア |
| 糸乗 前 教授 | 7月30日 | 守山市立図書館 | 生徒(中学・高等学校)・保護者・一般市民 | 令和5年度理系専門分野講座「生化学」 「細胞をつくっている物質・脂質 たくさんある生物の種類と細胞にある脂質との関係とは!？」 |
| 青木 善治 教授 | 7月31日 | 新潟県見附市立葛巻小学校 | 教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 青木 善治 教授 | 8月5日 | 一般社団法人長浜青年会議所青少年育成委員会 | 保護者 | コーチングを意識するだけで子どもが変わる〇〇の方法 ~子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、違いはここにあった! |
| 大平 雅子 教授 | 8月6日 | 近江八幡市立桐原東小学校 | 教職員・学校医・PTA・保護者(小学校) | ストレスと上手に付き合う方法 |
| 青木 善治 教授 | 8月24日 | 長浜市立長浜小学校 | 教員(小学校) | コーチングを意識するだけで子どもが変わる〇〇の方法~子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、違いはここにあった! 「作品をみる・つくる楽しく鑑賞する指導のアイデア」 アート・カードを用いた鑑賞活動から |
| 山田 淳子 准教授 | 9月4日 | 草津市立矢倉こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 〇3歳児…ボールを使った遊びの指導 〇4歳児…転がしドッジボールの指導 〇5歳児…リレー遊びの指導 |
| 山田 淳子 准教授 | 9月11日 | 草津市立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び(サーキット遊び・鉄棒)② |
| 青木 善治 教授 | 9月27日 | 近江八幡市立岡山小学校 | 児童・教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |

| 講師 | 実施日 | 依頼機関 | 対象 | 題名 |
|-----------|---------|------------------|-----------------|--|
| 山田 淳子 准教授 | 11月 13日 | 草津市立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び(サーキット遊び・鉄棒)③ |
| 大平 雅子 教授 | 11月 29日 | 栗東市地域子育て包括支援センター | 保育士・児童厚生員・市役所職員 | ストレスと上手に付き合う方法・良質な睡眠とは |
| 大平 雅子 教授 | 12月 11日 | 甲賀市立水口小学校 | 教員・学校医・保護者(小学校) | ストレスと上手に付き合う方法 |
| 山田 淳子 准教授 | 1月 12日 | 草津市立矢倉こども園 | 児童・教員(幼稚園) | ○3歳児…簡単なルールのある遊び ○4歳児…縄遊びの指導 ○5歳児…縄跳びの指導 |
| 山田 淳子 准教授 | 1月 15日 | 草津市立老上こども園 | 児童・教員(幼稚園) | 運動遊び(縄跳び・ボール遊び)④ |
| 青木 善治 教授 | 1月 26日 | 高島市立本庄小学校 | 教員(小学校) | 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア |
| 大山 真満 准教授 | 2月 14日 | 大津市立堅田小学校 | 児童(小学校) | 太陽の科学 |
| 篠原 雅史 准教授 | 2月 28日 | 大津市立堅田小学校 | 児童(小学校) | 正多面体とその数理 |

◆ 出前講義の様子, 利用された学校園からの感想 (一部抜粋)



- ・ 様々な運動遊びの提案をしていただき、その中での先生の言葉のかけ方や、遊びに変化をつけていかれる姿がとても勉強になりました。
- ・ 子どもたちの様々な考え方、発想がのびのびと発言されて、とても素晴らしかったです。また、教員も一緒に参加して考えることができました。クラスの中でこれまであまり発言することがなかった子どもも楽しそうに発言している姿が見られ、うれしい気持ちになりました。
- ・ 新しい知識を得る楽しさや、新たな視点で考える面白さが伝わってくる講座でした。

なお、多くの教育関係者の方々に本出前講義を利用していただくため、出前講義一覧を本学部ホームページにアップロードしている。次が令和5年度の出前講義一覧である。

【国語教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|--------|--------------------|--------------------|---|--|
| 近江国と和歌 | 井ノ口 史 (いのぐち ふみ) | 国語教育講座 (日本古代文学) | 生徒(中・高) 教員(中・高) 保護者・市民一般 | 古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介します。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。 |
| 書とその周辺 | 中村 史朗 (なかむらしろう) | 国語教育講座 (書道) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 人はどのようにして「書之美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において“手書き”の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。 |

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|---------------|----------------------|----------------------|---|--|
| 国語教育における学びの探究 | 長岡 由記 (ながおか ゆき) | 国語教育講座 (国語教育学) | 教員(幼・小・中) | 近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していききたいと思います。 |
| 唐詩を読もう | 二宮 美那子 (にのみや みなこ) | 国語教育講座 (中国古典文学) | 生徒(中・高) 教員(小・中・高) 市民一般 | 中国古典詩を代表するのが唐詩(唐代に作られた詩)です。唐詩には、古くから日本人に愛されてきた多くの素晴らしい作品があります。この講義では、作品の背景を丁寧に解説しながら、漢字一文字一文字にこめられた意味を大切に唐詩を読み解き、その豊かな世界をご紹介します。 |
| 方言を考える | 松丸 真大 (まつまる みちお) | 国語教育講座 (日本語学/方言学) | 児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。その中でも地域による言葉の違い(=方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜ・どのように方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。 |

【社会教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|-------------------------|----------------------|-----------------------------|---|--|
| 地理から考える物語の舞台 | 安藤 哲郎 (あんどう てつろう) | 社会科教育講座 (地理学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般 | 説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。 |
| 史料を基礎とした日本史(前近代史) | 宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき) | 社会科教育講座 (日本史学/ 日本中世史) | 児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高) | 歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。 |
| 古代ローマ史にみる曖昧な「史実」 | 大清水 裕 (おおしみず ゆたか) | 社会科教育講座 (西洋史/ 古代ローマ史) | 生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般 | 歴史学は、様々な史資料を用いて過去の社会を再構成しようとする学問です。しかし、そこで用いる史資料が互いに矛盾していたり、あるいは荒唐無稽だったりすることは少なくありません。本講義では、古代ローマ史の中から有名な事件を取り上げ、人口に膾炙している「史実」の曖昧さと、「史実」を確定しようとする歴史学の営みをご紹介します。 |
| 論理学初歩 | 齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ) | 社会科教育講座 (哲学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことかを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リーズニングについて、その基本の紹介と実践を目指した演習を行います。 |
| 滋賀の近代史 | 馬場 義弘 (ばんば よしひろ) | 社会科教育講座 (政治学/歴史学) | 市民一般 | 明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、籠手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。 |
| 社会調査に触れる | 宮本 結佳 (みやもと ゆか) | 社会科教育講座 (社会学) | 市民一般 | 近年、パソコンを利用する機会が増え、表計算ソフトが身近になったこともあって様々な場面でアンケート(質問紙調査)を実施する機会が増えています。本講義ではアンケートをつくる時、一体どのようなことを気をつけていけばいいのかについてをご紹介します。 |
| 身近な事件や話題をもとに法・裁判の役割を考える | 渡邊 暁彦 (わたなべ あきひこ) | 社会科教育講座 (法律学/ 日本国憲法) | 児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 私たちが「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。法や憲法、そして裁判に対する関心も高まっています。本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文なども活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。 |

【数学教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|-----------|---------------------|-------------------|---|---|
| 正多面体とその数理 | 篠原 雅史 (しのはら まさし) | 数学教育講座 (離散幾何学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・高・特) 保護者・市民一般 | 正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。 |

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|--------------------------|-----------------------|-------------------|---|--|
| 無限の考え方 | 神直人 (じん なおんど) | 数学教育講座 (解析学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用してしています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。 |
| 非線形現象の解析 | 鈴木 宏昌 (すずき ひろまさ) | 数学教育講座 (解析学) | 生徒(高) 教員(中・高) | 私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わり的一面を紹介いたします。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。 |
| 算数・数学教育の理論と実際 | 高澤 茂樹 (たかざわ しげき) | 数学教育講座 (数学教育学) | 教員(小・中) | 算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導するべきかについて考えたい。 |
| 江戸時代の数遊びから見る現代数学 | 長谷川 武博 (はせがわ たけひろ) | 数学教育講座 (代数学) | 生徒(高) 教員(中・高) | 江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊びに「目付字(めつけじ)」・「継子立(ままこだて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。 |
| 数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業 | 渡邊 慶子 (わたなべ けいこ) | 数学教育講座 (数学教育学) | 教員(小・中・高) | 「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探索した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。 |

【理科教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|-----------------|----------------------|-------------------------|--|---|
| 細胞をつくっている物質・脂質 | 糸乗 前 (いとのり さき) | 理科教育講座 (生化学) | 生徒(中・高) | 生物を形作っている細胞は脂質でおおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとってあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。本講義では「セラミド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話とどのように調べるかなどのお話をします。 |
| 太陽の科学 | 大山 真満 (おおやま まさみつ) | 理科教育講座 (太陽物理学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) | 太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。 |
| コミュニケーショントレーニング | 加納 圭 (かのう けい) | 理科教育講座 (科学コミュニケーション) | 生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大キャリア通信・サンクス2013年1月7日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝える・分かち合う」ができるようになります。 |
| 物性物理学入門 | 恒川 雅典 (つねかわ まさのり) | 理科教育講座 (物理学／物性物理学) | 生徒(高) 教員(高) | 「物性」といってもなじみが薄いかもしれませんが、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根拠から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話します。 |
| 私たちの化学 | 徳田 陽明 (とくだ ようめい) | 理科教育講座 (無機化学／物理化学) | 教員(小・中・高) | 化学が私たちの暮らしをいかに豊かなものとしているかについて講習します。また、小中高での学びがどのように大学に接続するのかについて酸とアルカリをテーマに説明します。準備や片付け(廃棄を含む)の簡単な化学の実験を体験して頂き、生活用品を使った実験についても紹介します。 |
| 遺伝情報とは何か? | 古橋 潔 (ふるはし きよし) | 理科教育講座 (生物学) | 生徒(高) | 生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか?この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。 |

【音楽教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|--------------------------------|----------------------|---------------------------|--|--|
| オーボエ演奏法／ 木管アンサンブル | 中根 庸介 (なかね ようすけ) | 音楽教育講座 (オーボエ／ 木管合奏) | 生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般 | オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。 |
| 楽しい音楽づくり | 林 睦 (はやし むつみ) | 音楽教育講座 (音楽教育) | 教員(幼・小・中・高・特) | 音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。楽器がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間と一緒に体験できたらと思います。 |
| 音による表現を めぐって | 若林 千春 (わかばやし ちはる) | 音楽教育講座 (作曲／音楽理論) | 教員(中・高・特) 保護者・市民一般 | お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの?」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通して、音による表現を共に深めてゆく場を体験してみましょう。 |
| 本当の「声」と出会う ～ヴォイス トレーニング～ | 渡邊 史 (わたなべ あや) | 音楽教育講座 (声楽) | 児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 その他(企業社内研修、 マナー講座等) | 人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。 みなさんの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか? 発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。 その「声」を用いた歌唱表現まで踏み込むことも可能です。歌唱、合唱等のブラッシュアップにも、機会をご活用ください。 |

【美術教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|---|----------------------|------------------------|--|---|
| 入門アート ～ラクガキから アール・ブリュット まで～ | 藤田 昌宏 (ふじた まさひろ) | 美術教育講座 (彫刻／現代美術) | 児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) その他(福祉関連作業所など) | ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあいっこし、ラクガキの名作を鑑賞?し、そこから見えてくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。 そこからの展開は、「アールブリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講して下さる顔ぶれやリクエストでアレンジします。 |
| 学びが深まる 「造形遊び」 (子供の主体的な 探究活動としての 図画工作) | 村田 透 (むらた とおる) | 美術教育講座 (美術科教育) | 児童(4～5歳児・小) 教員(幼・小) | 「造形遊び」は、準備や後片付けが大変で、抵抗があると思いませんか? 「造形遊び」で、子供は楽しく意欲的だけど、「遊びの中に学びはあるの?」と思いませんか?「個性的だよね」「いろいろあっていいよね」で、子供の「造形遊び」への評価を思考停止にしていますか?「造形遊び」には、表現の多様性(現象)と学びの深まり(探究)があります。 現場で明日から実践できる題材体験を通して、「造形遊び」の学び・楽しさ、題材開発、指導や支援の在り方について学びます。 |
| グラフィックデザイン の世界 | 世ノ一 善生 (よのいち よしお) | 美術教育講座 (グラフィックデザイン) | 生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般 | グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。 しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話したいと思います。 |
| 探究心が芽生える 教科横断型 ハイブリッド鑑賞 | 馬淵 哲 (まぶち さとし) | 美術教育講座 (絵画/美術科教育) | 児童・生徒(小・中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般 | 伝統的美術から現代の製品デザインまで、身近な美術品を比較したり、対話したりしながら鑑賞します。子どもの探究心の芽を育てる鑑賞学習のヒントになればと思います。総合的な学習やSTEAM教育等、教科横断的な探究的学習の導入例としても提案したいと思います。 |

【保健体育教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|---------------------------------|---------------------|----------------------|---|---|
| ①ストレスと上手に 付き合う方法 ②良質な睡眠とは | 大平 雅子 (おおひら まさこ) | 保健体育講座 (衛生学/健康科学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | ①誰もが聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、ストレスと「上手に付き合う」方法について様々な視点から考えていきます。 ②エビデンスに基づいて、良質な睡眠とは一体何かを考えていきます。 |

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|--------------------------|---------------------|----------------------|----------------------------|--|
| 生理学の基礎に基づいた効果的な運動・トレーニング | 松田 繁樹 (まつだしげき) | 保健体育講座 (体力科学/生理学) | 生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般 | 運動・トレーニングを行う際には、ヒトの生理的特徴や科学的知見に基づいた合理的なトレーニングをするべきです。本講義では、運動生理学の基礎を踏まえたうえで、効果的な運動・トレーニングについて考えていきます。 |
| 運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり | 山田 淳子 (やまだ じゅんこ) | 保健体育講座 (体育科教育) | 児童(幼・小) 教員(幼・小) | 教師も子どもも運動が大好きになれる体育科の授業づくりを、実技や講義を通して学んでいただければと思います。体育科の授業づくりのヒントとなる事例を紹介していきます。子ども向けにも模擬授業を行い、子どもも教師もともに学ぶ場を提供したいと思っています。 |

【技術・情報教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|------------------------|----------------------|--------------------------------|-----------------------|---|
| 教育工学的手法を用いた教育環境の改善 | 岩井 憲一 (いわい けんいち) | 情報教育講座 (認知科学/ 教育工学) | 生徒(中・高) 保護者 | 教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等の ICT 導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。 |
| 一本の木から椅子をつくる | 岳野 公人 (たけの きみひと) | 技術教育講座 (技術教育/ 環境教育) | 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介する。米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にこもって、器づくりをしていたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。 |
| 宇宙の誕生と進化 | 穂積 俊輔 (ほづみ しゅんすけ) | 情報教育講座 (天体物理学) | 市民一般 | 宇宙はビッグバンという大爆発から始まったとされています。では、なぜそのような大爆発があったことがわかったのでしょうか。さらに、「大爆発」とはガス爆発のようなものなのでしょうか。このような宇宙の誕生から始めて現在の私たちが見ている宇宙の姿を、人類の宇宙観の変遷とともに解説していきます。 |
| 動物の行動を真似るロボット | 右田 正夫 (みぎた まさお) | 情報教育講座 (認知科学/ ロボット工学) | 生徒(高) | 外界からの情報に応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。 |
| 複雑系入門 -フラクタルとは何だろう- | 水上 善博 (みずかみ よしひろ) | 情報教育講座 (コンピュータ シミュレーション) | 生徒(高) | 海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした図形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。 |

【家庭科教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|-----------------------------|----------------------|-------------------|---|---|
| 何をどう食べる？ -自分のための食べ物、食べ方- | 久保 加織 (くぼ かのり) | 家政教育講座 (食物学) | 教員(小・中・高・特) 市民一般 | 誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいかに、きちんと理解しておくことが大切です。様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。) |
| くつろぎの住まい | 田中 宏子 (たなか ひろこ) | 家政教育講座 (住居学) | 児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。また、そこで暮らす人々がゆつくりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。 |
| 家族の機能 | 平松 紀代子 (ひらまつ きよこ) | 家政教育講座 (家庭経営学) | 児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般 | 家族の存在はどのような機能を果たしているだろうか。社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代と同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りしつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話しします。 |

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|--------|--------------------|-----------------|---------------------|--|
| 衣生活と環境 | 與倉 弘子 (よくら ひろこ) | 家政教育講座 (被服学) | 教員(小・中・高・特) 市民一般 | 環境問題に配慮した衣服の着装行動について解説します。 衣服による気候の調節と省エネルギー(暑さ寒さに応じた着方、クールビス・ウォームビスなど)、有害紫外線と健康の関わりや衣服による紫外線対策について、衣服のリユース・リサイクルなど、環境保全に関わる衣生活の問題について考えてみましょう。 |

【英語教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|----------------------------------|---------------------|-------------------------------|---|--|
| 人間の言葉の能力について:母語の獲得、外国語の習得と脳のはたらき | 大嶋 秀樹 (おおしま ひでき) | 英語教育講座 (英語科教育/ 言語心理学) | 児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | ことばの能力は、生き物の中で、人間だけが持つ能力です。 人間は、ことばを覚え、ことばを使ってコミュニケーションをします。 ことばの能力には、音声、語彙、文法、意味の領域で、脳の活動が大きく関わっています。 講義では、人間の持つことばの能力、ことばの能力と脳の働き、母語の獲得、外国語の習得について、最新の言及の知見にも触れながら、話を進めようと思います。 |
| イマージョン教育と英語学習 | 田中 佑美 (たなか ゆみ) | 英語教育講座 (英語教育学) | 教員(小・中) | 本講義では、イマージョン教育と英語学習、特に英語学習に対する動機づけについてお話します。 イマージョン教育はカナダで始まった第二言語を使って理科や社会などの教科を指導するバイリンガル教育の一つです。 日本における英語によるイマージョン教育にも触れながら、英語を通して教科を学ぶことによる英語学習と英語学習に対する動機づけについてご紹介します。 |
| アメリカ小説を読む | 林 直生 (はやし なお) | 英語教育講座 (アメリカ文学/ アメリカ文化) | 市民一般 | 詩や小説などの文学作品は、それ自体が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。 この講義では、主に 20 世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。 |

【学校教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|------------------------------|----------------------|----------------------|---------------------------|---|
| 教師-生徒関係の変容とこれから | 太田 拓紀 (おおた ひろき) | 学校教育講座 (教育社会学) | 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 現在、教師と児童・生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師-生徒関係の歴史的变化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。 |
| 他者理解のコミュニケーション心理学 | 蔵永 瞳 (くらながひとみ) | 学校教育講座 (社会心理学) | 教員(幼・小・特) 保護者・市民一般 | 人間は、他者とたくさんのコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話します。 |
| 比較教育学で教育を考える | 児玉 奈々 (こだま なな) | 学校教育講座 (比較教育学) | 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 | 比較教育学は、諸外国の教育事象を対象に教育と社会のつながりを考察する学問領域です。 この講義では、現代の日本の学校で課題となっていることの諸外国における状況や各国の解決策を見ていきます。諸外国の教育事象の考察を通して、日本の学校の当たり前が海外の学校では当たり前ではないことに気づき、教育と社会のつながりを知り、さらに、人間にとって教育や学校はどんな意味を持つものなのか、教育や学校の本質について考えることを目指します。 |
| 教育法規を読み解く | 藤村 祐子 (ふじむら ゆうこ) | 学校教育講座 (教育制度学) | 教員(小・中) | 教育法規は、教育の枠組みとなる重要な要素です。様々な教育改革が進められる中で、教育法規に目を通し、教育に何が求められ、どの方向に進もうとしているのか、改めて考えてみたいと思います。 |
| 『エミール』を読む～生きるための教育と大人の役割について | 三輪 貴美枝 (みわきみえ) | 学校教育講座 (教育学・教育哲学) | 保護者 | ルソーによって書かれた『エミール』は、人が教育をまさに「生きるために」必要とした時代のものであり、その思想は時代や文化の違いを越えて現代の私たちにも「生きること」の意味を考える材料を提供してくれます。 それが書かれた時代状況等にも触れながら、「生きるための教育と大人の役割」について考えます。 |
| キャリア教育の理解と推進 | 若松 養亮 (わかまつ ようすけ) | 学校教育講座 (キャリア心理学) | 教員(幼・小・中・高・特) | 進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話します。 |

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|-------------------|----------------------|-------------------|-----------------------|---|
| 子どもが「こころ」に気づく時 | 渡部 雅之 (わたなべ まさゆき) | 学校教育講座 (発達心理学) | 教員(幼・小・特) 保護者・市民一般 | 幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができません。他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ働きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話します。 |
| 育みたい学力に応じた評価課題づくり | 山本 はるか (やまもと はるか) | 学校教育講座 (教育方法学) | 教員(小・中・高) | 子どもたちに育みたい学力をどのように考えるのか、その学力を見取る評価課題をどのように作るのかについて、ワークショップ形式で進めていきます。 |

【幼児教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|------------------|----------------------|-------------------|------------------|--|
| 幼児期の遊びを豊かにする環境構成 | 山本 一成 (やまもと いっせい) | 幼児教育講座 (幼児教育学) | 生徒(高) 教員(幼・小) | 幼児は遊びを通して様々なことを学んでいきます。そして、幼児が夢中になって遊ぶためには、子どもたちの遊びを可能にする環境が整えられている必要があります。この講座では、子どもの遊びの大切さや、遊びにかかわる環境の在り方について、理論と実践の両面から学んでいきます。 |

【障害児教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|----------------------|----------------------|-----------------------------|----------------------|---|
| 障害の原因と最近の話題 | 江原 寛昭 (えはら ひろあき) | 障害児教育講座 (小児神経学) | 教員(幼・小・中・高・特) | 近年、遺伝医学などの研究の急速な進展により、病気や障害の原因の解明が急速に進展しました。この講義では、それらの研究の成果を中心に、障害に関するトピックスを概説します。 |
| ちょっと気になる子どもたちの発達と教育 | 窪田 知子 (くぼた ともこ) | 障害児教育講座 (特別支援教育) | 教員(幼・小) 保護者 | 私たちの身のまわりにいる“ちょっと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいのか？家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか？保護者とうまく連携するには…？などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。 |
| 障害のある子どもの発達と教育 | 白石 恵理子 (しらいし えりこ) | 障害児教育講座 (障害心理／ 障害児教育) | 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 | 主として知的障害や発達障害をもつ子どもたちの発達と教育について考えます。 (発達の時期等については、ご相談に応じます。) |
| 支援の必要な子どもと教育 | 羽山 裕子 (はやま ゆうこ) | 障害児教育講座 (障害児教育) | 教員(小・中) | 通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまずきを抱えがちなのか、どのような支援が可能なのか、一緒に考えていきたいと思います。 |
| 「気になる」児童・生徒の発達の理解と支援 | 松島 明日香 (まつしま あすか) | 障害児教育講座 (障害児心理) | 教員(幼・小・中・特) 保護者 | 友達とトラブルになる、じっとしてられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が注目されています。その支援と対応には彼らの困難さを発達の的に理解していくことが重要です。本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童・生徒の困難さをどのように理解し、対応していけば良いのかについて考えます。 |

【環境教育関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|---------|----------------------|-----------------------|---|--|
| 湖沼の生態系 | 石川 俊之 (いしかわ としゆき) | 環境教育講座 (湖沼生態学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 湖沼の水の中には一見すると何も無いように見えます。しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。琵琶湖を例に生物と生息環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。 |
| 食料生産と環境 | 森 太郎 (もり たらう) | 環境教育講座 (園芸学/植物病理学) | 児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか？一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか？の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。 |

【教職大学院担当教員関係分野】

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|--|----------------------|-------------------------------|--------------|--|
| 教師の変容と省察を促す研修会の創造 | 青木 善治 (あおき よしはる) | 高度教職実践専攻 (教育方法学) | 教員(小・中) | 「主体的・対話的で深い学び」の実現の上で不可欠な要因があります。それは、そもそも教師が一人ひとりの子どもの学びの姿をしっかりとりとえることができないければはじまりません。しかしながら、教師自身の見方や感じ方を一人でとらえ直すことはなかなか難しいことです。そこで、令和2年度まで新潟県内の小学校校長として研修による学校経営を行ってきた経験もいかに、私たち教師が生涯に渡って学び続け、変容し省察しやすい研修会を授業研究時の事後協議会を活用して行います。 |
| コーチングを意識するだけで子どもが変わる〇〇の方法～子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはどこにあった！ | 青木 善治 (あおき よしはる) | 高度教職実践専攻 (教師教育) | 若手～中堅教員(小・中) | 子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはどこにあるのでしょうか。実は、コーチングを意識するだけで子どもが変わる様々な方法について、具体的に楽しみながら紹介します。令和2年度まで新潟県内の小学校校長として学校経営を行ってきた経験もいかにして行います。 |
| 作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア | 青木 善治 (あおき よしはる) | 高度教職実践専攻 (美術科教育) | 教員(幼・小・中) | 新潟県立近代美術館勤務の経験もある講師が、「対話型鑑賞(朝鑑賞)」や「アートカード」や「造形遊び」に関する活動など、楽しく表したり、鑑賞したりする指導のアイデア満載な研修会を行います。 |
| 学校危機管理 | 今井 弘樹 (いまい ひろき) | 高度教職実践専攻 (学校経営) | 教員(小・中) | 今日、学校をとりまく環境には様々な危機が存在します。特に学校における不祥事は、学校教育を根底から支える「信頼」を揺るがす大きな課題です。自身に対応に関わったものや近年の事例から、事件・事故の発生前、発生直後、発生後の学校管理や取るべき対応について、具体的に分析・検証し、組織対応の内容や課題について考えていきます。 |
| リーダーシップとカリキュラムマネジメントの推進 | 今井 弘樹 (いまい ひろき) | 高度教職実践専攻 (学校経営) | 教員(小・中) | 小中学校でのカリキュラムマネジメントの考え方を整理し、推進するにあたって、学校リーダーシップの側面から考えます。また、地域に開かれた教育課程の実現を目指すカリキュラムマネジメントの取組みについて、演習をしながら、その充実について考えていきます。 |
| 学校のビジョン形成と評価の手法 | 大野 裕己 (おおの やすき) | 高度教職実践専攻 (学校経営学/ 教育制度学) | 教員(主に小・中・高校) | 今日の学校経営改革下で各学校に求められるビジョン形成やその評価の考え方・手法について、学校組織開発や内外連携構築と関連して整理・検討します(講義・演習・コンサルテーション)。 ※学校関係者評価や学校第三者評価実施への関わりについても、本務に支障のない範囲(年度数件程度)で対応できます。 |
| 算数・数学科の授業づくり | 大橋 宏星 (おおはし こうせい) | 高度教職実践専攻 (算数・数学教育) | 教員(小・中) | 主体的・対話的で深い学びを目指した授業展開について、実際の授業や指導案を通して検討します。 |
| 幼児の健康と生活 | 奥田 援史 (おくた えんじ) | 幼児教育講座 (健康教育) | 教員(幼) 保護者 | 幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。 |
| 暮らしと消費と環境 | 岸田 蘭子 (きしだ らんこ) | 高度教職実践専攻 (家庭科教育) | 教員(小・中・高) | 新学習指導要領でも重視されている「消費と環境」についての教材開発や授業実践についての解説を行います。受講者主体のワークショップ型の講座で、小・中・高対象ですが、学校種別でも合同型でも対応できます。 |
| 社会科の学力とパフォーマンス評価 | 岸本 実 (きしもとみのる) | 社会科教育講座 (社会科教育) | 教員(小・中・高) | 社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。授業の中の15～20分の中心活動、1時間そして1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。 |
| 新しい時代が求める資質・能力を伸ばす教育課程・指導・評価 | 岸本 実 (きしもとみのる) | 高度教職実践専攻 (教育方法学) | 教員(小・中・高) | 新しい学習指導要領により整理された、新しい時代が求める資質・能力を伸ばすためには、学校を基礎に教育課程を編成し、カリキュラムマネジメントを適切に実施していくことが求められています。また単元や授業において確実にその資質・能力を身につけさせる学習指導と評価の在り方が問われています。本講座では、学校、学年、教科など学習者の状況に合わせて、これらの問題を考察します。 |
| 国語科の授業づくり | 北村 拓也 (きたむら たくや) | 高度教職実践専攻 (国語科教育) | 教員(小・中) | 主体的・対話的で深い学びの実現を目指した国語科の授業づくりについて、実際の授業や指導案を通して検討します。 |
| 体育授業における指導と評価の一体化 | 辻 延浩 (つじ のぶひろ) | 保健体育講座 (体育科教育) | 教員(小・中・高) | 子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきましょう。 |

| 題名 | 講師 | 講座 | 対象 | 内容 |
|---|----------------------|-----------------------------|---------------------------------------|---|
| 自然景観と自然災害／ 防災教育と学校安全 | 藤岡 達也 (ふじおか たつや) | 理科教育講座 (科学教育／ 防災教育) | 児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般 | 本講義では、次の3つのテーマを取り扱っています。テーマの選択等は可能です。 ① 自然と人間との関わり(持続可能な社会とこれからの環境教育) ② 自然景観の形成・活用と自然災害(国立公園・ジオパークと近年発生した自然災害など自然の二面性について) ③ 防災教育と学校安全・学校危機管理(子供を事件・事故災害から守るために) |
| 学校における 人材育成 | 前田 利幸 (まえだ としゆき) | 高度教職実践専攻 (教師教育/ 学校経営) | 若手～中堅教員(小・中) 管理職(小・中) | 今日、学校現場では教職員の多忙化が深刻な課題であり、働き方改革の推進が求められています。さらに滋賀県の教職員の年齢構成からも学校現場での人材育成は喫緊の課題となっています。このような状況下、多忙な学校現場においていかに効率よく計画的に人材育成を進めるのか、また教育課題解決に向けていかに学校組織力を向上させていくのか、校長のリーダーシップとマネジメント力が求められます。 教員の各ステージに合わせて、明るく元気に学び続ける教職員を応援できるよう自身の経験を活かして研修を行います。 |
| 障害のある 子どもの支援 | 山川 直孝 (やまかわ なおたか) | 高度教職実践専攻 (特別支援教育) | 教員(幼・小・中・高・特) | 勉強が苦手だったり、集団生活になじめなかったりする子どもが少なくありません。障害の状態やそれに伴う学びにくさは多様かつ個人差が大きく、個別最適化した学びが求められます。心理アセスメントの紹介や気になる行動をする理由、子どもの長所を生かした対応などについて、自立と社会参加を見据えながら考えていきます。 |
| 科学教育における 話し合い活動 -「滝をのぼる水滴」を 事例として- | 山岡 武邦 (やまおか たけくに) | 高度教職実践専攻 (データサイエンス) | 児童・生徒(小・中・高) 教員・市民一般 | 本講義では、科学教育における話し合い活動に焦点化し、深い学びの実現を目指す授業づくりについて検討します。具体的には、錯視に関する実験を行い、話し合い活動を取り入れながら自然現象を理解し、そこで得たデータを解釈していくプロセスを体験します。 |

4 教職探究講座

教職探究講座は、滋賀県内の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解することを通じて、教職への意識高揚を図ることを目的として実施されるものである。令和5年度も、講座の拡大実施は計画せずに、例年実施されている東大津高校及び水口東高校の生徒を対象とした「教職探究講座」を2日間にわたって実施した。東大津高校25名、水口東高校17名の参加者と本学部在学生在で各高校OB・OG9名の協力のもと充実した講座になった。具体的なプログラムは以下のとおりである。

【令和5年度教育実践総合センター連携講座「教職探究講座」（高大連携）】

- 1 目的 教職を志望する高校生を対象として教職探究講座を開設し、対象者の教職に対する理解を深めると共に進路（教職）に対する視野を広げ、モチベーションを高めることを目的とする。
- 2 対象 滋賀県立東大津高等学校及び、滋賀県立水口東高等学校の1・2年生
- 3 主催 滋賀大学教育学部・滋賀県立東大津高等学校・滋賀県立水口東高等学校
- 4 期日 令和5年12月20日（水）・21日（木）
- 5 会場 滋賀大学教育学部 第33講義室

（プログラム）

| (1) 1日目：12月20日（水） | (2) 2日目：12月21日（木） |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">◆ 開講式（14:00～14:05） 挨拶 学部長 徳田 陽明 教授◆ 第1講（14:10～14:55） 講義名：教師力を培う 講師：大野 裕己 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教師の仕事と役割<ul style="list-style-type: none">・教師の仕事の特徴と背景・教師の専門職性➢ 教師力を培い、高める<ul style="list-style-type: none">・教師力とその核・学び続ける教師と教師力◆ 第2講（15:00～15:45） 講義名：インクルーシブな教育について 講師：窪田 知子 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 多様な教育的ニーズへの気づき➢ special と universal の視点から◆ 第3講（15:50～16:35） 講義名：授業とICT 講師：岩井 憲一 准教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教育におけるICT活用とは<ul style="list-style-type: none">・ICT活用の重要性・ICT活用の効果➢ 教育の情報化にむけて<ul style="list-style-type: none">・ICT活用の取り組み | <ul style="list-style-type: none">◆ 第4講（14:00～14:45） 講義名：教職への志が拓く教師の道 講師：今井 弘樹 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教職とは<ul style="list-style-type: none">・人を教えること、人に教えることについて考える・教職を志す上で大切なこと◆ 第5講（14:50～15:35） 講義名：教育学部で学ぶとは 講師：神 直人 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 教育学部とは<ul style="list-style-type: none">・各学校種の免許取得方法・他学部との違い（教育学部の独自）・教育学部の可能性（就職）➢ 先輩に学ぶ：東大津高校、水口東高校の卒業生OB・OGとの懇談交流会<ul style="list-style-type: none">・「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」（先輩からの話）・「先輩への質問と応答」（高校生からの質問）◆ 閉講式（15:35～15:45） 司会：センター長 神 直人 教授<ul style="list-style-type: none">➢ 修了証書授与（生徒代表）➢ 挨拶 学部長 徳田 陽明 教授◆ OB・OG 懇談交流会（15:55～16:25） |

【参加した生徒の感想より】

・第1講では、法令上での教員の仕事、教員の仕事の特徴、教師と教員の違いなど、よく考えてみれば知らなかったなというようなことを多く教えてもらえて、基礎的な知識を固めることができた。第2講では、特別支援学校、教育の在り方の多様性はとても興味深かった。「スペシャル&ユニバーサル」という言葉は、ただ特別にしたり平等にしたり、子どもたちを分けすることが、バリアフリーの観点から見て本当にいいことなのか考えさせられた。同じように第4講もとても興味深く、時事を交えていたり、生徒に近づいて説明してくださって、具体的に想像できた。全5講の中でも、やはり最後のOB・OGとの懇談交流会が最も印象に残った。教員免許や文転理転からサークル、ゼミのことまで知ることができて、満足感が高かった。特に、グループを組んで近くで質問したとき、教育実習の経験談を聞くことができたのはとても参考になった。OGの人によると2週間ほど毎日学校に通い、現職の先生のように実際の仕事を体験し、あまりの多忙で途中で体調を崩してしまったそうだ。それを聞いて、教育学部をさらに身近に感じることができた。(1年生)

・第3講では授業の中でどこにICTを組み込むとよりよい授業になるのかを学んだ。ICTには学習に対する理解を促す効果があり、ICTを効果的に活用した授業を展開することが重要となっている。ICTを使いつつも、ノートにまとめるなど、必ず学んだことの「振り返り」をして知識を定着させることが大事だということがわかった。(1年生)

・私は特に今まで触れる機会が少なかった、インクルーシブな教育についての講義がとても印象に残っています。まず私はインクルーシブという言葉の意味を知らない状態から講義を聞いたのですが、とてもわかりやすく説明してくださったので、とても深く理解することができました。特別なニーズを持っている子どもたちは想像していたよりもはるかに範囲が広くて、驚きました。思い出してみると、私も多くのニーズを持った人とこれまで関わってきたなと感じました。インクルーシブ教育はspecial & universalの視点が大切で、疑似体験を通して、こんなに大変なんだと実感することができました。今回の講義を通して、多様な教育的ニーズに応えるために、多様性を認め合い尊重し合う集団づくりの大切さを学べたので、これからの生活あるいは教員になれた時に活かして行きたいなと思いました。(1年生)



開講式 徳田陽明学部長の挨拶



先輩に学ぶ (OB・OG との交流会)

(神 直人)

5 教育臨床研究

SKC キッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）2023 年度連携活動報告

2017年に教育学部とSKCキッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）の連携協力協定締結から6年目にはいり、毎年、継続して次のような連携協力が行われています。また、大津サテライトを活用した一般市民向けの「講演とトーク」などの発達障害についての啓蒙的な活動や、毎月1回定期的に行っている相談活動などキッズカレッジの活動に対してご支援いただいていることをご報告し、御礼申し上げます。

1. 教職大学院高度教職実践専攻ダイバーシティ教育力開発コースの「フィールドワーク実習」

昨年度に引き続き、今年度は5名の大学院生をキッズカレッジ学習室の指導に受け入れました。キッズカレッジ学習室には、学習障害やASD（自閉症スペクトラム）を並存する小学生から高校生が、定期的にくて学習や思い思いの活動に取り組んでいます。キッズカレッジの特徴の一つに、中学卒業まで継続して子どもの変化を見ていくことができるということがあります。低学年の子どもや障害の重い子供たちは十分に落ちついて学習に取り組めないこともありますが、長年継続してきている間に、大きく変化していきます。その一端を、実習で体感してもらうことは教育力を高めるうえで重要な契機になると考えます。

2. 学部学生の卒業論文作成に関する相談

卒論ゼミで、学習障害、とりわけ書きに困難のあるこどもの指導について卒論でどのように取り上げることができるか、という学生の個別の相談があり、キッズカレッジスタッフが対応しました。

3. 教育学部の講義、学生指導へのキッズカレッジスタッフの協力

今年度も引き続き、キッズカレッジ事務局長の横江真理子と、理事の一人である深川美也子が授業の一部を担当しました。

4. 大津サテライトにおけるキッズカレッジのイベント

(1) 「講演とトーク」の実施

コロナの流行の中で、4年間中断していた市民向け講座を大津サテライト会議室を使用して再開しました。中学校まで、感覚過敏や起立性調節障害など様々な要因で学校に行きにくかったNくんの高校に入ってからの変化の様子について、お母さんの目から見ても「信じられないような大きな変化」について語ってくれました。おとなしかったN君が、軽音に入り文化祭の舞台上で活躍し、その縁で将来やりたい仕事を見つけて進路も決まった。いまは、何の心配もない、というお話でした。

(2) 相談会（ミニ講演と相談）

サテライトのセミナー室で毎月第3水曜日の午前に、不登校や発達障害に関する保護者むけの相談会を開いています。予約もいらない、自由な相談会で、毎回1人から3人程度の参加で相談活動を行っています。毎月、継続して行えることが大事だと感じています。2月には、発達障害のある子どもの学習指導について、中学校の先生の参加もありました。

5. 地域の学校との連携および支援

キッズカレッジ学習室に通う子どもたちの学校との連携を毎年7月末に実施していますが、今年度も、7月24日に、午前小学校の部、午後中学校の部の2回に分けて実施しました。

6. 来年度は、県下の支援学級や通級指導教室の先生を対象にした研修講座を企画しています。

（文責 SKC キッズカレッジ副理事長 窪島務）

6 情報教育研究

1. 事業名および担当者

本学部附属教育実践総合センターでは、毎年12月に高大連携事業の一環として、滋賀県立高校の1,2年生を対象とした教職探究講座を実施しています。筆者もこの事業に講師として参加しました。長かったコロナ禍を経て、昨年度から例年どおりの対面二日での講座開講となり、本年度は12月20日(水)~21日(木)の二日にわたって実施いたしました。本稿では、筆者の講演内容の概要についてご報告いたします。事業名は「授業とICT」で、担当者は岩井憲一です。



2. 事業の目的

当センターが主催する高大連携講座「教職探究講座」は、地域の高等学校と本学部が連携し、進路としての「教師」について、「教師とはどのような仕事であるのか」、「本学部ではどのようなことが学べるのか」「わかりやすい授業についてどのように取り組んでいるのか」等を理解するための場であり、その実現に向けての取り組んでいくことが目的であるといえます。以下では、この目的に沿った事業における今年度の概要につきましてこの場をお借りしてご報告したいと思います。

3. 事業の概要

3.1 今回の発表の特徴について

本事業では情報教育に関する研究について取り組んできました。筆者は講演の中で、教師としてのスキルアップ、また教育学部として行われている具体的な取り組みを理解してもらうべく、授業におけるICTの役割やICTを利用した教育手法についてお話ししました。

講演の大まかな流れとしては前年度の事業[1]でもお話しした(1)文部科学省のWebサイトの重要性について、(2)ICTの教育への導入について、(3)ICT活用の伴う教材や学習形態について、(4)ICTを扱う上での注意、(5)プログラミング教育の構成となっております。今回は論旨の見直しに加え、最新のAIを利用した取り組み等についても取り上げています。本稿ではその生成AIを利用した教材作成についてお話しします。

3.2 生成AIについて

生成AI(Generative AI)は、機械学習モデルとアルゴリズムを使用して、テキスト、画像、音楽、映像等の新しいコンテンツを自動生成する技術です。生成AIの一例としてはOpen AI社のChatGPTをはじめとするテキストベースのAIであるGPT(Generative Pre-trained Transformer)があります。このAIは、与えられたプロンプト(指示)に基づいて詳細なテキストを生成する能力を持ちます。他にも、画像を生成するDALL-Eや音楽を作成するJukebox等、特定のメディアタイプに特化したモデルも存在します。

3.3 生成AIを利用した教材作り

望ましいモデルを指示するプロンプトについて考える分野をプロンプト・エンジニアリングと呼びま

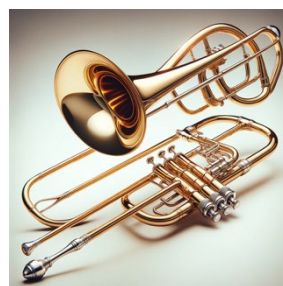
す。今回は英語科における英文の穴埋め問題の作成を例にとって考えてみます。その際に来校した高校のことを考慮して次のようなプロンプトを考えました。

(例)英語の教材を作成してほしい。英文の穴埋め問題で10問。文の頭文字を並べたら“SHIGAKENHS”となるように。

上記の例のプロンプトに従って生成されたのが以下の問題群です。“SHIGAKENHS”とは、もちろん「滋賀県の高校」からきています。その後「解答も示して」と指示すると解答も生成してくれました。(1. Schools, 2. Health, 3. Ice, 4. Grocery, 5. Apples, 6. Kitchen, 7. Education, 8. New year's Day, 9. Halloween, 10. Scissors)

1. **S** _____ are places where people go to learn. (学校は人々が学びに行く場所です。)
2. **H** _____ is a meal eaten in the morning. (朝食は朝に食べる食事です。)
3. **I** _____ cream is a popular frozen dessert. (アイスクリームは人気のある冷凍デザートです。)
4. **G** _____ is a place where you can buy food and other items.
(食料品店は食べ物や他のアイテムを買える場所です。)
5. **A** _____ are often red, green, or yellow. (リンゴはよく赤、緑、または黄色です。)
6. **K** _____ is the act of preparing and cooking food. (料理は食べ物を準備し調理する行為です。)
7. **E** _____ is a subject that deals with numbers and calculations.
(数学は数字や計算を扱う科目です。)
8. **N** _____ is a day of rest for many people. (日曜日は多くの人にとって休息の日です。)
9. **H** _____ is the season when leaves fall from the trees. (秋は木々から葉が落ちる季節です。)
10. **S** _____ are a tool for cutting. (はさみは切るための道具です。)

文の生成としては一応上手くいきましたが、それ以外ではまだまだ難しい面もありました。次の取り組み例として画像生成を行いました。「トロンボーンの画像を表示してください。」と指示してできあがったのが次の図です。このようになった原因としては生成 AI の学習がニューラルネットワークの原理にもとづいており、様々な特徴を断片的につなぎあわせているところにあります。そのため、細部にわたって正確に仕上げるのはまだまだ苦手なようです。



4. 今後に向けて

本稿では、本年度の教職探究講座における筆者の講演において、特に生成 AI を利用した教材づくりの箇所についてその概要を述べました。今回の講演が、受講生のみなさんにとって少しでも本学部で教員を志すきっかけになりましたら幸いです。

参考文献

- [1] 岩井憲一：“5 情報教育研究”，教育総合実践センター年報，No.6，pp.83-84，2023，
https://www.edu.shiga-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/R4jisen_rpt2.pdf (2024年2月6日アクセス)。

(岩井 憲一)

7 教育実習支援

教育参加カリキュラムは、平成 17 年度に始まり、今年で 19 年目を迎える。それは、1 年次の「教育参加プランニング」「観察実習」、2 年次の「実習基礎」「交流実習」、3 年次の「基本実習（教育実習）」「教育実習中間指導」「教育実習終了後の発展実習（3 年次の秋学期と 4 年次）」「自主参加体験」という滋賀大学のすべての教育実習科目と教育体験科目を、原則として 4 年間で積み上げ式に体験するプログラムである。特に、地域実習（平成 17 年度から始まった栗東実習、平成 25 年度から始まった守山実習、平成 30 年度から始まった大津実習、令和 2 年度から始まった草津実習）は、「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1 回生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して将来の目標を設定し、これからの 4 年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識と見通しをもって、充実した学生生活を送るための一助となるものである。

2. 観察実習

観察実習は、交流・基本実習の事前指導として、附属学校園での授業参観等を行う 1 回生の活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校園の日常に触れ、教員としての心構えや学校園の現状を体感する機会になっている。

3. 交流実習

交流実習は、主に学校行事等における準備や運営に、指導者の立場から体験的に関わる実習である。2 回生は、交流実習の中で、小学校では校外学習や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール（文化祭）等の指導補佐を行っている。先生方や児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等を、どのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。また、令和 5 年度からは、3 回生の基本実習での授業を参観することも可能とし、基本実習への心の準備を行っている。

4. 基本実習

3 回生になると、交流実習を行った学校で 4 週間（前期 2 週間、後期 2 週間）の基本実習を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、授業実施、一日担任等である。基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくことや授業を進めていくことが求められる。また、多様な児童生徒や、様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことで、より具体的な対応を学ぶことができる。さらには、現場教員の児童生徒との関りの姿を見て、教員への憧れの気持ちを向上させることもできる。



地域実習校での基本実習

5. サポーター活動（自主参加体験・発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、基本実習の配属校で 3 年次の 3 月まで原則として週 1 回のサポーター活動を行う（栗東実習 3 回生は全員必修、他も積極的に参加）。基本実習前の

サポーター活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置いている。それを活かして、6月から10月までの実習期間中での、児童生徒との信頼関係の形成、担当教員との授業の打ち合わせ、授業構想・指導案の確認等を行っている。そのため、基本実習に欠かすことのできない活動となっている。また、基本実習終了後は、基本実習で学んだ成果を活かして児童生徒や先生方とより深く関わり、学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。

なお、基本実習前と実習中間期のサポーター活動は、自主参加体験として、実習後のサポーター活動は、発展実習として単位申請することができる。また、学生が希望すれば、基本実習の配属校で4年次になってもサポーター活動を続けられる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが、代表的な支援は、以下の3点である。

一つ目は、実習中の支援である。地域実習では、栗東・守山・大津・草津実習担当の学部教員が、学生の授業を参観したり、学生から実習の様子を聞いたりして、技術面や精神面への支援を行っている。また、基本実習を行う3回生には、第1ステージ（6月）と第2および3ステージ（9・10月）の間に、教育実習中間指導を実施している。そこでは、それぞれの実習校での経験を語り、共有することで、第1ステージの課題を見つけ、次ステージに向けての目標を明確にすることをめざしている。

二つ目は、実習後の支援である。3回生の基本実習と1回生の教育参加プランニングが終了する頃に、専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3回生が基本実習の成果を発表し、それぞれの経験を振り返る機会を提供している。また、1回生と2回生は、上回生の発表や先輩との意見交流を通して、次に行う実習の情報を得ることもできる。

三つ目は、サポーター活動への支援である。スクールサポーターでは、運動会や音楽会といった学校行事の準備や手伝いといった、日頃は経験をしない、裏方的な仕事を行うことになる。そのことにより、児童生徒の前で行う普段の授業だけでなく、陰で支える仕事の存在を知り、教員同士の「思いやり・感謝・協力」の心を学び、チーム学校の大切さを体感するのである。地域実習の学生だけでなく、附属実習の学生にもその機会を知らせ、紹介する支援も行っている。



スクールサポーター活動

7. 今後に向けて

今後、重点的に取り組むべき課題は、次の3点である。

- ① 教員という仕事の素晴らしさや、やりがいを実感させ、その職業への憧れや意欲を高めさせることにある。そのために、身近な先輩である卒業生からの声を聴く機会を増やしていくことも必要である。
- ② 教員になるまでの4年間の大学生活の間に、どのように学習をして、どのような力をつけなければならないのか、また、そのために何に取り組めばよいのかといった具体的な内容を考え、実践させることにある。1回生で4年間の学習計画（プランニング）を立てさせる。その学習計画を、2回生は交流実習オリエンテーション、3回生は事後指導の時間において、毎年修正をさせて、実践を行うための支援を行うことである。
- ③ 学生の現場での経験を深めるために、地域実習校と大学とが連携し、スクールサポーター活動が継続的に、また、発展実習が更に実践しやすいように環境を整えることにある。そのために、自宅や下宿の近く、大学への通学経路近辺等、通いやすい実習校に配置を行うことである。

（水野 裕美）

8 教師力向上支援

教育実習支援担当の主たる役割は、前項「7 教育実習支援」で示した教育参加カリキュラムを学生たちが円滑に進めていけるよう支援すること。もう一つは、教師力向上を目指す学生たちの自主的な行動を支援し、その活動を支えることだと考えている。そのため、以下のような取り組みを行っている。

1. 教師力養成サークル「教師のたまご」の設立

このサークルは、令和5年度に新しく立ち上げたものである。サークル設立の経緯としては、それまで基本実習を終えた3回生を対象に、教育実習支援担当教員がロコミ的に学生を集め、授業づくりや教員採用試験対策、卒業後教壇に立つ学生の不安解消等を目的に演習や講話を実施していたことに端を発している。

また、近年、教員の過重労働が社会問題化し、その影響もあって教員養成系学部在籍の学生でも卒業後は教員以外の道を選択する学生が増加傾向にある。その結果、教員採用試験の競争率が低下し、教員の質の低下と教員不足が問題化している。

このような背景を踏まえ、少なくとも教員志望を抱いて入学してきた学生に対し、その夢の実現に向け、主体的かつ具体的な演習活動等が行える機会の提供と仲間づくりのためのサークルとして、附属教育実践総合センターを窓口にしてその活動を始めるに至った。

2. サークルの主な活動内容

教師力養成サークル 教師のたまご
参加者募集について
2023.10.30 滋賀大学教育学部 附属教育実践総合センター

附属教育実践総合センターでは、地域実習指導を担当しているセンター教員の自主企画として、「教師力養成サークル『教師のたまご』」を立ち上げます。
活動は下の3つのグループでおこない、それぞれ別々に参加者を募ります。参加はあくまで自由、複数のグループを重複して参加することも可能です。途中退会も自由です。活動は、学生が主体的に教師力の向上を目指して行うものであり、センター教員はその支援者として指導や助言を行う形式でおこないます。

グループ A: 授業力 UP 活動は月1・2回程度
対象:1回生~4回生(通年)
教師としての専門性が求められる場合は、やはり授業。このグループでは、「やってみよう」を合言葉に指導案の作成や模擬授業を通して、授業力UPに繋がります。
また、授業におけるICT機器の有効活用についても共に学び、操作方法を含めた実践的指導力を向上させていきます。

グループ B: 受かる力 UP 活動は必要回数
対象:3回生(11月~翌年8月)
(翌年教授採用予定の2回生も参加可)

グループ C: 即戦力 UP 活動は8回程度
対象:4回生(11月~翌年3月)

正規採用、講師採用の区別なく、卒業後4月から即学校現場で働く4回生に対し、**学級経営や学習評価、教員としての心得等**について具体的な演習を織り交ぜながら教員としての即戦力UPにつながる講話や不安を払拭するための相談などを行っています。

教師への道を拓くためには、是非とも採用試験に合格したいもの。
このグループでは、志を共にする仲間が集まり、情報共有はもとより**小論文や面接の練習**を通して「受かる力」の向上に邁進していきます。

★参加希望者は、登録専用Formに必要な事項を記入の上、申し込んでください★

図1：募集案内

本サークルでは、めざす教師力養成の内容を「授業力」・「受かる力」・「即戦力」の3つに分け、募集段階で自らが向上させたい力を選択し、グループ別に分かれて活動している。図1は募集案内の一部である。

(1)「授業力UP」グループの活動

毎月1、2回程度、全学年の希望学生を対象に、教師の専門性として欠かせない授業力の向上をめざした活動を行っている。「やってみよう」を合言葉にまずは指導案を作成し、それをもとに模擬授業を実施し、実践的指導力を高めている。

また、授業におけるICT機器の有効活用について考えを出し合い、授業における具体的な活用場面を想定した操作技能等の研修を行っている。

(2)「受かる力UP」グループの活動

正規教師への道を拓く。そのためには、教員採用試験の合格が必須となる。このグループでは、志を共にする仲間が集まり、情報共有はもとより小論文や面接の練習を通して「受かる力」を向上させている。

特に、全国的に採用試験の日が早まり、3年次受験を

始める自治体が急増する中、できるだけ早くスタートを切ることで学生の自信とゆとりを捻出したいと考え、令和5年度は11月からこの活動を始めた。まずは、教員志望理由や教職にかかるこれまでの学び、自己PRなどを記入することから始め、その後週1回のペースでいじめや不登校等の現代的課題とその対応、ICT活用の光と影、教員の資質向上、授業改善の視点等をテーマに討論時間を設けて学びを深めている。

【講話内容】

- ① 3月の動き
- ② 初任者の心構え
- ③ 4月の動きと学級づくり
- ⑤ 教師の仕事
- ⑥ 年間計画と見通し
- ⑦ 所見の書き方
- ⑧ 保護者の方への対応
- ⑨ 健康観察と保健指導 など

(3) 「即戦力UP」グループの活動

正規採用、講師採用の区別なく、卒業後学校現場で働く4回生に対し、教員としての心得や学級経営等について演習を織り交ぜながら、教員としての即戦力向上につながる講話や不安を払拭するための相談などを複数回に分けて実施した。主な講話内容は右の通りである。

3. 各グループの活動における成果と課題**(1) 「授業力UP」グループ**

活動開始当初は、学年の枠を設けずスタートした。だが、基本実習を終えた3・4回生と指導案作成の経験が未熟な1・2回生と一緒に活動するには、時間的な制約もあり、活動のしづらさが目立った。そのため、上学年と下学年に分け、長期休暇中に活動日を設定して実施したが、参加者は少なかった。次年度以降は、活動グループと活動日の設定に工夫を要する。

(2) 「受かる力UP」グループ

11月中旬から活動を始めたことで、教育課題に対する個々の学生の考えや思いを時間的なゆとりをもって共有することができている。当初40名程度の参加者を想定していたが、2月1日現在60名を超えており、試験対策への学生のニーズの高さが伺える。また、参加者の中には3年次受験に臨む4名の2回生が含まれている。採用側の地方自治体も、力のある人物の早期獲得に向けて試験期日や内容を変更するところが多く、大学としてもその対応に改善を加える必要がある。

(3) 「即戦力UP」グループ

11月から活動を始め、90名の学生が参加している。内容的には初任者研修等で取り上げられるものも含まれている。しかし、3月末予定の赴任地内示への対応や、4月当初の動きに不安を感じている学生にとっては、卒業前の段階で自己紹介の仕方や年間の見通しの持ち方などを学べる機会を有意義に感じている者が多い。この学びの中で、少しでも心の準備を行い、安心感を持ち、夢に見た教員の仕事に臨んでもらいたい。今後は、先輩達からの話や、最新の現場の状況を伝えることが必要である。

4. まとめ

3・4回生の学生たちは、大学生活の大半をコロナ禍で過ごしてきた。幸い、何とか教育実習は無事に終えることができたが、多くの授業をリモートで受け、学生サポーターとして教育現場へ出かけることさえままならぬ時期があった。そのような中、学生同士の繋がりが希薄化している現状と教員志望者の減少問題等に直面し、教員養成系の学部教員として一人でも多くの学生を教員への道に誘いたいと考え、サークル活動を支えてきた。この活動を本格的に始めたのは今年度であり、まだまだ工夫と改善の余地が多々見られるが、時間の許す限り学生たちへの支援を続けていきたい。(齊城 勝美)

9 キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業 担当者：学部教員 西坊 晴美

2. 事業の目的

大学での学びを支援し、就職相談を中心とした進路支援（キャリア支援）を行う。原則対面指導により、教員採用試験、その他の就職対策について指導助言をする。

3. 事業の概要

1) 取り組み

① 新入生対象 キャリア支援の案内とキャリア支援アンケートの実施

1年生全員の個人あてに、オンライン success のシステムにより「キャリア支援の案内」と「キャリア支援アンケート」を送付し、各個人から調査回収を行った。新入生の本学入学理由や大学生生活の満足度、進路（教職）希望の実態把握をし、学内での情報共有をした。

また、学生には、進路相談や就職相談などについて、キャリア支援室を気軽に活用してほしい旨を案内した。

② 教職採用試験対策の指導

a 就職委員会主催の事業に協力参加する。

- ・就職・教職ガイダンス（3回生対象）（説明講義）
- ・教員養成研修（3回生対象）（説明講義）・分科会（高校の部の進行）
- ・直前模擬集団討論（4回生対象）集団討論・面接（説明講義）・班別模擬面接実施
- ・春季スタートアップ集団面接・討論（2・3回生対象）（説明講義）
- ・集団面接討論練習会の実施（2回生～4回生対象）

b 個別指導

- ・教職採用試験用小論文指導（小論文予想課題問題を提示、ワード文書で受けとり、添削してメール返送する。指導助言はメールおよび対面で行う）
- ・面接カード等の記入指導（手書きおよびメールによる文章提出を受け、添削を行う）
- ・個人面接練習指導

③ 進路相談・就職相談

- a 教職採用試験の受験についての迷いや他の就職採用試験・大学院入試等についての相談
公務員試験対策、企業採用試験の受験対策の助言、エントリーシート記入助言を対面指導により行う。
- b 本学経済学部就職係へ協力依頼し、連携を図る。（就職相談・企業説明会の実施など）
- c 教員採用試験や他の就職試験関係の情報収集と掲示・求人票整理（キャリア支援室設置）

④ 入学時から就職決定までの「教員志望変遷の状況」レポートを作成（学内情報共有）＊後掲

2) 実績

- a 進路・就職相談および面接練習・対策指導（R5 4月～R6 2月末）118件
- b 小論文・エントリーシートの文章添削指導（R5 4月～R6 2月末）72件

3) その他 就職対策問題集および小論文対策図書の選定と貸出管理を行う（キャリア支援室設置）

4) 新入生対象アンケート調査結果

問1 あなたが本学へ入学した理由は何ですか。(1つ選択)

- 1 教職を目指しているから 2 入試難易度や受験科目などが自分にあっていたから
3 国立大学法人だから 4 親や高校の教師などが勧めたから 5 理由はない 6 他

| 回答 \ 年度 | 平30入学 | 令和元入学 | 令和2年入学 | 令和3年入学 | 令和4年入学 | 令和5年入学 |
|---------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 67.2% | 55.2% | 68.6% | 65.3% | 74.6% | 63.2% |
| 2 | 12.4% | 19.9% | 15.9% | 15.5% | 12.1% | 14.9% |
| 3 | 9.5% | 16.6% | 8.8% | 11.7% | 10.3% | 18.2% |
| 4 | 6.2% | 5.4% | 4.4% | 1.3% | 1.7% | 2.9% |
| 5 | 1.2% | 1.2% | 0.9% | 2.1% | 1.3% | 0.8% |
| 6 | 3.3% | 1.7% | 1.3% | 4.2% | 0 | 0 |

問2 あなたは本学での大学生活に満足していますか。(1つ選択)

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している 3 やや不満である 4 大いに不満である

| 回答 \ 年度 | 平30入学 | 令和元入学 | 令和2年入学 | 令和3年入学 | 令和4年入学 | 令和5年入学 |
|---------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 33.6% | 29.9% | 4.4% | 11.3% | 28.9% | 27.3% |
| 2 | 61.0% | 63.9% | 49.1% | 64.4% | 64.2% | 64.5% |
| 3 | 5.0% | 5.4% | 40.7% | 23.9% | 6.5% | 7.4% |
| 4 | 0.4% | 0.8% | 5.8% | 0.4% | 0.4% | 0.8% |

* コロナ禍の急激な影響を受けた令和2年から徐々に満足度が回復し、ほぼコロナ禍前にもどった。

①②の理由については、複数選択可

- ① 満足+ほぼ満足の理由：1 講義に関する事(94人) 2 進路に関する事(122人)
3 部活や人間関係(130人) 4 施設・設備(28人) 5 バイトなど(45人)
② やや不満+不満の理由：1 講義に関する事(14人) 2 進路に関する事(8人)
3 部活や人間関係(4人) 4 施設・設備(4人) 5 バイトなど(5人)

問3 現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか。(1つ選択)

- 1 教員になりたい 2 できれば教員になりたい(迷っている・悩んでいる)
3 教員以外を考えている 4 未定

| 回答 \ 年度 | 平30入学 | 令和元入学 | 令和2年入学 | 令和3年入学 | 令和4年入学 | 令和5年入学 |
|---------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 1 | 56.0% | 54.8% | 62.4% | 56.9% | 63.4% | 62.8% |
| 2 | 31.1% | 32.8% | 24.8% | 31.4% | 28.9% | 26.0% |
| 3 | 6.6% | 4.1% | 4.9% | 7.5% | 5.2% | 9.5% |
| 4 | 6.2% | 8.3% | 7.9% | 4.2% | 2.6% | 1.7% |

4. 今後に向けて

視野が広く意欲ある教員を育成すること、また、学生の希望就職に向けて指導助言を行う。

(西坊 晴美)

10 教員志望について「志望の変遷」を追う

滋賀大学は、教育学部と経済学部、データサイエンス学部の3学部からなる総合大学である。キャンパスが、大津と彦根にあり、教育学部のみ大津キャンパスである。つまり、滋賀大学教育学部生は、単一の学部のキャンパスで学んでいる。

教育学部の学びは、変化の激しい時代に対応できる多様で個性豊かな教育者の育成を目指し構築されている。本学部での学びを経て、一人でも多くの本学出身者が、意欲をもって教育現場で活躍してくれることを願い、日々教育活動が進められている。本学部入学の志望動機は、「教員として就職すること」を基本にしているが、就職結果をみると「教員以外」の仕事に就く学生も一定数いる。教員養成を理念としている教育学部の学生の教員志望の目標がどの時点でどのような理由によって変遷し、どう就職につながったのかをまとめてみた。

学生には、在学中に何回かアンケート調査が行われている。今回、資料として使用するものは、

- ① 大学入学直後、前期中にキャリア支援アンケートとして実施しているもの。(キャリア支援室で実施)
- ② 1回生の11月に学生が所属するコースと専攻が決定したときに実施しているもの。(教育実践総合センターと教務係で実施)
- ③ 3回生の教育実習終了後、実施しているもの。(教育実践総合センターで実施)

この3種類の個人別調査データを用いて教員志望の変遷を追跡した。

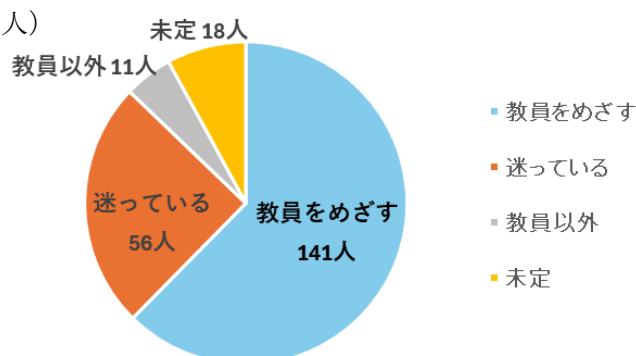
アンケート調査の項目は、

「1 教員になりたい。2 教員になるか迷っている。3 教員以外をめざす。4 未定またはその他」である。以下の資料は、直近の過去3年、2018年～2020年4月入学生⇔2021年～2023年度卒業生のデータをまとめたものである。

1 2020年度入学生の進路希望調査の推移

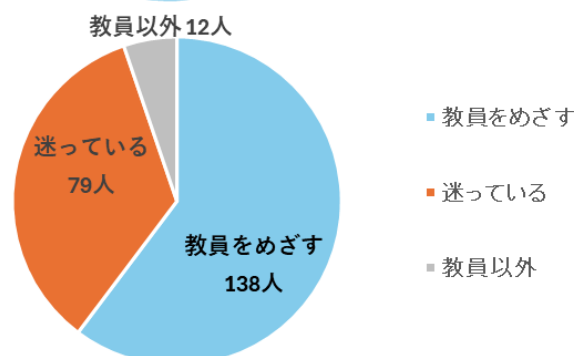
- ① 1回生入学時志望調査(4月～7月) (回答数 226人)

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 141人 | 62.4% |
| 2. 迷っている | 56人 | 24.8% |
| 3. 教員以外 | 11人 | 4.9% |
| 4. 未定 | 18人 | 8.0% |



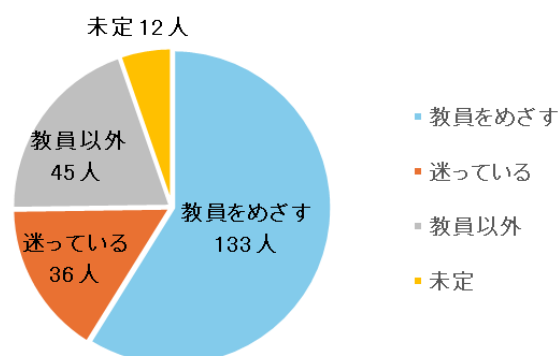
- ② 1回生コース決定時志望調査(11月) (回答数 229人)

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 138人 | 60.3% |
| 2. 迷っている | 79人 | 34.5% |
| 3. 教員以外 | 12人 | 5.2% |
| 4. 未定 | 0人 | 0.0% |



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 226人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 133人 | 58.8% |
| 2. 迷っている | 36人 | 15.9% |
| 3. 教員以外 | 45人 | 19.9% |
| 4. 未定 | 12人 | 5.3% |

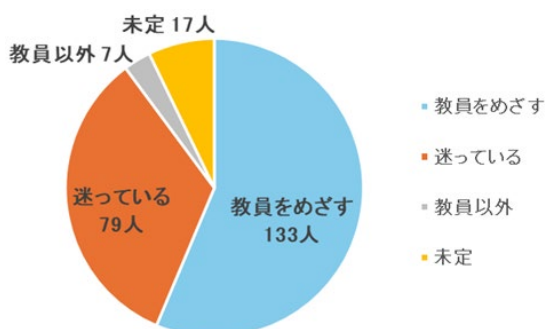


1回生入学時から2回生まではコロナ禍の影響を大きく受けたが、教育実習はほぼ例年どおり実施できた。教員志望者数は、3回生の教育実習後まで大きく変化しなかった。3回生の教育実習後に、迷っていた学生の中で、はっきり教員以外の方向を考える学生が増えた。

1 2019年度入学生の進路希望調査の推移

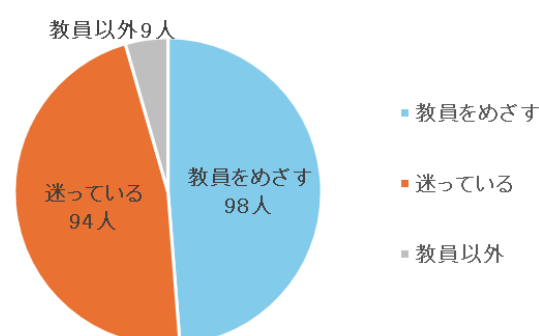
① 1回生入学時志望調査（4月～7月）（回答数 236人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 133人 | 56.4% |
| 2. 迷っている | 79人 | 33.5% |
| 3. 教員以外 | 7人 | 3.0% |
| 4. 未定 | 17人 | 7.2% |



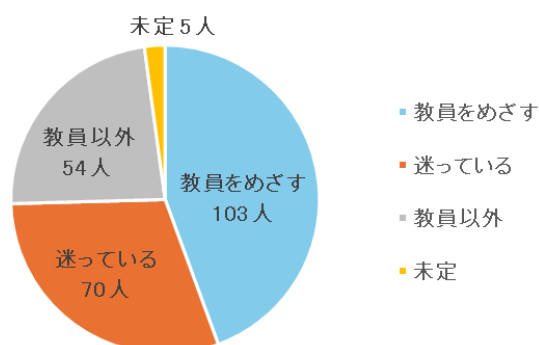
② 1回生コース決定時志望調査（11月）（回答数 201人）

| | | |
|-----------|-----|-------|
| 1. 教員をめざす | 98人 | 48.8% |
| 2. 迷っている | 94人 | 46.8% |
| 3. 教員以外 | 9人 | 4.5% |
| 4. 未定 | 0人 | 0.0% |



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 232人）

| | | |
|-----------|------|-------|
| 1. 教員をめざす | 103人 | 44.4% |
| 2. 迷っている | 70人 | 30.2% |
| 3. 教員以外 | 54人 | 23.3% |
| 4. 未定 | 5人 | 2.2% |

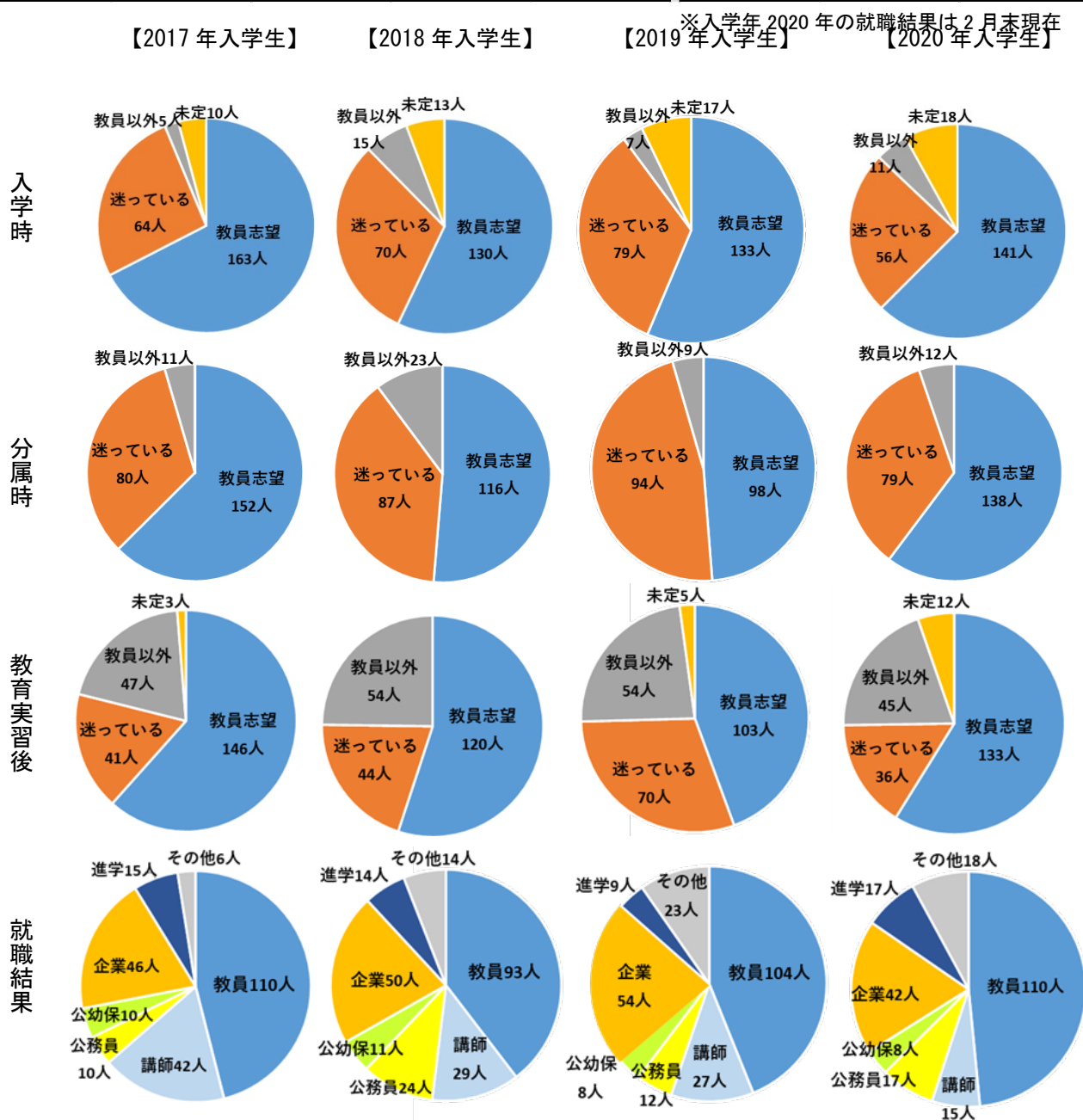


1回生11月時において迷いが生じ、教員志望者が大きく減少した。3回生の教育実習は、コロナ禍で例年のような現場実習ができなかった。実習後に、教員以外の方向を考える学生が50人以上となった。

2 教員志望者の推移と就職結果

上段：該当者／回答者の実人数
下段：該当者／回答者の割合

| 入学年 卒業年度 | 2017年 (H29) 2020年度 | 2018年 (H30) 2021年度 | 2019年 (R1) 2022年度 | 2020年 (R2) 2023年度 | 2021年 (R3) 2024年度 | 2022年 (R4) 2025年度 | 2023年 (R5) 2026年度 |
|--------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| 入学時教員 志望(1年6月) | 163人/242人 67.4% | 130人/228人 57.0% | 133人/236人 56.4% | 141人/226人 62.4% | 136人/239人 56.9% | 147人/232人 63.4% | 152人/242人 62.8% |
| 分属時教員 志望(1年11月) | 152人/243人 62.6% | 116人/226人 51.3% | 98人/201人 48.8% | 138人/229人 60.3% | 126人/239人 52.7% | 151人/222人 68.0% | 182人/241人 75.5% |
| 教育実習後 教員志望(3年) | 146人/237人 61.6% | 120人/218人 55.0% | 103人/232人 44.4% | 133人/226人 58.8% | 122人/230人 53.0% | 未実施 | 未実施 |
| 教員就職結果 (含講師) | 152人/239人 63.6% | 122人/235人 51.9% | 131人/237人 55.3% | 128人/227人 56.4% | — | — | — |

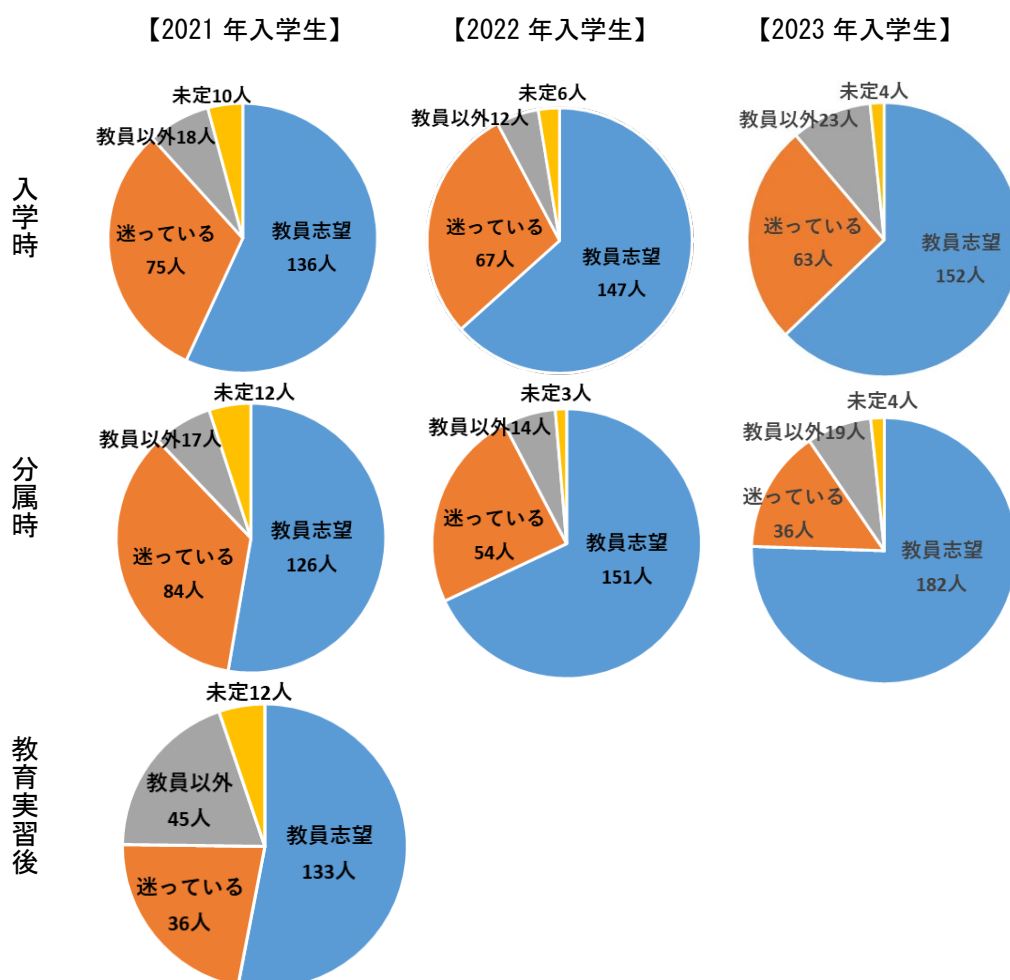


※入学年 2020 年の就職結果は 2 月末現在

学校教員として就職した者、次年度に向けて講師就職した者は、2020年度卒業生（2017年入学生）から、10%減少してきている。人数にして約20人の減少である。

今年度卒業生（2020年入学生）の特徴は、教員志望者数が、入学時から教育実習後まで大きく変動しなかった点である。教育実習では、学校教育の業務の多様さを実体験し、自信をなくし、進路に迷いが生じる者も多いが、教育実習直後のフォロー等が大切だと考える。

過去4年間の卒業生は、どの年度も50人前後が企業就職している。



1回生の入学時に比べ、分属時に教員志望者が減少する年度もあったが、ここ2年間は減少せず、教員志望を堅持している。

教育実習後に、迷っていた者の数が半数に減り、教員以外の進路を50人前後が考えるようになる。実際の企業就職も例年50人前後の結果となっている。

入学時調査で、教員以外の就職を希望、もしくは進路未定の者が、どの年度も20～30人程度いる。教員養成学部としての本学魅力、取り組みを今後も広く高校生に周知していく必要がある。

3 卒業時の就職状況からみる進路希望の推移

卒業時の就職決定先をグループ化して、学生個別の教員志望変遷を追ってみた。
それぞれの就職先のグループ別に教員志望の変遷をたどる。

【2020 年度入学生】

グループを次のように分けた。2023 年度卒業生 227 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 213 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

111 人（回答者 107 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

17 人（回答者 15 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

17 人（回答者 15 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

8 人（回答者 8 人）

E 【一般企業に採用された者】

42 人（回答者 40 人）

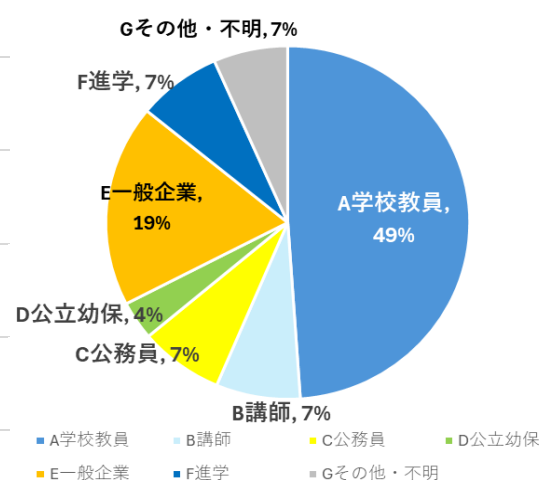
F 【大学院に進学した者含留学】

17 人（回答者 17 人）

G 【自営業・その他・不明】

15 人（回答者 11 人）（3 月末には、減少予想）

就職決定先別人数比（回答者227名）



※2020 年度入学生の就職結果は 2 月末現在

【2019 年度入学生】

グループを次のように分けた。2022 年度卒業生 237 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 196 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

104 人（回答者 88 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

27 人（回答者 21 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

12 人（回答者 10 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

8 人（回答者 4 人）

E 【一般企業に採用された者】

54 人（回答者 49 人）

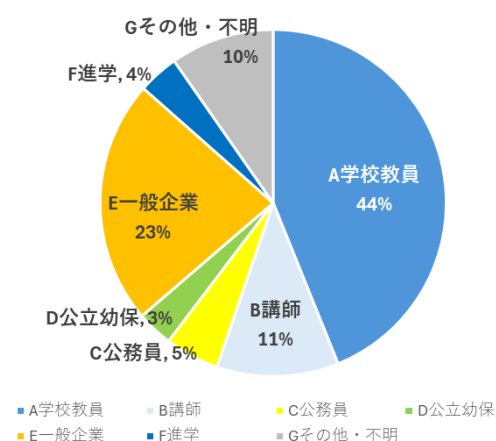
F 【大学院に進学した者含留学】

9 人（回答者 7 人）

G 【自営業・その他・不明】

23 人（回答者 17 人）

就職決定先別人数比（回答者237名）



【2018 年度入学生】

2021 年度卒業生 235 人のうち、3 回分の教員志望アンケートの回答を得ているのは 213 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

93 人 (回答者 90 人)

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

29 人 (回答者 24 人)

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

24 人 (回答者 21 人)

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

11 人 (回答者 11 人)

E 【一般企業に採用された者】

50 人 (回答者 43 人)

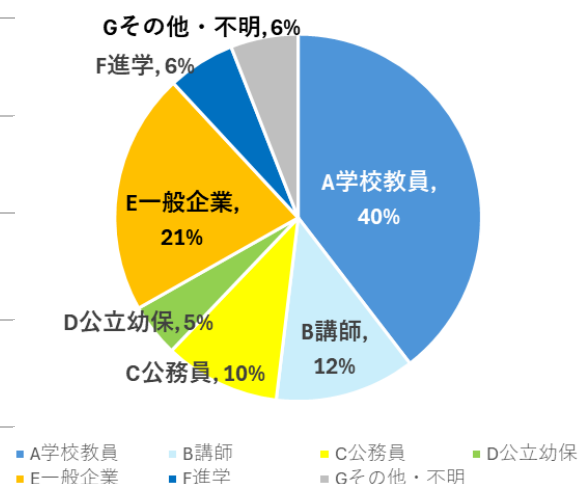
F 【大学院に進学した者含留学】

14 人 (回答者 12 人)

G 【自営業・その他・不明】

14 人 (回答者 12 人)

就職決定先別人数比 (回答者235名)



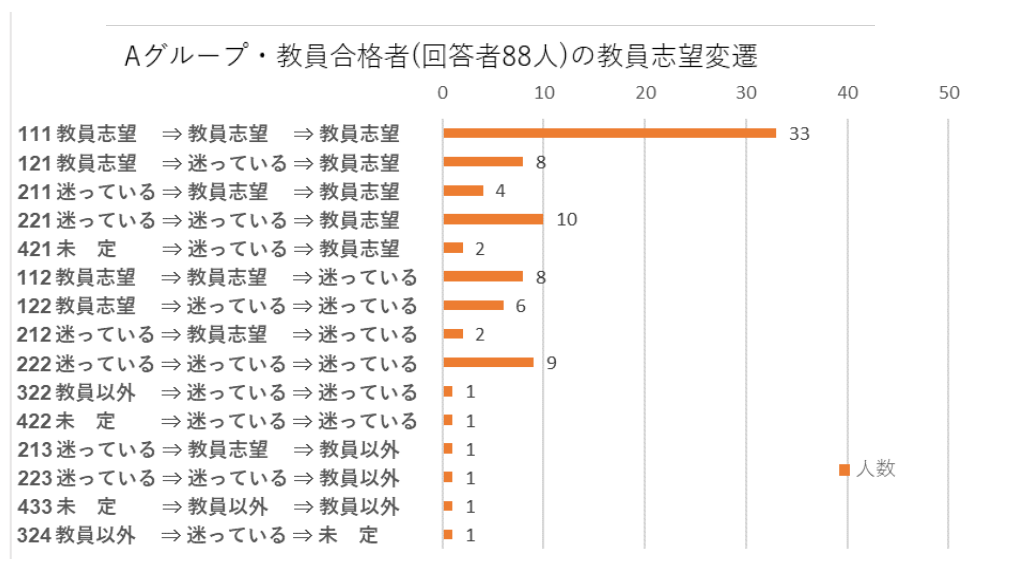
◆ AグループからGグループ7種類の卒業時の進路別グループの教員志望変遷パターン

志望調査項目 : 1 教員志望 2 教員になるか迷っている 3 教員以外をめざす 4 未定

調査時期 : 1 年入学時調査 ⇒ 1 年コース決定時 ⇒ 3 年教育実習後

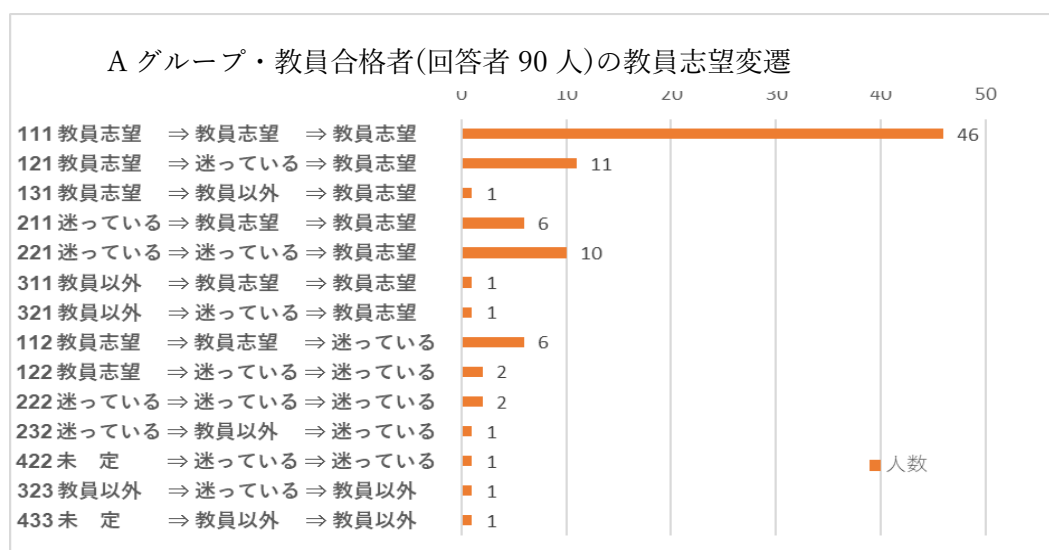
2019 年度入学生

【Aのグループ (教員) に属す学生 (回答者 88 人) の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2018 年度入学生との比較 〉

【Aのグループ（教員）に属す学生（回答者 90人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*入学後から卒業時までの教員志望の変化がなく、一貫しているものが多いが、途中で迷いが生じたり、ずっと迷いながらも最終的に教員志望に至り、採用試験に合格した者も一定数いる。

2019 年度入学生

【Bグループ（講師）に属す学生（回答数 21人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2018 年度入学生との比較 〉

【Bグループ（講師）に属す学生（回答数 24人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望の気持ちをいずれかの時期に持っている者が多い。

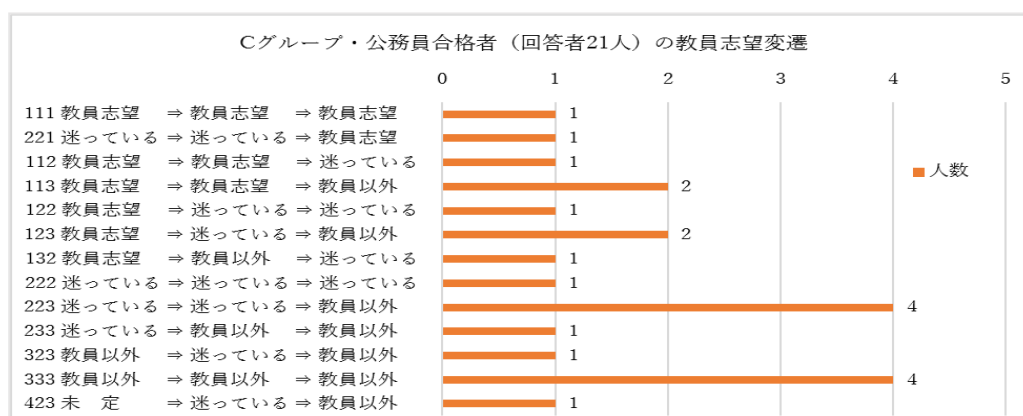
2019 年度入学生

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数10人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2018 年度入学生との比較 〉

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 21人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*ほとんどの者がいずれかの時期に教員以外と考えている。

教育を学び、学んだことを行政的視点で生かすため公務員をめざした者もいる。

2019 年度入学生

【Dグループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数4人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



〈 2018 年度入学生との比較 〉

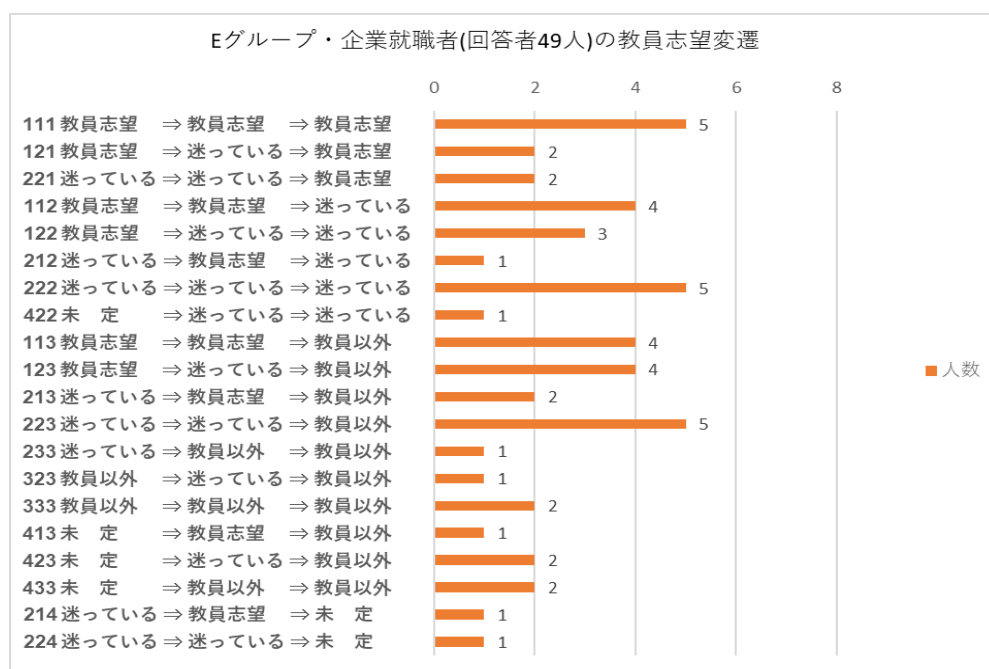
【Dグループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数11人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



*公立幼保の採用試験は市町の公務員試験を受験することになるが、幼稚園教諭も保育士も教員志望である。採用試験は幼稚園教諭と保育士を分けて実施される場合と一緒に募集される場合がある。

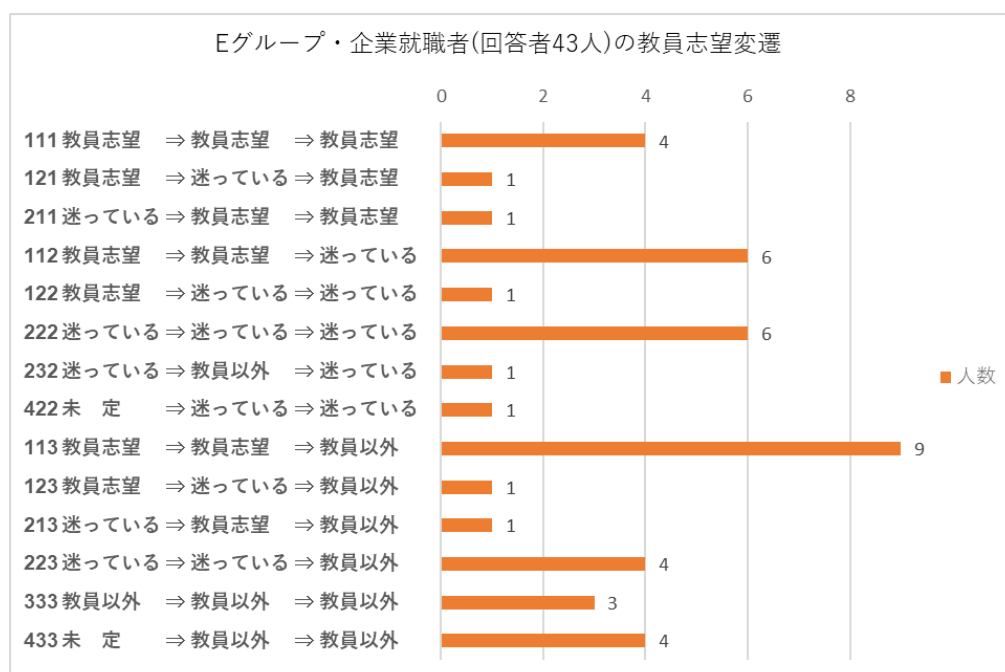
2019年度入学生

【Eグループ（一般企業）に属す学生（回答数49人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2018年度入学生との比較 〉

【Eグループ（一般企業）に属す学生（回答数 43人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*入学時点から「迷っている」「教員以外」「未定」と回答している者が多い。また、いずれかの時期に迷いが生じ、教育実習後は、「教員以外」や「迷っている」と答えている。

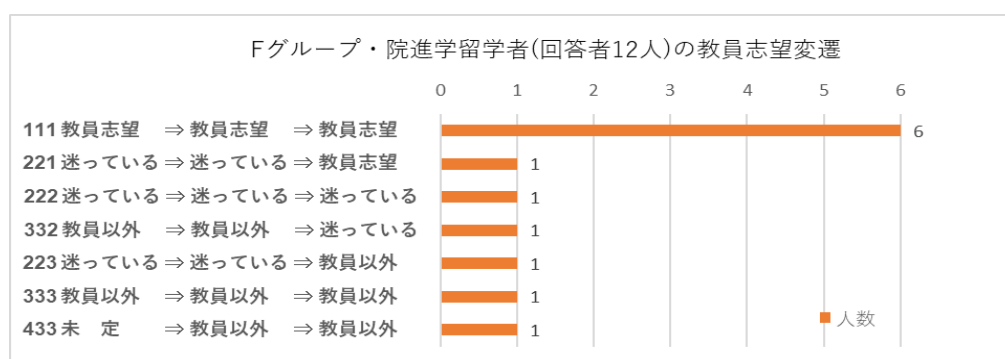
2019 年度入学生

【Fグループ（院進学・留学）に属す学生（回答数7人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2018 年度入学生との比較 〉

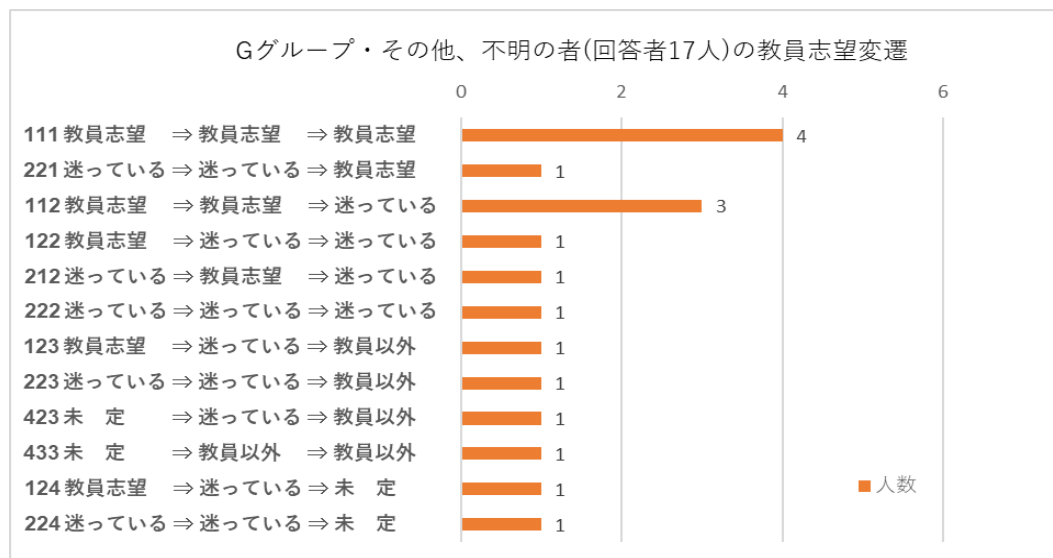
【Fグループ（院進学・留学）に属す学生（回答数12人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望で大学院に進学する者とともに、在学中に関心が深まった他の分野での学びを深めたい者も一定数いる。

2019 年度入学生

【Gグループ（自営業・その他）に属す学生（回答数17人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



〈 2018 年度入学生との比較 〉

【Gグループ（自営業・その他）に属す学生（回答数12人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



*いずれかの時期に迷いがある者が多い。

【考察】

2020年度卒業生、2021年度卒業生、2022年度卒業生、2023年度卒業生の教員志望の変遷を辿ってみた。これらの年度は、大学在学時のいずれかの時期にコロナ禍の影響を受けている。自分自身の大学生活や授業の形態が大きく変わり、オンラインのシステムが可能なかぎり取り入れられ、教員免許取得にむけた教育実習においてコロナ禍の影響を大きく受けた年度もある。いずれの年度においても、実習先の小学校や中学校と連携を密に取りつつ、その時々状況に応じて最善と思われる取り組みが進められてきた。教育実習後、現場の教師の働きぶり、教育活動の多様さに自信をなくし、教員志望が揺らぐ学生も多いが、時期を置かず種々のサポートや声かけをすることにより、本来の目標に立ち返っていく学生の姿も見受けられた。教育実習での経験は、教員志望をさらに確固たるものにしたり、進路を迷っている学生が、教員以外を目指す大きな分岐点になっているように思われる。

教員養成学部の学生には「知・徳・体」を一体で育む学校教育の重要性を深く受け止めてほしい。そして教育の仕事に携わる素晴らしさ、未来の担い手となる子どもたちの成長を育む教員の仕事のやりがいをしっかり受け止め、一步一步前進してくれることを願っている。

(西坊 晴美)

教育実践総合センター年報 第7号

2024年3月発行

滋賀大学教育学部 教育実践総合センター

〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号

TEL 077-537-7993(直通)

FAX 077-537-7909

<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>
